
杜の都で待つ人は

はる姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

杜の都で待つ人は

【Nコード】

N19630

【作者名】

はる姫

【あらすじ】

皇太子の自覚がない大国の皇子様と、見目麗しい小国の王女様の政略結婚のお話です。結婚が嫌だったはずの皇太子ドューは、徐々に許嫁の王女アヤに心惹かれていくが……。二人の結婚を阻止したい者、それに国同士の思惑が絡み、二人は結ばれることが出来るのか

*

パーレス帝国、首都サウザンタワーを眼下に立つエイツリー山。その山頂グリリフ宮殿、これがワコク大陸に君臨する名高い皇帝の居宮である。麓から頂に渡り針葉樹に囲まれ鋭角な石垣が敵の進入を拒む。白い石で造られた回廊で繋ぎ渡されて壮大な帝宮を形成する。く白い石で作られた回廊で繋ぎ渡されて壮大な帝宮を形成する。その最奥、帝の居間にて、椅子に深く腰掛けた皇帝ワガセヒロは息を吐き、目の前に立つ宰相リキュウへ問う。

「あれには、覇気というものがあるのだろうか…」

定例の報告に加え皇太子デュランの度重なる閣議欠席と、年頃の娘を持つ高位の貴族達からの抗議の報告を受けての発言であった。

長子デュランは父であるワガセヒロの目から見ても、美男で長身、体躯も申し分なかった。しかし如何せん中身が伴っていないのだ。閣議はサボる、令嬢方に手を出す、皇宮を抜け出す、数え上げてもキリが無い。注意をすれば逆に廃太子にしろと迫って来る始末。

彼には強大なパーレス帝国の次期皇帝という自覚が、みじんも感じられないのだ。王妃と共に愛情と威厳をもって育てたつもりがどこでどう間違ったのか…。

忠誠を誓う皇帝に苦笑を向けられ、宰相は深く跪礼する。

「陛下。やはり皇太子殿下のご婚儀を早めるのが一番かと。婚姻が成れば、彼らへの牽制になります。」

殿下も御子がお生まれになれば、落ち着きが出るかと…」

いつもは力強い宰相リキュウの語尾が、心なしか小さく聴こえる。

ワガセヒロ帝は目を閉じ顔をあげた。沈黙が流れる。

そして長い息を吐き、そのように、と告げた。

「殿下。この度はご婚儀の日取り決定、おめでとугоざいます。」
ペンを握る指に力が入り、線が歪んだ。声の方へ顔を向ける。

「お前、殺されたいのか」
皇太子デュランは、涼しい顔で声を掛けてきた近衛隊長タンギユ
ーを、不機嫌極まりない顔で睨んだ。

「昨晚、城下の歓楽街ブンチヨウでお楽しみ我真最中、近衛兵らに
皇宮の執務室へと拉致されて来ていたのだ。」

「そんなやつらの隊長に剣を突きつけたい欲求にかられるも、己の
周囲に積まれた書類の山を一旦見つめ、こちらが先と意識を変える。
途端、右手側から都合良く書類が差し出され、息つく暇も無く書類
決済が続く。抗議の視線を上げれば、側近文官ダズンの見たことな
い愛想笑にぶつかった。」

「ダズン、腹でも痛いのか。」

「いいえ。殿下、御手が止まっておりまする」

デュランは肩を落とした。

「……その口調止める」

ダズンは、では…と目尻を下げた。

「馬鹿皇子、黙って仕事しろ」

悪友の笑っていない笑顔が怖い。その上、言葉と裏腹な声音が不気味さを増す。デュランは夢中で腕を動かし、闇雲に決済を続けた。

「おざなりな裁量は後で取り返しがつかなくなるぞ。きちんと目を通せ」

いい調子だと独りごちているところに、ダズンの小言が飛んできた。

取り返しのつかないことをしない為にお前たち側近がいるのだから。第一ここに上がっているものは、未来の宰相候補で皇太子の幼馴染ダズンがすでに選査したものだ。

「目を通す必要はない！」

デュランの宣言が室にむなしく響く。ダズンは一層引きつった笑顔になり、デュランへ繰り出す書類の手を速めた。近衛隊長タンギューは無表情で隅に控えている。デュランは己の執務室に漂う、居た堪れない空気に納得がいかなかった。

窓の日が朱に染まり、机上で動くペンの影が長くなった。

どうにか書類の山も減り、デュランが大きく手足を伸ばす。それを合図のように、タンギューが沈黙を破った。

「アヤカーナ王女のご入宮は三日後、そして婚儀は三ヶ月後か」

デュランの肩がぴくりと反応する。だが、会話には加わらない。

「姫君は俺たちの四つ下、15才か。まだ若…」

ダズンの言葉をタンギューがさえぎる。

「十分、年頃の姫君だ。」

殿下 もう“お遊び”はお仕舞にして身辺整理はきちんとしとけ
「よ」

デュランは頭の後ろで腕を組んだまま、ああと心の中で納得していた。

悪友二人のいつもと違う態度は、許婚であるアヤカーナ姫、延いてはケセン王国へ対する俺の配慮が足らんということか。

パールレス帝国の最北に位置するケセン王国の王女アヤカーナ・デラ・ケセン。彼女は、弱小のケセン王国から送られる、このパールレス帝国への体のよい人質だ。

弱小とはいえケセン王国は、我々が敵対する大ガンシユ国と我が国の間に位置し、軍事上とても重要な役割を持つ。それゆえ、パールレス帝国はケセン王女を、皇太子の正妃として迎えるのである。

そもそもこの婚約が整えられたのは11年前、大ガンシユとの緊張が高まっていた時だった。

あれから11年経た今でも、ガンシユとの関係は変わっていない。この長期に渡る無変化は油断を齎し、もたらパールの宮廷はいつの間にかガンシユへの緊張を緩めていた。

無益だと言つて、ケセン王国との婚約破棄を口にする臣下も出ていたほどであった。

ところが一ヶ月前、そのガンシユがケセンへ目的不明の接触を始めていると、報告が上がった。廷臣らがざわめいたのは言うまでもない。

あの時点の約定では輿入れの時期は、アヤカーナ王女が18の歳とされた。今王女は15歳。

本来ならば三年後の婚儀が早まったのには、そんな内情があった。

はずなのに、いつの間にかこの急な婚儀の繰上げ理由が、“皇太子の行状が起因”となっている。この話はデュランにとって全く面

白くない話だし、婚姻に対する祝辞などもつてのほかだった。

出来ることなら、会った事もない女との婚姻などしたくないし、政にも興味がない。皇太子など辞めてしまいたい。これがデュランの本音だった。

「ドユー、聞いているのか」

「あ？」

タンギューとダズンの口から嘆め息が落ちる。

オイ！とダズンがめつたに見せない真剣な眼を向ける。

乗り出して来たダズンの顔が近い。

「アヤカーナ王女を表面上だけでもいい、大事にしる。

今はまだガンシユの動きがつかめない、皇太子としてパーレスの国益を第一に考えてくれ」

「もつ、もちろんそのつもりだダズン。言われなくても判っている」
ダズンの迫力に、デュランは椅子のまま後退する。

「カシラ王太子の病死で空いていた、大ガンシユ国王太子の椅子。

第二から第五王子をさしおいて、末の第六王子が立太子するぞ。

末弟で、しかもこの第六王子の母は領主の娘と身分がかなり低い。その王子が王太子などあり得ない話だ。

ガンシユで何か起きている。」

後方から響くタンギューの低い声が、事の重さを告げている。

デュランはダズンとタンギューを交互に見やり、端整な顔を見つめる青くした。

皇太子のその様子に二人は開いた口が塞がらない。涙が出るかと思つた。そんな側近二人は声をそろえてデュランに告げた。

「朝の閣議に出ろ！

報告書に目を通せ！！」

* (後書き)

はじめまして。はる姫と申します。

恥かしながら処女小説モドキ(。|。;Aです。誤字脱字等、ごぞ
いましたらご指摘下さい。

週一UPでまったり進行してまいります。

宜しくお願い致します(*。|。)(*)。|。)

パレス帝国グリリフ宮殿入宮10日目。

アヤカーナには間抜けな欠伸をすること以外、何もすることがなかった。14日間、馬車に揺られていた体を休めよ、という配慮だろうが、やはり寂しい。

重くて動きにくい豪華なドレスに身を包み、宛がわれた白と金が基調の広い居間に、今日もアヤカーナは独りきり。猫足の長椅子に足を乗せて天井を眺めていた。目を閉じれば脳裏に、初めて目にした、杜の都サウザンタワーの町並みが浮かぶ。

祖国ケセンを出立して14日目。果てしなく続くのかと思われた揺れを感じなくなった。

途端、首都へ入ったことを告げられた。白い石が敷き詰められた広い街路。中央と左右に大きな櫂^{けや}が整然と並び、その広がった枝葉が緑のアーチを作っている。見事な造りにアヤカーナは馬車の窓に釘付けになった。

城下へと近づくほど人波が増え喧騒が耳に入る。皆笑顔だ。活気が違う。

途切れることがない大きな石造りの建物、物売りの声、溢れる物資。この国は豊かなのだとアヤカーナは思った。大路^{おおじ}に入っても緑のアーチは続く。大都会なのに緑が溢れている。サウザンタワーが「杜の都」と呼ばれる由縁でもあった。葉からこぼれる光がチラチラとアヤカーナの目をくすぐる。その輝きが眩しくてアヤカーナは瞳を閉じた。ケセンから遠く離れた地に居ることをかみ締めながら。

眩しい…。天井の大きなシャンデリアが、日陽に反射して目に沁みる。煌びやかなシャンデリアの映えは、まるでこの国の皇太子たちのようだ。

皇帝や皇后、皇太子には入宮した直後、廷臣貴族たちが居並ぶ中
拝謁した。御前へと歩む途すがら、皆の様に驚いた顔が眼につい
た。

なぜだろう。何か自分に至らないことがあるのだろうか。祖国の
王宮とは段違いな謁見の間に圧倒されているアヤカーナには、理由
を尋ねられる人間さえも付き添っていない。孤独な輿入れだった。

国境の町モートヨシで、持参した全ての嫁入り道具と持ち物が国
許へ返却され、馴染みの侍女たちまでも帰された。ケセン王国の人
物一切の持ち込みが、禁止だと言われた。理由を尋ねれば 慣
例である故 ですって。両国の力関係から言ってもケセン王国
は黙って従うほかない。アヤカーナは身ひとつで国境を越えた。

だが幸いにも一番大切な物は取り上げられなかった。それはパー
レスより毎年贈られていたデュランの姿絵だ。成長してゆく姿絵を
眺め、デュランを想い、パーレスを感じ、時を過ごしてきた。アヤ
カーナにとってデュランは愛しい婚約者で、パーレスでの心の拠り
所であった。

だのにあの初日以来、婚約者であるデュラン皇子とは会っていない。
あの時交わした、二人の初めての言葉は、ようこそとありがと
うございます。のたった一言。私は歓迎されていないのだろうか。

ひとつ考えると、次から次へと疑問が湧き上がり、不安と不信が
アヤカーナの身を支配しようとする。

「いけないっ」

突如背筋を伸ばし、頭を左右に振る。母譲りの薄いストロベリー
ブロンドの巻き毛が一房目の前で踊っていた。

乱れた髪をもとへ戻そうと手に取ったそれに母の顔が浮かぶ。

お母様だったら、にっと笑ってきつとこつおっしやる。

「アーヤ、ラッキーよ。ケセンは貴女の嫁入り費用が浮いたじゃない。」

パーレスの皇帝は全て貴女に良かれと思ってなさって下さっているのよ。感謝いたしましょう。」

そして、私を抱きしめてこつ付け加えるのだわ。

「貴女が嫁国パーレス帝国で幸せになる為には、皆を信じることでよ。愛しなさい、そして人の愛を信じなさい」

祖国で自分を心配しているはずであるう母のお茶目な笑顔を思い浮かべる。母の笑顔は周りを桃色に染め不安を追い払ってくれる。

お父様も弟達も皆、笑って私を励ましてくれるはず。アヤカーナはいつもの陽気が体中に戻ってくるのが分かった。

信じましょう。ドュラン皇太子の愛を、パーレス帝国を。

胸の前で両手を合わせ、顎を上げて瞳を潤ませる。

そんな乙女に浸っていたアヤカーナの耳にドアを叩く音が聞こえた。

アヤカーナに三名の侍女が就いた。タイハク侯爵令嬢アザレア、ヤンフォレスト伯爵令嬢ハンスイ、フォンテ子爵令嬢ケイト、身分からは皇太子妃も夢ではない方たちだ。アヤカーナは彼女達の己の美しさを熟知した出で立ちに驚き、挑戦的な視線に戸惑いを覚えた。

紹介を終え、女官長より知らされたパーレスの侍女制度が、アヤカーナにとっては不慣れなものであった。

ケセンでは、侍女と言えば身の回りを整えてくれる、ある程度身分のある召使を意味していた。しかしパーレスでの侍女は貴族でなければならず、高貴な主人への助言をする者であって、召使ではないとのこと。要するにお話相手ということか。

などと悩んでいる暇も貰えず。早速アザレアの提案で、『皇太子妃の庭』とやらを訪れることになった。そこは皇太子の居宮である東宮の一角にあると告げられた。

こちらへと案内された通路は、鋭角に刈られた、高い緑の生垣に左右を囲まれており、前方が見えない。何の説明も無い。アヤカーナは不安を感じ、おのずと歩みが遅れる。

「大丈夫です。この垣根を抜けた所に庭園があります」
耳元で囁かれた。付き添っている女官長だ。振り向いて柔らかく笑むと、女官長も笑みを返してくれた。

生垣が途切れ、視界が広がる。路地の両側に枝垂れ咲いている白い花はまるで花の滝のようで美しい。ここが庭園の入り口だ。

「このお花小さくて可愛い」
アヤカーナは、立ち止まると白い花に触れる。
「お勞しい、国花もご存じないとは」
険のあるアザレアの言葉が背中に突き刺さる。

振り返れば侍女達が並んで笑っている。その顔に浮かんでいるのは悪意のある笑みだ。

知っていると言いつ返そうとしたアヤカーナの視界を青いドレスが横切る。付き添っていた年高の女官長だ。アヤカーナの意識は流れるような動作で隣に並んだ女官長へと移る。女官長は落ち着いた声で話し始めた。

「アヤカーナ様、それはパールレス萩でございます」

「…このお花が」

「パールレス萩はパールレス帝国の国花です。このように枝垂れ、どのような風にも柔軟に対応が出来るのでございますよ。」

女官長は微笑んで続ける。

「そして、紫紅の花は皇后さまの萩、白の花は皇太子妃さまの萩と言われております」

「私の花…」

香りを確かめようと、花に顔を寄せたアヤカーナの耳に、短い悲鳴が聞こえた。

女官長が声の主ハンスイの許へ駆け寄る。

「如何いたしました。ハンスイ様？」

ハンスイは大げさに震えながら扇子をアザレアに向ける。

「アザレア様の首筋に虫が傷を二つも残しているわ。」

女官長、早くお手当を！」

ハンスイが示した先をみつめ、ケイトはうつとりと口を開く。

「アザレア様は傷までもお綺麗ですわ。まるで花卉はなびらが散っているみたい」

女官長はアザレアの傷を認めても、一步退いたまま動こうとはしない。アヤカーナは心配でアザレアの側へ寄った。大丈夫ですか。と声を掛けるアヤカーナにアザレアはしれじれと微笑む。

「まあハンスイもケイトも騒がないで。これはとても高貴な虫がお付けになったの。」

治療だなんて恐れ多いわ」

すぐさまお庭案内はお開きとなった。怪我をしたアザレア様を連れまわすのは失礼という理由だった。

そおつと庭へ続くガラス張りのドアのノブを廻す。頭を低くしてノブを廻したまま静かに押す。アヤカーナはノブを廻す音よりドアが開く音の方が響くことにちよつと驚く。

出来るだけ小さくドアを開け外へとすべり出る。眼前には薄オレンジの月光が照らす静かな秋夜の世界が広がっていた。

「ちょっとだけ一人で庭を散歩させてね」

部屋の中に向かって呟く。ドアを戻すと、闇にその身を隠しても
らうため、物陰へと足を踏み出す。

位置は大体頭の中に入っている。とにかく外の空気を思い切り吸
いたい。ただそれだけだ。

1・(後書き)

次話から週一UPを予定しております。

どうぞお付き合いただければ嬉しいです。

誤字脱字等、ご指摘よろしくお願い致します。

「王女は、毎晩庭に出て何をしているんだ。」

ドユランは思い出したように呟く。自室の長椅子に横になって手にした絵画を眺めていた。

ダズンは側の椅子に座って書類に目を通してしている。午後の執務を終えての憩い時だった。

パールス帝国皇太子の居宮は宮殿の東側奥にあり、東宮と呼ばれていた。もちろん皇太子の家族が暮らすのもこの東宮になる。また皇太子妃となるアヤカーナに与えられている部屋はこの東宮の下階にあり、婚姻が成れば、上階の皇太子妃の部屋に移ることとなる。

その東宮上階のドユランの居室からは、小ぶりな皇太子妃の庭がよく見渡せる。それは、何代か前の皇太子妃が、愛する皇太子へ激務の慰めにと造った庭で、皇太子の目に入るように配置されていた。

その庭の亭に、アヤカーナ王女が薄着で座り込んでいるのを、ドユランはここ毎夜目にしていた。

本人は一人で庭に出ているつもりだろうが、庭の隅には近衛の影が確認できた。

月の光が、夜着を透かして少女の体の線を晒しているのを、本人は気付いているのだろうか。俺には関係無いと打ち消してみるも、気に掛かる。

ドユランは、彼女の行動に拘泥する己が苛立たしく思った。

「息抜きか、憂さ晴らしだろ。」

ダズンの存外な回答を、ドユランは問い返す。

「憂さ晴らし？」

「可哀そうに。侍女のレディ・アザレア達に、かなり遊ばれている様子だぞ。」

ドユランは目を丸くした。

アザレアとはあのタイハク候のアザレアか。パーレス貴族が侍女に就いているのか。

「どうして、馴染みの侍女を連れて来ていないのだ。」

「……………」

ダズンは書類をトンと揃えて置くと、慣れた様子で懇切丁寧にドユランに話す。

「他国からのパーレス皇家への輿入れは“他国の使用人、物の持ち入れ一切禁止”が慣例だ。

しかしながら、皇帝陛下のご恩情で大概は許可されている。」
ドユランは頷いて先を促す。

「この度のケセン王国の輿入れに関しては、ご婚儀相手の皇太子殿下が持ち込み否のご決済を下し、皇帝陛下まで上がらなかった。

結果、慣例が行使され、国境にてアヤカーナ王女が持参した金品調度、付き添ってきた人士はすべて送り返された。 以上」

ドユランは目を見開いた。

覚えがある。せめてもの反抗の印として、己の婚儀に関する書類はすべて‘否’としたのだ。

両耳が熱くなるのを感じ、絵を持つ手に力が入る。

ダズンの咎めるような視線が突き刺さり、思わず手にしていた絵画をダズンの前へ突き出していた。

「じ、実物とこの姿絵が全く違うってのは、パーレス帝国に対するケセン王国の故意としか思えんだろ」

ダズンは肩を落とした。ドユランが手にしている毎年交換していたケセン側の絵姿が、本人とは似ても似つかない姿だと判明したのは、先日アヤカーナ姫ご入宮の折だ。

件の書類決済は大分前の仕業になる。つじつまが合っていない。

「アヤカーナ王女の絵姿は、皇太子殿下好みの女性に沿わせて描いていたそうだ」

「は？この、赤毛に色黒、そのうえ斑点付き、がか」
ドユランが声を荒げた。

確かに、ドユランの指差す姿絵に描かれた少女は、赤毛で蜂蜜色の肌、つぶれた鼻の上には雀斑そばかすが散らばっている。お世辞にも美しいとは言いがたい。ケセンから贈られてくる絵姿は、代々この容姿が成長した物だった。

これのお蔭で、パーレス宮廷は赤毛の色黒少女が嫁いで来るものと思っていた。

ところが、宮殿に現れた王女は、金色の髪をした、しみひとつない乳白色の肌を持つ美少女だった。

皇族を始め、その場に居合わせた誰しもが驚くほどの、可憐な少女は、皇帝達が待つ玉座へと優雅に歩んできた。金色にゆれる髪は、差し込む光の加減よって薄紅色を呈し、真直ぐに見上げた大きな瞳はグレイ、そしてこぼれる笑みの少女に膝をつかれ、ドユランはあの時どうして良いのか分からなかった。

「何でも、姫君の従兄弟君きみのご進言による、ということだ。」
息を吐くと、ダズンは笑う。

「随分と間違った情報を進言したものだな。」

ドユランはダズンをねめつける。

「偽証で国際問題になるとは思わなかったのか」

「ケセン王妃が、嫁いで仕舞えばこっちのもの。と笑っていたそう
だ」

「冗談じゃない、と口の中で呟いてドユランはタンギューを睨んだ。ケセンの所業は納得いかない。しかし、それ以上解せないのは他の処にある。」

最近は何も欠かさず参加している。報告書・書類もきちんと目を通して決済し、真面目に皇太子業をこなしている。なのに、こつも色々と俺が知らないことをダズンは知っているのだ。それも俺の許婚であるアヤカーナのことを、だ。彼女に関する権限は皇太子にあるはず、…越権しているのは誰だ。

握ったままだった姿絵を下に置き、ダズンの目を見据える。

「近衛隊長タンギューがアヤカーナの護衛に就いたのは、誰の命令だ」

おや、と思つた。いつもは益暗な幼なじみの真摯さに胸が沸く。

だが、ダズンは無表情を装う。

「リキユウ宰相閣下だ」

侍女の件もリキユウが…。ドユランの眉間が狭まる。

「タンギューを外せ」

「…換わりに誰をつける」

「いらん」

ダズンは肩が落ちるのを我慢できなかった。…短慮な。やはり益暗は益暗なままか。

ドユランが片手をあげる。

「今宵は誰もいらぬ。護衛には俺が就く。」

ドユランは微笑わらっていた。

「ダズン心配するな。庭で王女と月を眺める。」

「お目覚めですか」

女官の静かな声が聞こえ、やっと起きれる、とアヤカーナは思っ

た。皇太子妃は呼び掛けが無いうちは起床してはいけない、と初日に教わった。

それ以降、毎朝声が掛かるのを、布団の中でじっと待っているのだ。お陰で、綺麗な乳白石の天井に広がる、草や花が複雑に絡み合った彫刻の細部まで虚で描けるかもしれない。

アヤカーナはゆっくりと寝台に身を起こし、脚を降ろす。顔を上げると、いつもの女官が桶と水差しを手に持ち、頭を垂れていた。

おはようと笑顔を向けると女官も薄く微笑って返す。これはアヤカーナと女官のちよつとた習慣だ。

初めのうち、彼女達と懇親になりたくて、天井の四隅に彫りこまれた鳥や花を指さし、あれこれ尋ねたりした。しかし、皆つらそうに首を振るばかりだった。

もしかして、と思った。話すのが駄目ならば、と一つ一つ感謝の笑顔を向けていたら、誰もが小さな笑顔を返してくれるようになった。

此処パーレス帝国の宮廷は全てにおいて格式張っており、何より皇族のしきたりが厳守されている。皇族と使用人のけじめも然りだった。

アヤカーナは何となくだが、侍女が貴族でなければならないという意味を理解していた。パーレスでは貴人が召使や下官から助言を受けるわけにはいかない、いや彼らには助言が出来ないのだ。それが高位になる程、複雑なしきたりを正しく指南出来るのは自ずと高位の人間になるのだ。

パーレスを理解していくと、アヤカーナは他国者の自分に就いてくれている三人の侍女への感謝が深くなる。

あのご令嬢たちの言動はすべて私のためを思っていることなのだ…、と呪文の様に言い聞かせ、心の中で感謝する。

女官達に幫助され、洗面、身支度、食事と時間通り決まった工程を終える。次は、侍女たちとの時間が待っている。

2・(後書き)

デュランとアヤカーナの庭場面まで
行けなかった。行きたかったのに。(TへT)

「アヤカーナ様、閨房学けいぼうのお進み具合は如何ですか」

アヤカーナの着席と同時に、紅の唇が微笑わらい含みに開く。

居間のテーブルをアザレア、サンスイ、ケイトが囲み、アヤカーナの着席とともに会話が始まる。口火を切るのはアザレア。これが侍女達との一日の始まりだ。

「殿下のご嗜好など、私たちで宜しければご伝授いたしますわ、ね」
サンスイが、テーブルに置かれたアヤカーナの指先を軽く握って首を傾かしげる。他の二人の首も傾いていた。

「どうもありがとうございます。」
アヤカーナは嬉しそうに笑う。

そして、思い出したように、ごめんなさい、と顔を曇らせた。
「教義のご本を所望しているのですが、まだ届いておりません。もう少し。」

アザレアが隅に控えている女官長を振り返る。女官長は無表情で立ったままだ。

居間の空気が変わったことに、アヤカーナは戸惑う。勉強をしていなかった私が悪いのだ。

庭での一件来、心配で何度かアザレアに怪我の見舞いを申し上げた。会う度に氣遣っていたら、あれは怪我ではなく男性の所有欲の証だ、とアザレアに一蹴された。意味が分からず、きよとんと瞬いていると、息を吐かれ、閨房学を学ぶよう強く勧められたのだ。

「ごめんなさい、とまた口を開きかける。せつな、風を感じた。顔を上げると三人が立ちあがり、艶やかに笑^えんでいる。ケイトが目を細めて告げた。

「図書室へ参りましょう。よい閨房の教本がございますわ」

小柄なアヤカーナは早足で宮殿の回廊を進む。前に行くアザレア達は歩調をゆるめることはない。後ろには女官長、護衛のタンギユーと近衛兵が続いている。

回廊の両側には大きな窓が並び、内に陽の光を満たす。ところどころ、碧^{あお}く輝くのは宮殿の屋根、白い木の枝には黄色の葉が輝いている。

前方から来る人々が、波の割れるように脇へと退き、窓を背に軽く腰を折る。アヤカーナは彼らの視線が難いで行く苦痛をやり過^すす。図書室はまだなのだろうか。

不意に、先導している三人の歩みが止まった。図書室へ着いたのかとアヤカーナは首を回す。

違う。アザレアを筆頭としたこちら側と、ドレスを召した方々の集団が対峙している。

アヤカーナは、道を譲ろうと思った。が、動けない。女官長に強く腕を掴まれていた。

「そのまま、おっとり構えていらっしやませ」

アヤカーナは目線^{うなず}だけで頷く。微笑んでいる女官長に、緊張で笑顔を返せない。

「アザレア殿、お退^どき下さい」

女の水色のドレスに見合った、冷たい声が長廊に響いた。

アザレアはまあ、と目を丸くした。そして、くつりと微笑^{わら}う。

「お退きになるのは、そちらでございましょう。ニコル殿」

「公爵令嬢フォンテーターヌが通ります。」

ニコルと呼ばれた女は、口元を覆っていた扇を閉じ、それを横に振る。

「道を空けるよう。」

アザレアはドレスをつまむと、軽く膝を折った。ハンスイとケイトもそれに倣う。

「王女殿下がお通りになります。お退き下さりますよう」

哄笑が向こうから降ってくる。嘲笑に混じり、ケセンにハイネスなどという称号があるのか、タイハク候は腰抜け、などと中傷も聞こえた。アヤカーナの目に、アザレア達の表情は見えない。隣の女官長の平生と変らぬ態度が支えた。

囁しさをやり過ぎ、アザレアが顎をあげる。微笑んだままだ。

「さて運動はお済みか。速くお退き下さい。それとも
後ろを振り向き、肩をあげる。」

「近衛隊長に任を全うして頂くほうが宜しいかしら
水を打ったような静寂が立ち込める。」

近衛隊長の護衛。その意味するところは、ケセン王女が、両陛下、殿下とご同列ということ。無礼あらば、斬り捨てられる。

「ニコルさま、皆さま。道をお譲りして差し上げましょう」

ドレスの塊が割れ、緑色のドレスが全身を現す。緑色の上には、深紅の髪に翠色の瞳、鼻の頭に雀斑そぼかすをのせた、愛らしい顔があった。緑色の女性は、ごきげんようハイネス、と膝を折りそろりと脇に避ける。その後を追うように女の集団が散った。

アザレアは背筋を伸ばし優雅にその間を通り過ぎる。もちろんアヤカーナも目一杯おっとりと三人に続いた。

大きな扉をくぐり、アヤカーナは目を見張る。グリリフ宮殿の図書室は、天井まで中央が吹き抜けていた。その中心にある、湾曲し

た大きな白い天窓から光が降り注ぎ、四方壁一面に本が並んでいるのを三階まで見渡せた。光沢のある赤黒色の重厚な階段が上階へと渡され、階段から通路に至る全ての手摺に削られた、曲線のアラベスク彫刻が別世界を錯覚させた。その素晴らしさが、アヤカーナ頭の中から先程の廊下での出来事も忘れさせてくれる。

誰も廊下での件を口にしない。聞きたいことがないと言えは嘘になるが、必要なことは必ず教えてくれるはず。アヤカーナはアザレア達を信じていた。

女官長に促され、中央のテーブルに着く。改めて頭をぐるりと廻らす、こんなに沢山の本を見たのは生まれて初めてだ。多くの蔵書の中、目的の本はどうやって見つけるのだろう。ワクワクする。

「タンギュー。さあ閨房学の本をこれへ」

アザレアの命令にタンギューは目を見開いた。

「なぜ私が」

アザレアがふん、と鼻で息をする。

「昔から、その手の本は男性に聞くのが一番。所在など直ぐに頭に浮かぶでしょ」

タンギューの肩が落ちる。

「アザレア。確かにいろいろ浮かぶ本はある。だが女性向けでないことは確かだ」

一斉に甲高い声上がる。それを持って来なさい。とアザレアが声を張り上げる。

その様子をアヤカーナはぼかんと見上げていた。

タンギューはことさら肩が落ちるばかりだった。が、ここで引くわけにはいかない。

「男として、一番の理想は、何も知らない女性に手取り足取り教える、ってのだ。」

ドユランの楽しみを奪うのは頂けない」

まあ、と揃った声がした。そして顔を見合わせ、なるほど、と神

妙に三人は頷いた。

「アヤカーナ様。閨房学の先生は殿下にお願い致しましょう」

アザレアの提案にアヤカーナは、はい、としか答えられなかった。でも閨房学とは一体何だろう。早く教本を読みたい。

タンギューは、溜息をつくことしか出来なかった。

目的は果たせなかったが、折角図書室へ出向いたのだからと、アザレア達があれこれ本を選んでくれる。明日この本についてお伺いいたします。と積まれた本は十冊ほど。アヤカーナは思わず、頬をふくらませた。

アザレア達の軽やかな微笑ほほえみいが図書室に響く。

女官長が隣のテーブルに揃った茶器を並べる。アヤカーナは読みかけの本を置き、花の香りがするお茶に一息つく。目を上げると正面のアザレアの青い瞳と目が合った。

「アヤカーナ様、先程の不躰をお許し下さい」

「いえ、…あの、こちらこそ申し訳ありませんでした」

アザレアが怪訝な顔を向ける。

「助けていただいた上、皆様に不快な思いをさせてしまいました…」
アヤカーナはうつむいてしまった。

アザレアは息を吐く。

「貴女あなたが謝る必要などございません。あれで正解です。」

アヤカーナは顔を上げ、瞬きをした。

「お会いして以来、どんな戯れを向けても、腐る事無く貴女は私達を信頼して下さいました。先程も私を信じてくれておりましたですよ。」

アザレア、ハンスイ、ケイトの三人は立ち上がり身体からだをアヤカーナへ向ける。笑みを浮かべ揃って膝をついた。

「私達は力の限り貴女をお守りいたしますし、お助けいたしますよ。」

アヤカーナは何を言っただけで良いのか分からず、瞬きを繰り返す。

「もし、あの廊下で貴女が、無駄な争いは止めて、私が引きます。などと、押し付けがましく、でしゃばったら、貴女をお守りする事が出来ませんでした。そして、私達の面子もつぶされていたのです。これは、貴女がご自分でご自分の格を下げるという意です。」

身を引く、争いは嫌、などと喚くのは、単なる自己陶醉です。あの場面でしたら、私達を信じていないから取る行動です。

自分を信頼してくれない主人あいつを守る事など、無理な話でしょ。第一そんな主人、守りたくも助けたくもございません。」

だから貴女は正解なのです。」

アヤカーナはきよとんとしていた。

子供の頃から言われていたことだ。あれ、アザレアは誰かを思い出させる。意地悪じゃないくせに意地悪な人…。

くすりと微笑う。ああ、そうだ、アザレアはお母様に似ているのね。

「ありがとうございます。」

私は皇太子殿下を愛していますし、パース帝国を信じています。

昔も現在いまも変わりません」

アザレア、サンスイ、ケイトそしてタンギューまでも目を見開いた。

そして揃って破顔した。

3・(後書き)

うん(- 公)
これが、私の精一杯。・・・。 < > ・・・) m ー) m (; ー) m

少女の頬は艶やかなピンク。まだ筒のような上体から床へと、スカートが重そうに広がっている。金色の頭には、アイボリー色いろしたレースの大きなリボンが乗っかり、大きな巻き毛が背中で弾んでいる。なにやら、鼻歌を口ずさんでいた。

13の歳を数えたばかりのアヤカーナは、いつもの動線で、寢室から続きの部屋へ出ると、壁の前に止まった。自然と鼻歌も止んでいる。

壁に掛かっている、豪華な幕が付いた絵画に向かい、軽く膝をおり、礼の姿勢をとる。

「ドユラン殿下、今日のケセンは晴天で気持ちが良いです」

許婚である隣国パールレス帝国皇太子ドユランの姿絵に話しかける。これは、母に言われて始めたことだ。初めのうちは、おざなりに済ませていたが、心を込めた方ほうが絵の殿下も嬉しいでしょ、と母に諭され、なるほど、と思った。今ではアヤカーナの楽しい日課になっている。

こちらを見つめる、濃い栗色の髪、琥珀色の瞳、鼻筋の通った若者は唇をきつく結んでいる。微笑ほほえんでいる絵が送られてきたことは一度もない。

それでも、アヤカーナは話しかけると、絵が微笑わいつてくれるように感じた。弟達の話、城での出来事など、たわいもない話をする。話の仕舞いには必ず、殿下、大好きです、と告げる。

その時の殿下の笑みが一番素敵だと思う。

声が聴こえるのではないか、とアヤカーナは絵画のドユランへ、期待の眼差しを向ける。もちろん聴こえたことなどないが。

「アーヤ、今日も綺麗だよ」

私を現へと戻すのは、マリユス従兄様の声だ。

振り向くと、五才上の従兄弟が扉にゆったりと肩を凭せている。

「従兄様、いつ入ってこられたの」

「ノックはしたよ。」

でも、アーヤは殿下に惚けていたから」

そう言うと、マリユスは悲しそうに微笑い、軽く両手を広げる。

額にかかった薄い金色の髪をかき上げると、アヤカーナに手招きする。

「アーヤは、私と殿下のどちらが好きかい」

はいはい、従兄様よ、と慣れたように呟き、アヤカーナはマリユスの腕の中に納まった。

息を吐いて身体を預けると、額に温かいものが触れる。お返しに、おはよう、とマリユスの頬に唇を寄せた。

すると、ふわりと抱き締められ、頬にマリユスの細い金色の髪がくすぐつたい。温かい息がかかり、耳元で囁かれる。

「私が王だったら、アーヤはパレスになど嫁がせない…」

今頃、皇太子殿下は、赤毛の麗人と仲良くしているだろうに」

これは、いつもの従兄様の挨拶。アヤカーナはうんざりしたように微笑う。

この従兄弟によれば、殿下には恋人がいらっしやるそうだ。何でも、赤毛で小ぶりの鼻に雀斑が散った令嬢なのだという。その赤毛の女とは小さい頃から仲が良く、パレス宮廷もこの令嬢を皇太子妃に、と望む声が少なくないらしい、ということだ。

アヤカーナの脳裏には色々な赤毛の女の姿が浮かぶ。背の高い女、低い女、太った女、痩せた女…。いつも、その女達は、薄い紗の幕に覆われ、はつきりとした姿を見せることはない。

なのに、変だ、今日はくつきりと見える。焰色の髪、翠色の瞳に

瞳色のドレス、ドレスから伸びる細い首、高い身長、今迄想像の域を超えることがなかった顔貌が、急に現実となって姿を晒している。

その赤毛の女性がアヤカーナを認め、近づいて来る。こちらへ来る程に、女性が思っていたより大きい女ひとだと解かる。見上げるアヤカーナを、麗人は満面の笑みで見下ろす。

「はじめましてアヤカーナ様。私がドユラン皇太子殿下の真まことの婚約者フォンテイーヌです」

アヤカーナは目を開けた。

口の中が乾いて苦い。唾をごくりと飲み込み、目じりを指で拭う。知らないうちに泣いていた。

何度か目を拭い、天井の模様を確認する。上体を起して、やっと深く息をついた。

「嫌な夢…」

夢だと確かめる意味を込め、声に出して首を振る。なぜこんな夢を…。

昼間、回廊で出会った公爵令嬢プリンセスフォンテイーヌが、現皇帝の弟君イズミク公爵のご長女で、ドユランの従妹にあたることを教わった。アザレア達は相手にすることは無い、と一笑に付してはくれたが、アヤカーナは溜息をとめられない。

嫌なことは続くもので、就寝前には、護衛に就いていた近衛隊長のタンギューが、解任の挨拶に来た。護衛に就かれた当初は、黒髪の美丈夫に戸惑いを覚えた。しかし、タンギューの飾らない態度と優しさを知り、信頼できる方だと頼りにしていた。その方が護衛から外れるのは悲しい。

そのタンギューに、一人では動かないように、と忠言され、庭の散歩を思い留まった。それも、嫌な夢をみた原因にあたるのかと考
え、そろりとベッドを出る。

もう眠れない、と思った。

東宮前の小さな庭園の中央に造られた、白い亭あずまやが、月光に輝いて
いる。

花の香りに囲まれ、亭あずまやの椅子の上で、薄着のアヤカーナは、膝を
抱えて月を見上げていた。

ここパールスはケセンに比べ、とても暖かい。この時期ケセンで
は、夜着一枚で外に出ることなど叶わない。アヤカーナは贅沢な気
がして、いつまで夜着一枚で過ごせるかこっそり数えていた。

「アツキ、ユツキ、パールスではまだ夜着一枚で寒くないのよ。

暑がりなお父様がここに居たら、お母様に叱られるわね。裸はは
したくない、って」

ケセンの弟達へ届け、とばかりに半月に向かって話す。

月が鏡になって、ケセンの家族の様子を半分でも映してくれない
か、じつと目を凝らす。その逆でも良いと、月に己の姿が映るよう
首を伸ばす。

しかし、毎晩繰り返しているが、どんなに待っても奇跡は起きな

いし、弟達に奇跡が起きているかなど知る由もない。

息を吐くと膝に顔を埋める。秋の夜風がさわさわと、萩の枝垂れをそよいでいる。私は萩のような女性になれるのだろうか。どんな風にも柔軟に耐えられる皇太子妃に…。

萩が強い音をたて、アヤカーナの髪を冷たい風が剥く。アヤカーナは背中を丸め、身を震わせる。寒い、と思った。瞬間、肩に衣きぬが舞い降りた。

「風邪をひくぞ」

アヤカーナは目を丸くした。

皇太子殿下が目の前で、アヤカーナの身体を覆うよう衣を整えてくれている。身体が手早く、すっぽりと衣に包まれた。すると女官たちとは違う大きな手が、アヤカーナの肩に、よし、と置かれた。

ドユランは顔を回めくらすと、石で出来た椅子を引き寄せ、それに腰を下ろす。忽たちまち、尻しりが冷たいな、と顔をしかめた。

「あの殿下、殿下がお風邪を召します」

アヤカーナが衣きぬを脱きぬごうと動くと、ドユランは衣の前を押さえ、動作を封じる。

「俺はいらない！」

ぴしゃりと言われ、アヤカーナは言葉を失う。

ドユランは深い溜息をつくと、掴んだ手を離し椅子を跨ぐように腰掛けた。

ドユランが掴んでいた所を、アヤカーナはぎゅっと握り、頭を下げる。

「差し出がましい真似を致しました」

「うむ」

ドユランは言ってしまったって、慌てて言い添える。

「それは王女のために持参したものだから…」

アヤカーナのきよとんとした澄んだ灰色の瞳を目にし、ドユラン

は言葉が続かない。

「私の…ためですか」

嬉しそうに微笑うアヤカーナを前に、デュランは胸の辺りがざわざわと落ち着かない気がした。

ありがとございます、とアヤカーナは薄紅色の衣に鼻まで埋まる。

デュランはどうにも落ち着かず、口を開く。

「なぜ庭に居るのか聞いても良いか」

「月を見ています」

「月を見に、毎夜か」

アヤカーナは瞬く。

「…はい」

「それ程に月が好きなのか」

「…」

デュランが、いくら待っても応えはなかった。

アヤカーナはこっそり取っていた行動が、知られていたことに、恥ずかしくて顔を上げられない。

うつむいて黙ったままの少女にデュランは期する。

「すまなかった。許して欲しい」

唐突なデュランの謝罪に、アヤカーナは顔を上げ、目を見開く。思わず、違う、と首を左右に振っていた。

皇太子殿下に謝罪をさせるなど、恐れ多くて涙が睫毛にたまる。

デュランは、いや、と軽く頭を振りアヤカーナを宥めた。

「侍女の件、それに調度や小物など、馴れ親しんだものを与えてやれなかった。」

アヤカーナは目をしばたたくと、そんなこと、と顔を上げて微笑う。

「一番大切なものは持参致しました。」

殿下、私は同じ月が、ケセンも照らしているのだ、と眺めていただけです」

「… 虐められたとか、不満があるのではないのか」
いいえ、と微笑うアヤカーナが労しかった。

「何か望みはないか」

ない、とまたもや首を振るアヤカーナにドユランは、よく考えて後で告げるよう促す。アヤカーナは困ったように微笑うだけだった。

また、会話が途切れる。

ドユランはしばらく何を話したらよいのか迷っていた。アヤカーナは隣ですっと俯うつむいている。

「アザレアは昔からきつい女だった。苦勞しているだろ。

ハンスイとケイトはアザレアの腰巾着だ。」

ドユランは共通の話題に思え、アヤカーナに笑顔を向けた。

「いいえ、アザレア様はとても楽しいお方です。ケセンの母を思い出します。」

ハンスイ様やケイト様は弟達を…」

あれ、ぼたぼたと薄紅色の衣にしみが広がっている。折角殿下から頂いたものなのに。慌てて、増えていくしみを払っていると、低い声がした。

「……ケセンが恋しいのか」

しみを払う手が止まる。

…恋しい。…ああそうか、このしみは自分の涙だ。

アヤカーナは自覚すると、静かに泣き始めた。丸くなって衣に顔を埋める。

すると頭を撫でられ、殿下が居ることを思い出し、謝る。

「謝る必要はない」

ドユランの言葉に、堪えていた声までも上がる。

デュランは声を上げて泣いている少女を抱き寄せ、その広い胸に包み込む。

なんて軽くて温かいのだろう。背中をさすると少女はしがみ付いてくる。

「国くにに…帰りたい…です…」

嗚咽が混じり、途切れ途切れの言葉が聞こえた。デュランは語尾を繰り返す。

「…帰りたい、な」

「お母様に…会い…たい…です」

少女の心を聴き、デュランは己の浅はかさにに愕然とした。

4・(後書き)

詰め込みました(笑)

アヤカーナは夢現を漂っていた。

重い…何かのがっかっている。

体を動かさそうとしても動けない。でも不思議と心地よい温かさ
と重さだ。

とろりと瞼を上げ、視線を上へ向けると、目の前に整った顔があ
った。

驚きで目が覚める。しかし、デュランの綺麗な顔に見惚れ、身体
の力が抜けていく。

長い睫毛に栗色の髪が掛かっている。髪を除けてあげようと無意
識に手を額へと伸ばす、その拍子に自分の体にデュランの腕が絡み
ついている事に気付いた。みるみるうちに顔が真っ赤になり、髪に
触れる前に手を引っこめる。

首を回らせ、ここが自分の寝台でないことを確認する。次に、こ
こに居る理由を思案する。

思い出せるのは、昨晚、庭で殿下に会ったこと。そしてケセンに
帰りたいと泣いて、殿下に優しく抱きしめられたこと…。その後
の記憶が全くない。

考えると、火照った顔から血の気が引いていく。

もしかして私、国へ帰りたい、だなんて、ケセン王女として一番
言っちゃいけないことを殿下の前で……。

起きなくては、と思う。でも、抱き込まれていて身体がびくとも
しない。

ドユランを起こさぬよう、そろりと腕を外そうとする。途端、ますますぎゅっと力を込めて抱きしめられた。

「…あの、でん…その…」

ドユランを起こして良いものか、どうしたらよいのか迷っていると、目の前の身体から小刻みな振動が伝わってくる。彼が起きていて、笑いを堪えているのに気付く。

戸惑っているアヤカーナの耳元でドユランは囁く。

「顔を上げて、おはようの挨拶だ」

抱擁が緩み、言われるままにアヤカーナは顔を上げる。アヤカーナの唇に熱い唇が重なり、ピクリと身体が強張る。ついでむようなキスをいくつも重ねられ、下唇を軽く噛まれる。それは、アヤカーナの体の奥に何かが灯るような、気持ちのよいものだった。

「キスは目を閉じるものだが」

ドユランの苦笑混じりの言葉にアヤカーナは慌てて、はい、と目を閉じた。

次のキスを待っているのに一向に唇は落ちてこない。瞼を薄く開けようとした途端、またドユランの胸の中へ抱きこまれた。

ドユランの胸に抱かれたまま、アヤカーナは恐る恐る声を掛ける。

「殿下、昨晩はつい思ってもいないことを申しました」

「ん？」

「申し訳ありません。」

その上、殿下の寝台

「思ってもいないこととは、俺を愛しているってやつか？」

アヤカーナは、ドユランが遮るように発した言葉に慌てる。

「そつ、それは本当です！！」

早口で告げたあと、首をかしげる。

あれ、愛してる…？ 私、そんな会話、した記憶がない…。

「では、パーレスに居たいんだろ」

ドユランにさらりと言われ、アヤカーナは目を丸くする。ドユランの優しさに思い当たり、はい、と逞しい胸に顔を埋めた。

「何か、望みは思いついたか」

ドユランの言葉で、昨晩言われたことを、おぼろげに思い出す。

確か、ないとお応えしたはずだけど…。それでも何かないかと考え、はたと思いつく。

「あの、ではブンチョウに参りたいです」

ドユランの息を呑む音が聞こえた。同時に腕の拘束も緩む。アヤカーナはドユランの瞳を見つめふわりと微笑む。

「殿下に閨房学の御教授を賜りたいのです。」

殿下はブンチョウにて閨房術なるものを、お勉強なさったと伺いました。是非私も。」

「誰の進言か問うてもよいか」

ドユランの声音が低い。

「アザレア様とタンギュー様です」

「臣下に敬称はつけるな」

「…はい」

アヤカーナの瞳から愛らしい笑みが消えていく。

またか、とドユランは思った。アヤカーナを労わろうと思うのに、どうも調子があかぬ。ドユランは諦めたように長い息を吐く。

ブンチョウとは首都サウザンタワー随一の歓楽街の名称だ。どうせ「閨房」「ブンチョー」の意味も教えずにアヤカーナに色々吹き込んでいるのだろう、あいつらは。

ドユランは口元を上げにやりと笑うと、アヤカーナを抱いたまま

身体を反転させた。そしてアヤカーナの身体に覆いかぶさり、不安そうにこちらを見つめるアヤカーナの耳元で囁く。

「先ずは目を閉じる」

「え？」

「閨房学の稽古だ」

はい、とアヤカーナは必死で目を閉じた。

先程とは違うキスが繰り返される。アヤカーナの唇をなぞっていたデュランの舌先が、歯列を舐めた。驚いてアヤカーナは奥歯を噛締める。

「口を開けて」

デュランの命令だろうが、何が起こるのか怖くて従えない、アヤカーナは口を閉じたまま首を横に振る。

デュランは、ふつ、と微笑うと唇に触れるだけの口付けを落とす。柔らかくて優しい感触にほっとし、アヤカーナは力を抜く。

閨房学とは、キスのことなのか、などと考える余裕さえも出てきた。しかし、なぜか暑いと思った。気温が暑いのか、身体が熱いのか分からない。そうこう考えている間も、デュランの濡れた舌がアヤカーナの唇を何度も刺激している。

徐々に息が上がり、閉じていた口が開く。途端、空気と一緒にデュランの熱い舌が口腔へ忍び込んでくる。デュランの舌に翻弄され、アヤカーナはいつの間にか、すすり泣くような声を漏らしていた。

心臓が激しく鼓動している。アヤカーナはただただ圧倒されていた。このまま唇を離したくないとまで思え、デュランへ身を縋るよう寄せる。デュランは一瞬強くアヤカーナを抱き締め、頬から白い喉元へ温かい指を滑らした。

ドユランの指が白い喉から胸のふくらみへと伝っていく。先には薄い夜着に隠れた胸がつんと立っていた。

「殿下、嫌で…」

抗議の声を上げようとするが、角度を変えた口付けに唇を塞がれ、最後まで話せない。薄い衣に覆われた片方の胸を手の平で包み込まれた時、アヤカーナはあまりの衝撃に息さえ出来なかった。

胸元のリボンが解かれ、肩があらわになる。夜着が除けられ、二つのふくらみに冷たい空気を感じた。

アヤカーナは悲鳴を上げようと、大きく息を吸う。その時、扉をたたく鋭い音と共に、女の甲高い声が響いた。

「お目覚めですか！」

ドユランはアヤカーナの上で溜息をつく。夜着を元に戻しアヤカーナへシーツをかけてやると、隣にごろりと寝そべった。何がお目覚めだ、などとぶつぶつ零している。

また鋭いノックが響く。二人が入り口へと顔を向けたとき、突然、扉が開いた。

「お目覚めですか、アヤカーナ様」

飛び込んできたのは、アザレアだった。

赤いドレスを纏い、口角を上げて微笑んでいるアザレアが、アヤカーナには救いの女神に見えた。

ドユランは悪魔が踏み込んできたと思った。

笑いをこらえてダズンはデュランを振り返り、その言葉を繰り返した。

「アザレアに、助けて下さい、か」

机の向こうでは、デュランが憮然とした表情を崩さない。

昨晚の首尾を、洩るデュランから聞き出し、デュランの寝室に突入してきたアザレアへ対し、アヤカーナが発した言葉を聴いたところだった。

東宮では今朝方アヤカーナの行方を案じて、女官長と女官たちが右往左往しているのを、アザレアが収めたという話題で持ちきりだった。好色な殿下の手から、アザレア様がアヤカーナ様を無垢なまま助け出した、ということらしい。

皇太子という身分から、女に否と言われたことのない友の、悩める姿が痛ましい。しかし、ダズンはアヤカーナが存在が、デュランが今まで疎かにしていた、皇太子としての自覚を刺激していることを快く思っていた。

それに、耳に入るアヤカーナの純粋な性質も気に入っている。ダズンは、愚者ではないデュランが、己の成すべきことに目覚めることを願い、この結婚が二人にとって、また政治的にも上手くいくよう、尽力すると決めている。その為には、アヤカーナの守護を固めなければ、と感じていた。

伝統と格式、血統を重んじるパーレス帝国内において現在の皇位^{いま}継承第一位はデュランである。デュランにもしもの事があれば、帝弟であるイズミク公が第一位となる。

ワガセヒロ帝とイズミク公は、昔から良好な兄弟関係にあり、聡明なイズミク公は、皇帝という重荷を背負わずにいられることを善し、としている。

故、現在のパーレスには皇位継承闘争は存在していない。むしろ、狙われるとすればアヤカーナだろう。

パーレスの貴族達は、国土も狭くこれといった産業もないケセン王国を、田舎ものよ、と見下している。己の地位に固執し、下のものに優越感を抱き、権力を欲するのは貴族の性であり、“皇后”というパーレス貴族が座ることが出来る、最上位に執着する姿が容易に想像できる。パーレスの国益など、貴族たちの眼中にはないはずである。

ダズンは癖のある琥珀色の髪をかきあげ、頭を振る。

考え付く攻めは阻止できる、但し、女性特有の陰湿な嫌がらせはアザレア達に一任するしか無いだろう。

彼女は、為政者を叔父に持つ機智に富んだ女性で、信頼できる。

何せ、その為政者こそ、アザレアをアヤカーナの侍女に命じた、皇帝の腹心宰相リキウウなのである。

アザレアはパーレス宰相を叔父とし、清廉潔白と謳われるタイハク侯爵ジョルラス・ヴァンドームを父に持つ皇帝派の女傑である。つまり、皇帝陛下がアヤカーナの護りに付いたということであり、ダズンにとっては、何よりの加勢であった。

自ずとダズンの顔に笑みが浮かび、言葉が漏れる。

「王女は可愛らしいお方だな」

タンギューは侍従が運んできた葡萄酒を一気に煽り、カタンと音をたててテーブルに置いた。

「おいダズン、王女は殿下の婚約者だ。

その王女に横恋慕とは、殿下に対し反逆の意あり、と疑われても仕方ないぞ」

「そのような気は全くない。

…が、殿下に、面倒をみる、と命じられたら、即、引き受けるよ」
「おいおい、そうだったら、俺は、ドユーに惚れている王女に同情するな。」

ドユー、どうなんだ」

タンギューはそう言って、ドユランに向けてグラスを上げた。

ドユランは、可憐な王女に慕われているといわれ、悪い気はしない。無邪気に向けられる潤んだグレイの瞳に庇護欲が駆られ、アヤカーナから目が離せないのも事実だ。朝も邪魔が入らなければ、理性を保てなかつただろう。

反面、この結婚により、己の不甲斐無さを自覚させられるのには、男として辟易する。皇太子でなければこのような思いはしないのではないか、という思いに捕らわれる。

「味見をしてから考える」

また逃げた、と二人は思った。しかし、ちらりと見せたドユランの瞳の煌きに満足していた。ドユランが王女に魅かれているのは、間違いないはずだ。

ダズンとタンギューがしたり顔を見合わせたところで、扉の向こうから来客が告げられた。

「イズミク公爵令嬢フォンティーヌ様、おみえでございます」

開かれた扉のその向こうに、フォンティーヌが微笑んで立っていた。堂々と進み出るフォンティーヌに男三名は慌てて立ち上がり姿勢を正す。

女性が立ち上がっている時の男子は立っている。パーレス王侯の

慣わしである。

「ごきげんよう、ドユー。と膝を折るフォンティーヌ。」

デュランは前へ進み出ると、その頬へキスを落とした。彼女は、ダズンとタンギューにもそれを繰り返す、二人は目礼を返す。

フォンティーヌはそれを満面の笑みで受け、デュランへ向き直ると、大きな手を両手で引き寄せソファへ腰を下ろした。

頭を並べて座る二人の姿にダズンは嫌な予感を感じた。デュランがフォンティーヌに対し、恋情を見せたことはない、従妹としか見ていないことに間違いはない。だがフォンティーヌはどのようなだろう。赤毛のフォンティーヌの姿がダズンの頭の中に何かを呼び起こし、掴み取る前に消え去った。後でゆっくりと考えようと思った。

それでは、と出て行くこうとする側近二人に、フォンティーヌは拗ねたような顔を向ける。

「まあ、タンギューもダズンも水臭くてよ。」

私とお茶を一緒にして」

デュランが、座れと顎を引く。二人は内心しぶしぶ腰を下ろした。

フォンティーヌは用意された茶の香りを確かめ口に含む、おいしい、と微笑い、直ぐに顔を曇らせた。

「ドユー、昨日はごめんなさい。」

アヤカーナ姫と廊下で見苦しい会話を致しました。」

言っとフォンティーヌは睫毛の間からデュランを見上げ、翠色の目を瞬かせた。

「ニコルが、私のために道を譲って欲しい、とお願いしたのが、アヤカーナ様でしたの。」

でも私も皆も、怖くて、アヤカーナ様に気付くのが遅れてしまい

ました。

だって、道を譲らねば斬り捨てる、などと脅されるなんて、始めてのことなのですもの。」

潤んだ瞳でデュランを見上げるフォンティーヌを尻目に、タンギューは、口にしたきつい香りの紅茶に顔をしかめた。好みの茶ではない。目の前の赤毛の令嬢のような茶だ、と感じ、思わず茶器をダズンの方へ除けた。そのダズンは隣で、小指を立てて茶をすすっていた。友の奇怪な姿に笑いを堪え俯うつむいていたタンギューは、突如響いた嗚咽に顔を上げる。

「私… ったら… ケセンの… 常識を知らず…、アヤカーナ様に… ご不快な思いをさせて…」

語尾は声にならず、嗚咽を上げフォンティーヌがデュランの胸に顔を埋めた。

「フォン、アヤカーナには私の方から伝えておくから、泣くな」

デュランはそう言っているが、ダズンとタンギューの目には、涙など見えなかった。それでもフォンティーヌはデュランの胸でまるで子供のように首を振っていた。

「私が悪いのです。私が… っ… っ」

デュランが宥めようとフォンティーヌの肩に手を置こうとした途端、嗚咽が大きくなりデュランの首に細い腕が強く巻きついた。

一向に収まることのない泣き声に困惑して、友に助けを求め目を遣れば、二人とも頬を引き攣らせ何やら口だけ動かしている。当てにならない、と諦める。

従妹にごめんなさい、と耳元で泣かれ、デュランには背中を撫でながら慰めの言葉を掛けてやることしか浮かばなかった。

「フォンは悪くない」

「ここはパースなのだからケセンの常識など通用しない」

デュランは泣き声に消されまいと声を張り上げた。

ふと、ドユランは部屋の空気が変わったことに感付いた。

何だ、水を打ったようなこの静けさは。

フォンティーヌの嗚咽までピタリと止んでいる。不審に思い、ダズンを見れば、立って扉を見つめている。タンギューも然りだ。

ドユランはフォンティーヌを抱いたまま、ゆっくり扉へと顔を向けた。

「ごきげんよう、殿下、フォンティーヌ様」

青い瞳と目が合い、アザレアが優雅に腰を折る。後に居る金色の髪はアヤカーナか。

ふわりと身体が軽くなった。

「まあ、ごきげんよう、アヤカーナ様、アザレア様」

隣でフォンがにっこりと挨拶を返している。完璧な顔のまま……。

「ご機嫌麗しゅう存じます、殿下、皆さま」

前に歩み出たアヤカーナの言葉で、デュランは我に返り、席をはずして背筋を伸ばした。

目の前ではダズンとタンギューが、こちらへ、と突然の来訪者二人に席を勧めていたが、アザレアは、にこりと微笑い遠慮する。

「何やらお取り込みの様子。」

直ぐに、お暇いたしますわ。ね、アヤカーナ様」

「はい」

白い花の様にふわりと微笑っているアヤカーナの様子に、大丈夫そうだとデュランは安堵した。何が大丈夫なのかは判らなかつたが。ともかく、息を整えるとアヤカーナを指先で招き、フォンティヌの腰に軽く手を添える。

「アヤカーナ、フォンティヌの紹介がまだだったな。」

こちらは私の父方の従姉妹、マリ・フォンティヌ・デュ・タリエだ。」

アヤカーナは、フォンティヌの腰に添えられている、デュランの手をちらりと見やり、口角にうつすらと笑いを含んでいる赤毛の女性に笑顔を向けた。

「宜しく、フォンティヌ」

「あら、こちらこそ、宜しくね。」

どちらの身分が上なのか、分からないような応答だった。

今朝、デュランの寢台から助け出されたアヤカーナは、待ちかまえていた女官長とアザレアによつて、直ぐ様さま、湯あみをさせられた。痛くなるほど肌を擦られ、男女が寢台で致す行為とその意味を教えられた。

アヤカーナが、閨房学とはキスの方法なのね、と呟くと、女官長が「貴女の所為」とばかりにアザレアを睨みつけ、閨房術の意味もやんわりと教えてくれた。

身拵えの間もアザレアが、閨房術は女の武器だが、結婚前は知識として蓄えておくのが望ましい、知識と実践は違うものだ、などと繰り返していた。

しかし、はじめて知った子の生し方に衝撃を受け、今一つ、アザレアの話す事がアヤカーナには理解できない。その上、父と母も…と有らぬ想像まで浮かび、深く考えることが躊躇われる。

ケセンでは、殿下の仰せに従えば何の問題もないと教えられてきた。ここはやはり、デュランを信頼して任せるしかない。

うだうだと考えず、子供を沢山生むために頑張ろう、と頬を染めて割り切った。

お茶の時間になり、腰を下ろした途端、アザレアからなぜデュランの寢室に居たのか説明を求められた。

恥ずかしくて、デュランにブンチョウへ行きたいと強請ねだったことと、閨房学の教授を依頼した話だけは省いて聴かせる。

しどろもどろに話し終え、勝手に部屋を抜け出した事を叱責される、と身を竦ませていたが、目を上げればアザレアが、興味深そうに瞳を煌めかせていた。

「良い兆候よ。」

満足そうに微笑うアザレアを、アヤカーナはぼかんと見上げた。

その後はどちらも口を開かなかった。熱い茶を口に運び、ゆつたりと流れる時間に身をまかせる。

アヤカーナは、昔からこうしてアザレアと共に、時を過ごしているように思えた。

突如、おだやかな空気を裂くように扉が開き、ハンスイとケイトがアザレアの下へ早足に寄る。ハンスイがアザレアに何事か囁き、アザレアは冷たい微笑を浮かべた。

「アヤカーナ様、おさらい致しましょう」

「おさらい…ですか？」

戸惑うアヤカーナにアザレアは一気に続けた。

「殿下が仰られた通り、臣下に敬称はつけない。

私どもを呼ぶ時は、アザレア、ハンスイ、ケイト。

もちろんフォンティーヌもです。それと、臣下に対する言葉遣いもお考え下さい。

それから最後に、肝心なことを一つ。

殿下はフォンティーヌに恋慕したことはございません。彼女に無用な嫉妬心など、一切お抱きになりませんよう。

何があっても、いつものアヤカーナ様のように朗らかで居て下さ

い

「はい！」

アザレアの勢いに押され、アヤカーナも大きな返事を返した。

アザレアは、よろしい、と頷くと立ち上がる。

アヤカーナはアザレアと並んで廊下を進んでいた。ケイトとハンスイはその後から付いてくる。

「今から、本宮の殿下の執務室へ参ります。

タンギューとダズンの二人を、アヤカーナ様のお茶に招待する許可を、殿下から頂くのです」

「殿下はご招待申し上げないのですか」

つと、アザレアは立ち止まり、はい、と溜息をつく。

「殿下は今、フォンティーヌとご一緒です。」

ニコルが、わざわざハンスイに「フォンティーヌ様が殿下の執務室へ渡った」と、告げに参ったそうです。」

一旦言葉を途切らせ、アザレアは考えるように顎へ手をやる。

「あちらの挑発に乗って差し上げるのも、一興かと思ひまして。」

アザレアは軽く笑って、また歩みを始めた。

「殿下は昔から、女性に恥はかかせません。きつと、フォンティーヌの好いよう振舞って居られる筈、アヤカーナ様はお二人を無視して、タンギューとダズンにお心をお配り下さい。」

アザレアは淡々と話しているが、アヤカーナは不安だった。

ケセンに居た頃は、パールスへ嫁げば幸せが待っているのだと信じていた。殿下に愛され宮廷人に愛され、自分がパールスを愛するように、愛が返ってくるのだと疑わなかった。そんなアヤカーナは、駆け引きなど考えたことも、したこともない。

今、殿下の部屋の前に立ち、自分が甘い幻想を抱いてパールスに來たことを実感する。控えの間にはフォンティーヌの侍女たちが、主を待ち、控えている。その複数もの冷たい瞳が、静かにこちらを眺め回す。私は、一体どんな世界に踏み込んだのか、殿下に私は必要とされているのだろうか。アヤカーナは怯懦な思いに捕らわれながら、静かに控えの間を通り抜けた。

殿下の近習が、アヤカーナの來訪を大声で告げる。しかし中から聞こえてくるのは、女性の嗚咽だけ。

果たして、アザレアが近習に扉を開けさせ、真つ先にアヤカーナの目に飛び込んできたのはフォンティーヌとデュランの抱擁だった。

こうして、アザレアの助言通り、平素に構えフォンテイーヌと対峙しているが、アヤカーナの小さな両手は震えていた。自分に負けまい、と必死だった。

デュランは、座るよう、口を開らきかけた。が、アザレアの方が早かった。

「殿下、お話し中、申し訳ありません…」

アザレアの背が、アヤカーナの目の前へフォンテイーヌの姿を遮る様に、滑り込んできた。

「タンギュー隊長とダズン閣下を、王女殿下の茶会に、ご招待致したく参じました。」

アザレアの申し出に、デュランは驚いたように眉を上げ、いつ？と返した。

只今です。とアザレアはデュランに微笑むと、アヤカーナの顔を振り返り困ったように笑う。

「アヤカーナ様が、タンギュー隊長の護衛解任を淋しがり、お泣きあそばすので、皆でお茶を一緒にしようかと思つた所存です。

隊長と閣下のお暇を、お願い致します」

アヤカーナが胸の前で両指を絡ませ、アザレアの話を繰り返す。

「お願い致します殿下。」

タンギュー隊長のことを想うと、涙が止まりません。

それに隊長から伺っていたダズン殿とも、是非お話がしたいのです。」

デュランへ縋るように、潤んだ瞳を向けると、とろけるような甘い微笑を湛え、タンギューとダズンの傍へ行く。

「お茶を一緒にしていただけませんか。」

昨日の図書館で頂いた宿題も、皆でお話したほうが楽しいと思います」

アヤカーナはお願いします、と白い手を伸ばし、タンギューの硬い手を取っていた。

ダズンは啞然とした、この王女は無邪気なのか、それとも魔女なのか。

古い家柄を誇るパーレス貴族達は、気品に満ちた無表情をして、新興貴族たちとは一線を画する。タンギューはその大貴族筆頭の貴公子であり、公の場では女性を前にしても冷ややかな笑顔を崩さない。

ダズンはその友の、始めて見る頬を染めた表情に驚くしかなかった。

はつとして、デュランに目をやれば、口角を下げこちらを睨んでいる。フォンティーヌは目を丸くして見つめていた。

アザレアまでも眉を寄せ、こちら側にだけ分かるよう、口を動かしている。

ヤ・リ・ス・ギ・デス！

やりすぎです？ やりすぎ… 遣り過ぎ！ 芝居なのか！！

ダズンは慌てて友の姿を背に庇い、デュランに乞う。

「殿下。数刻の休暇をお願い致します」

デュランの返事も待たずに、タンギューを室の外へと促すと、アヤカーナがタンギューの手を握ったままだ。その手を外そうと、王女の白い手に触れた、とたん、デュランの冷たい視線が突き刺さる。

アザレア、何とかしろ！ダズンはアザレアを睨め付ける。
アザレアはピクリと肩を震わせ、慌てて笑みを浮かべた。

緊張をはらんだ室内に、いやにおっとりとした声が響き渡る。

「殿下、では失礼します。フォンティーヌ様とのひと時をお邪魔致し、申し訳ございませんでした。」

さっ、アヤカーナ様、隊長の手は繋いだままで参りましょう。こちらがお誘い申し上げたのですから」

「はい」

ダズンは肩を落とした。心底アザレアを小賢しいと呪った。一体誰が収集をつけると思っているんだ。

ダズンは溜息をつく、外の三名と共にデュランに礼の姿勢を取り、茶を啜りに執務室を後にするしかなかった。

「あの、殿下」

言つて、アヤカーナは手に広げた本を閉じ、デュランを見つめた。デュランは机に座り、ダズンと二人、書類に夢中だ。

アヤカーナが、タンギューの護衛解任に涙がとまらない、と伝えてから直ぐ、タンギューが護衛に戻され。勉強や図書室から持ち出した本の分らないところは、デュランに教わるよう指示があつた。しかし、デュランには執務があり、なかなか時間の都合が予測出来ない。従つて、デュランの傍で控えているよう沙汰があり、それ以来アヤカーナは、デュランの執務室に本を片手に日参していた。初めの日、アザレアが、自分も同室させろ、とデュランに詰め寄つたが、侍女や女官は用があればこちらから呼び出す、と一蹴され門前払いを見舞つた。

アザレアはデュランの前では憤懣遣る方無いふうを装っていたが、アヤカーナにはしたり顔で、殿下に甘えるように、と耳打し素直に去つて行つた。

アヤカーナは、大好きなデュランの傍で過ごせるのが嬉しく、机に向かうデュランの、精悍で気品に満ちた横顔を、見ているだけで幸せだつた。

デュランの机の前に据えられたソファで本を読み、デュランの時間が空くのを待つ。デュランの邪魔をしないよう心がけ、何かと気遣つてくれるダズンやタンギューに笑いかけていたら、ふと、デュランの様子が、おかしいことに気が付いた。

タンギューやダズンと話していると、必ずデュランの視線を感じる。何か？と笑いかけると視線を逸らされる。本を読んでいると首の辺りがちくちくし、顔を上げるとデュランが顔を背ける。何日もその繰り返しだった。

不安がつのり、隅で控えているタンギューの傍へ行き、そつとそれを囁いたら、タンギューから答えを貰う前に、デュランに腕を？まれソファへと運ばれた。

ふわりと身体が浮き、気付いたらデュランの膝に抱えられている。驚く間もなく、アヤカーナの唇へデュランの濡れたそれが降ってきた。

「キスの時にすることは？」

唇の上で囁かれ、アヤカーナは思い出したように瞼を閉じる。

長いキスが続き、少しだけ唇が離れる。デュランの唇が頬から耳へと肌を掠めるように伝っていく。

「タンギューとダズンに声を掛ける前に、俺に一言断ること」

「…っん」

「…返事は？」

言葉の間に何度も濃厚な口付けが降ってくる。

「…っ はい、はい」

「それに男には、自ら触れない。腕に手を添えることも手を握ることも駄目だ」

「はい」

デュランはにこりと微笑い、いい娘だ、と軽く音を立ててアヤカーナへ口付ける。我に返ると、アヤカーナはソファに身体を沈めるように座っていた、デュランは何事もなかったように、机に着きペンを走らせている。ダズンもタンギューもいつもと変わらない様子に見えた。ただ部屋の空気は軽くなったように感じた。

それ以来アヤカーナは何事もデュランへ声を掛ける。

殿下、と愛らしい声で呼ばれ、何だ、とデュランが顔を上げる。仕事を中断され、嫌がっている様子はない。アヤカーナはほっとして続ける。いつ切り出そうか迷っていたのだ。迷っていたら、もう迎えがくる時刻になっている。

「明日は陛下の思召により、アザレア達と近衛隊の稽古の視察に参りますので、お暇を頂きます。」

兵隊さんの視察なんて、私初めてなので、とてもドキドキしています。」

恥ずかしそうに笑っているアヤカーナに、デュランは言葉が返せない。視察なんぞ知らなかった。

それも騎士たちの視察…、意味が分からない。

近衛隊は上流貴族の御曹司の集まりであり、令嬢方の憧れでもある。なぜ、わざわざそいつらに、アヤカーナを見せなくてはならないんだ。

デュランの目が据わっていく。

「おい、タンギュー…」

名を呼ばれタンギューは寄り掛かっていた背を起し、起立した。

「近衛隊からは何も申し出を受けていないが。」

「私も存じ上げませんでした」

タンギューの言葉を受け、ダズンへ目をやる。ダズンも首を横に振っている。

この二人が俺を謀ることは有り得ない。

ということは　あのクソジジイ共め！　デュランの頭に父親とリキュウの顔が浮かぶ。一体何をしたいんだ！？

聴いていない！と抗議を申し出てもリキュウのことだ、報告したとか何とか言っつて、俺側の責任にするはずだ。何か来ていないかと、

机の引き出しを順に開けていく。何もないな、と最後の引き出しが閉じられる瞬間、デュランの目にクリーム色の封筒が映った。

これはフォンテーヌが置いていった封筒だ。目を通してここへ放り込んでいたのか。

その中身は裏社交界の仮面舞踏会への案内状だった。彼女にはあの時、出席しないと断った。デュランは封筒を開け日付を確認する。今晚だ。

ドミモンド、それは社交界に入れない人間達が集う場である。と言っても、本物の貴族達が多く出入りしている。そして、そこに参加している女性陣は、高級娼婦とも呼ばれているが、全てが娼婦だと云う訳ではない。冒険心の強い貴族の女性達もこっそりと出入りし、顔のばれない仮面舞踏会で、羽目を外して遊んでいる。ドミモンドは格式ばらない格好の娯楽だ。

デュランにとっても仮面舞踏会は身分を隠せる、最高の遊興の場で、翌日まで遊ぶというのは茶飯だった。だが、それも半年ほど前までの話。

確かにデュランはドミモンドで酒や女遊びを教わり、一旦はそれに浸った。だが、もうすでに厭きていた。

今では、いつまでもそれに留まり、浸っていられる諸侯に、ある意味畏敬の念を抱いている。また、彼らに苦笑を向ける自分がいることも事実だ。

顔を出さなくなり久しい、それなのに、未だに父とリキウにドミモンドへの出入りを注意される。

成年へと変わる己の心境を無視し、小言を繰り返してくる父とリキウへ対する反抗心が、ふつふつと頭を擡げてくる。

デュランの瞳がキラリと光る。

仮面舞踏会へは、フォンティーヌに誘われ、何度か一緒に通ったこともある。もちろん彼女と連れ立っていた時は、彼女を護るためだった。

確か、アヤカーナはブンチョウへ行きたい、と申ししていたな。

デュランの顔に口端を上げた皮肉っぽい笑みが広がる。頭の中で、今晚の手筈を組み立てる。慣れたもので、直ぐに組み立て完了である。

デュランはにっこりと微笑い、アヤカーナに応える。

「明日は私も忙しい。アザレア達と近衛隊の勇姿を堪能しておいで。そうだな、今日中に、近衛隊について、少し私が教えてあげよう」「アヤカーナはデュランに微笑みを向けられ頬を染める。ありがとうございます、と真っ赤になって応えた。

デュランの頭の中は、ワガセヒロ帝と宰相リキュウへの意趣返しで一杯だった。

ダズンとタンギューは、アザレアの高笑いしている姿が、目に見えるようだと思っていた。近衛隊の視察など考え付くのはアザレアくらいだろう。デュランの独占欲を刺激したつもりか…

甲高い笑い声まで聴こえて来そうだ、と二人同時に片手で耳を塞いでいた。

その夜、アヤカーナは寝室を行ったり来たりしていた。頭の中はドュランからの伝言で一杯だった。

『今宵、夜会へ共に。一切の他言は無用。』

この伝言は、寝台へ入ったアヤカーナへの手の中へ、女官の一人が、殿下からです、と忍び込ませてきたものだ。

女官の行為にも驚いたが、内容がはつきりと理解できず、アヤカーナには戸惑いの方が大きかった。

小さな灯だけの部屋の中、手にしている紙切れに、はあと息をかけてみたり、それを透かしてみたりする。

：やはり、文字は増えてもいなければ、見落としてもない。伝言に従い、誰かに訊くことも出来ない

アヤカーナは肩を落とす。そんな自分の姿が映った鏡が目に入り、さらに溜息が零れた。

そこに映る姿は、すでに寝巻に着替え、髪も下ろしている少女。

もし、ドュランと夜会へ出掛けるとしたら、この寝巻姿は有り得ないし、それに時間だって遅い。いくら考えても夜会など無理だ。

もしかしたら、今夜のことではないのかも。

考えるのを諦め、くるりと回れ右をし、寝台へ戻りかけた時、背後のカーテンが揺れた。はっと息を呑んで振り返ると、黒づくめのドュランが唇に指を当てて立っている。悲鳴を上げそうになったが、いつの間にかその姿にうっとりとする。

黒いドミノ（マント）を纏ったデュランは、さながら妖しい魅力を湛えた闇の皇子のようだ。

デュランは目を丸くしているアヤカーナを見つめ、ふっと苦笑いをする。小さな灯りが金色の髪を琥珀色に輝かせ、まるで絵画の天使のようだ。そんな少女を、安全な宮殿から連れ出す行為に、咎とがを感じるも、慌てて打ち消す。

「近衛の者たちが集まっている仮面舞踏会へご一緒していただいけませんか、姫」

言つて、片手を胸に当てアヤカーナの前へ跪いた。

アヤカーナは、はいと思わず差し出された手を取りそうになるが、手を握り顔を背けた。

その様子に、デュランの眉が軽く上がる。

「この寝巻では、外出できません」

ああ、と笑い、デュランは包みを差し出した。

「…これに着替えるのですか」

寝台に広げられた衣装は初めて見るものだ。大きなフリルの付いたボンネットに、仮面もある。

殿下曰く、村娘風の控えめな衣装なのだそうだ。しかし、どうしよう。一人で衣装を着ることが出来ない。コル・バレネだって一人で身に着けたことがない。

でも、殿下と舞踏会へ行きたい。衣装をじっと見つめ、女官を呼んで貰おうと顔を上げたが。

「誰にも気付かれないうちに、早く着替えて出かけよう。」

警戒するように囁かれ、アヤカーナは着替えの手伝いを言い出せなかった。

仕方ない、と意を決しコル・バレネに手を伸ばす。

「俺は後ろを向いているから」

ドユランはアヤカーナに背を向け、話を続ける。

「今宵の約束だ。」

俺のことはドユーと呼ぶように。決して殿下とは呼ばないこと。」

「はい」

「アヤカーナのことはアヤと呼ぼう。」「はい」

「そして、俺の傍からは離れない、他人と話をしない。」「はい」

ドユランの背後から、衣擦れの音とともにアヤカーナのくぐもつた返事が繰り返される。

アヤカーナはドユランへ返事をしながら必死で着付けをしていた。なぜか前が大きく開いて、押さえていないと胸がこぼれそうだ。

コル・バレネが緩いのかと思い、つまんで引き上げる。

益々緩くなったように感じるが、片手で押さえていれば大丈夫、と急いで仮面を付けボンネットを被る。

衣擦れの音が止み、アヤカーナの終わりました、という小さな声が聴こえ、ドユランは笑顔で振り返る。次の瞬間ドユランは啞然とし、硬直したまま動けなかった。

あの右手を離したら、村娘の衣装は全て脱げる！

広い舞踏場は仮装した男女でごった返していた。皆一様に仮面を

ダンスフロア

つけ顔の上半分を隠している。頭上には色とりどりのランプが吊られ、大きな植木鉢が巧みに配置され、その陰で寄り添う男女が秘密めいた雰囲気醸し出している。

アヤカーナは部屋の隅でデュランの腕を掴み、ダンスフロアをもの珍しそうに眺めていた。女性は肌を露出した古代調の衣装が多く、胸が強調されている。それに比べアヤカーナの装いは、デュランの言うようにとっても控えめだ。

胸の開いた自分の着付けは間違っていたみたいで、デュランが全て直してくれた。

器用にコル・バレネの紐を締め、身頃やらスカートやらを順序良く重ねていく。そんなデュランの手際よさに、最初は驚いたが、衣装を着せてくれていたデュランの姿を思い出すとアヤカーナの顔に微笑が浮かぶ。

アヤカーナは自分の装いが、逆に目立って、愛らしい笑みが、魅力を増して見せていることに気付いていない。

「あの方、じつとこちらを見つめているわ」

先程から仮面の奥の視線を感じていた。デュランの影に隠れてはそつと顔を出すが、その視線が離れることはない。視線の主は背が高く、銀色のドミノを纏いフードを被った男性だ。こちらを見つめたまま、気だるそうに大理石の柱に凭れて動かない。

デュランも気付いていた。睨み返してはいるが、こちらに視線を向ける事無く、アヤカーナだけをずっと追っている。

「そしらぬ振りをしているんだ」

デュランはアヤカーナを腕の中へ抱き込むと、男の視線から隠す。こちらのものだと示す意を込め、ゆっくりと金色の髪に口付けを落

とし、顎をのせる。

静かに柱の方を見れば、男の姿が消えていた。辺りを見回して、銀色のドミノを探すも見当たらない。諦めてくれたか。デュランは安堵し、アヤカーナを放した。

デュランの、もう大丈夫だ、という声を聴きアヤカーナは広い胸から顔を離れた。デュランの腕は掴んだまま柱をちらりと見る。男が居ないこと確認すると、安心して思い切り息を吐いた。

途端、目の前に手が差し出される。ぎよっとして見上げれば黒いケープに仮面の男が立っていた。口元のえくぼが目立っている。

「恐れ入りますが、私と踊っていただけですしょうか、村の娘さん」

アヤカーナは反射的に驚いてデュランの腕の中へと戻る。しかし、えくぼの男性は笑って続けた。

「舞踏会でのダンスは、我ら男性に公平に与えられた権利です。

是非、私にもチャンスをお与え下さい」

デュランにしがみつくアヤカーナの腕へ、男は強引に手を伸ばし始める。

「あちらに、村の娘さんと踊りたい連中が列を成しております。まずは私と」

男が目にした方を見れば、確かに数人の男性が此方を伺っている。仮面を付けてはいるが、間違いない、あれは近衛隊の連中だ。

連れがいる女性に声を掛け、その連れから奪うのは、己の方が上だという自信の表れであり、貴族連中が好むやり方だ。

デュランは確信し、ほくそ笑む。

「ほう、私の連れに手を出すとはいい度胸だ、近衛隊長タンギューの覚えめでたい近衛勇士ファイイ君」

差し出した腕をぴしゃりと振り払われた上、正体を見破られた男は、改めて目の前の黒尽くめの男を見回した。

誰だ。隊長を知っていて、長身で栗色の髪、仮面から覗く瞳は琥珀色…

ファイイの喉の奥から乾いた音が鳴った。

姿勢を正したファイイに、デュランは片方の口端を上げ笑う。

「さて、列を成している連中とやらの許へ参ろうか」

2・(後書き)

すみません。推敲していません。変な文はご勘弁を。()ノヽ。
()。ビエーン()。ノヽ()チラツ。()。ノヽ()。ビエ
ーン

高級娼婦と呼ばれる女性達が参加する、派手なドミモンドの舞踏会は、大きな舞踏場の他に、密会や逢引に使われる大小多数の部屋が、公然と用意されている。

その一つ、大きなバルコニーの付いた部屋で、アヤカーナはドュランとファイイはじめ四名の仮面を被った男性達と、テーブルを囲んでいた。

人ごみと香水で息苦しい舞踏場と違い、この部屋は空気が澄んでいる。

このまま皆さんとお話した方が楽しそうだと感じ、畏まっている男性達にアヤカーナは笑顔を向ける。

ファイイが甲斐甲斐しく動き回り、ドュランとアヤカーナへ飲み物を運んでくる。彼は二人の前へグラスを置くと、椅子の前で一旦直立し、他の三名と同じく背筋を伸ばしたまま、腰を下ろした。

ゆったりと長椅子に身体を預けているドュランは、四名の仮装した男達、一人一人に視線を巡らし目を細める。

「近衛隊の諸君、今宵の収穫を聴かせて貰っても良いかな」

普段のドュランならば、ドミモンドでは身分を問わず皆と交流しており、近衛隊の諸君などと、呼称することはなかった。しかし、いつもの無礼講の定義は、目の前の男が己から連れを奪おうとしていると気付いた時点で、頭の中から綺麗さっぱり消えていた。

四名の騎士達は、本来なら本日の女性談義ウチゴトに華を咲かせるところだが、いつもと違う殿下の態度といい、連れの女性の正体に確信が

持てるまでは黙っている方が懸命だと感じ、その問いに応える者はいなかった。

いつもの裏社交界なら、デュランの存在は遠目でも直ぐに判断が付いてたいだ。そうなれば近衛として、遊興より皇族の警護が第一となり、連れの女性を警戒し、デュランの鼻先で声を掛けるなどというへまをする筈が無かった。

この半年余り、裏社交界の集まりでデュランを見かけることがなくなり、油断したと四人はしきりに反省していた。

「何を収獲するのですか、ドユー」

緊張した場にそぐわない無邪気な声が、デュランの隣の女性から響く。

デュランはにこりと微笑い、アヤカーナへと視線を移す。

「彼らは閨房術を実践するための女性を探しているのですよ。

貴女に声を掛けてきたのもそういう訳で、男性は騎士だろうが貴公子だろうが、気を許してはいけないということです。」

丁寧話し、これでアヤカーナも周りに警戒心を持つだろう、とデュランは満足気にグラスを手に取った。

「まあ。それは皆様、ドユーの真似をなさっているということですね」

アヤカーナの一言に、口にした葡萄酒が気管に入り咳き込む。意味が分からず顔を横に向けると、アヤカーナはほんのりと頬を染めていた。

「ドユーがむかう方向に皆が従うのは当然ですもの。

ドユーがこちらへ動けば、皆もこちらへと動く。動かなければ動かない。

ブンチヨーとやらに入り浸れば、ドユーに忠誠を誓った皆様は同じく入り浸る。

でも、皆様は快樂を求めながらも任務を忘れない、それがパーレ

スの騎士だ、とアザ…っじゃない。

えっーと、私の友人が申しておりました。」

ドユランは目を見開き、照れくさそうに微笑んでいるアヤカーナの横顔をみつめた。

友人とはアザレアのことだ…。臣下の行状は主、つまりは俺の責任だと言っているのか。

思わず額を押さえ、女傑の先手に舌を巻くしかないと肩を下ろす。夕刻にダズンとタンギューが聞いたのと同じアザレアの笑い声が、数刻遅れでドユランの頭の中で響き渡っていた。

「皆様、ご苦労様です。」

私もドューの進む方向に付いてまいりますので、よろしくお願い致します」

そう言って、ぺこりと頭を下げたアヤカーナに、四名の男性は釘付けになっていた。

「ドューも私が後ろに付いていることを忘れないで下さいね」

一方、真剣な眼差しを向けて告げるアヤカーナに、ドユランは目を^{みは}睜^みつた。

目の前の村娘はケセン王女だと四人が四人とも確信した。仮面を被^かつてはいるが、少女の純真な表情と想いが手に取るように分かる。

宮殿の中を隊長やレディ・アザレア達と歩いているのを、フィイはよく目にしてきた。殿下と連れ立った姿を見たのは初めてだ。

見栄えが良いだけの王女だと思っていたが、もしかするとパールスは宝玉を皇后に戴けるのかもしれない。そう思うと、フィイの心が沸き立つ。

フィイは陛下と殿下に捧げているオマージュを、この王女へ捧げてもよいとさえ思え、跪きそうになるのを慌てて堪える。他の三人に目をやれば、互いに頷きあい、同じ気持ちだということが伝わってくる。この王女は、きつと殿下を支えてくれる。パールの未来

に思いを馳せ、感謝せずにはいらなかった。

ドユランは驚いていた。俺が向いた方に皆が付いてくる…、当然だと思っていた。その行動による結果など考えたこともない。今までの短絡的な己の思考回路を省み、ふつと自嘲が零れる。褒められそうなことなど、全く浮かばない。

…そうか、これからは後ろにはアヤカーナが付いているのか。小さな何かドユランの胸の奥に灯り、そこが妙に温かく、くすぐったかった。

突如、各々のもの思いを破るかのように、扉を叩く強い音と共に鈴の音が響いた。

扉が開くのと同時に、妖精の衣装を身に纏い、背中に羽を付けた女性が三名、短い杖の先の鈴を鳴らし、ひらひら舞いながら部屋の中へと進んで来た。

「美しい男性達が、一つの部屋に固まっているなんて、反則ですよ」

男性達は不意を付かれ、驚いたように起立し、女性達を見つめる。紅い髪を高く結び上げた水色の妖精がドユランの前で止まり、ドユランの頬を滑るように撫でる。

「来ないって、言ってたくせに。嘔吐き」

フォンティーヌだ！アヤカーナを含めそこに居た全員が、乱入してきた妖精の正体に気付いた。フォンティーヌの後ろで、鈴を鳴らしながら、くすくす笑っている黄色と赤の妖精二人も貴族の令嬢なのだろう。

「フォンか。」

ドユランは安堵して名を呼び、直ぐに眉を寄せた

「護衛は付いて来ているのか。」

「心配性ね。」

大丈夫よ、今日は城から三名ほど付いて来ているわ」

フォンティーヌは拗ねたように唇を突き出し、近衛隊の騎士たちへと身を翻す。

「フイイ、コンブ、ラック、ダン。楽しんでる？」

さあ私達妖精が、魔法を掛けに来ましてよ」

三人の妖精は、男性達頭上へ杖を振り上げると鈴を鳴らしながら、くるくると男性の周りを回りだした。三色のドレスが舞い、鈴の音と笑い声が部屋に反響して、まるで幻想の中にいるみたいだ。

男性達は、妖精の羽を掴もうとしたり、蝶の形をしたマスクを外そうと手を出すが、妖精たちは慣れた素振り巧みに躲し、男性の手をすり抜ける。

アヤカーナは一人座ったまま、その戯れを見上げていた。デュランが妖精達に手を伸ばさないことが唯一の救いだが、胸が深く開いた、軽やかな三人の衣装に比べ、自分の控えめな衣装が惨めに思えてくる。それに私は騎士の方達の名前さえ教えてもらっていない。フォンティーヌが舞うように、デュランの左手を掴み扉へと引いて行く。

「ダンスを踊りに参りましょう、ドユー」

フォンティーヌは嫌に甲高い笑い声を上げ、開いたままの扉を足を速めて通る。デュランはたたらを踏みながら声を上げた。

「フイイ！アヤの護衛を頼んだぞ！！」

他の妖精も男性達の手を引き、フォンティーヌの後を追って嵐のように去って行く。赤い妖精は二人の男性を連れて行った。

今までの喧騒が嘘のように静かになった部屋には、アヤカーナとフイイだけが残っている。

沈黙が続く、王女へ何と声を掛けてよいのやら、フイイは見当が付かなかった。頂垂れて小さくみえる少女の顔がボンネットで隠れ

て見えない。置いてけぼりを食い、泣いていないかとファイイは心配したが、護衛を全うすべき、と余計なことは頭から追い払った。

アヤカーナは、予期していなかったフォンティーヌの出現により、乱された気持ちが悪く着くのを静かに待った。子供の頃から王女として、見苦しい姿を晒さぬよう教育されている。

息を整えたアヤカーナは、ふらりと立ち上がると、ファイイの前へ優雅に進み、右手を差し出した。

ファイイはアヤカーナの様子に戸惑い、一步退く。

「ファイイ殿、先程のダンスの申し込み、喜んでお受けいたします」
仮面の奥に見える灰色の潤んだ瞳に魅入られ、ファイイはアヤカーナの手を取った。白い小さな手の柔らかい感触に我に返ったファイイは、仕舞ったと思った。

王女にダンスを申し込んだ時のデュランの様子を思い出す。

王女と踊って俺の首は繋がっているのだろうか。

ファイイは天を仰ぐしかなかった。

3・(後書き)

この舞踏会、まだ続きます。

舞踏場の扉の手前で、アヤカーナは立ち止まり心に決めた。ドユランの姿を絶対に探さない、と。

私に用があるならあちらから来るはず、置き去りにしたのは殿下の方ですもの。

客達の笑い声や陽気な話し声が広間に溢れ、場は盛り上がっていた。

アヤカーナはフィイの腕に導かれ、優雅な舞曲に歩調を合わせる。ダンスなど滅多に踊ることが無く、初めは思い出しながら足を運んでいたが、直ぐに慣れ、身体を動かすことが思いのほか、楽しいことに気付いた。優しくリードしてくれるフィイに笑顔を向け、舞踏に必要な仕草を繰り返す。ダンスに夢中で周りのことなど一切気にならなかった。

「フィイ、もう少し身体を寄せてくれた方が、踊りやすいのですが」なぜか急にフィイがアヤカーナとの間を空け、その間をアヤカーナが詰める。何度もその行為が繰り返され、とうとう我慢できず、アヤカーナは切り出した。先程まで、とても踊りやすかったのに。「申し訳ありません。ボ、ボンネットが邪魔で」

フィイは寄って来るアヤカーナの身体との間に、腕を張り隙間をつくる。

「まあ、ごめんなさい。」

曲が終わったら、ボンネットを外しますので、また踊って下さいね」

ファイイの顔が引きつり、仮面の内側から汗が伝う。

こんな大きなボンネットを外されでもしたら、王女の容姿が客に晒される。

「いえっ 大丈夫ですから、外さないで下さい。お願いします。」
焦るファイイの耳に、いい加減にしろ、と囁き声が入る。声の主は音楽に乗り、身を翻して遠ざかる。

先程から、コンブ達が入れ替わり、離れる、踊りを止める、とすれ違いざまに囁いて行く。

分かっている。五・六人を隔てた所で、殿下がフォンテーヌを腕に、こちらの様子を気にしていることなど、とうに気が付いている。彼らから少しでも離れようとリードを続けているが、一向に距離が開かないことも重々承知だ。

だからと言つて、途中で踊りを止めるなど王女に申し訳ない。せっかく笑顔を取り戻し、ダンスを楽しんでいる王女が可哀そうだ。

しかし、ファイイとて我が身が可愛い、せめてもと思い王女から身体を離し、添える手も軽くしているつもりだったが、王女に踊りにくいといわれては、これも徒労に終わりそうだと感じていた。

曲が終わりファイイは、ほっと息を吐き、アヤカーナに礼をする。

次に待っていることを考えれば、胃が引き攣れるが、とにかく王女を一旦踊りの輪から外し、休ませよう。

「あちらで、飲み物でも如何ですか」

ファイイは、とても楽しかったと笑っているアヤカーナへ腕を差し出す。

はい、とアヤカーナがファイイの腕に手を添えようとした刹那、横から伸びた腕に両手を攫われた。

「っ……」

「一曲、お相手を」

抱えられるように連れてこられた場所は、ダンスを踊る人々でも混み合っていた。一瞬の出来事でアヤカーナの思考はついてこない、見上げると銀色のドミノにフードを被った男が、華奢な身体を抱き寄せ、再び始まった舞曲に足を合わせようとしていた。嫌っ、と腕に力を込め、離れようともがくが、簡単に押さえ込まれ、男の力には敵わないことをアヤカーナは思い知らされる。それだったら、石になってやろうと思ひ、全ての動きを止めて固まってみる。

頭の上でくつくつ笑う声が聞こえ、銀色の男の頭が降りてきた。アヤカーナはさらに身をこわばらせる。

「アアヤ、私だ。力を抜いて踊って。」

聞き覚えのある声に、はっとして顔を上げる。仮面の奥に見える灰色の瞳はよく見知ったものだった。

「…マリユス従兄さま？」

男が頷くと、アヤカーナは身体から力が抜けて行き、はっと男の胸に寄り添い、音楽に足を乗せた。

いきなり目の前の女性を攫われたファイイは、瞬間呆然とした。慌てて我に返り、男と王女を追う。自然と剣の柄に手が掛かる、舞踏会だろうが何だろうが剣を抜くことに躊躇はない。

長かった曲が終わり、デュランはもう一曲、と強請るフォンテーヌのエスコートを放棄し、眼の端で追いつけたアヤカーナ達へ身体を反転させ、二人の姿を探す。

そんなデュランの眼に映ったのは、踊りの輪の中央へと足早に向かうファイイの姿だった。

踊り出した客達の間をすり抜け、デュランはファイイの後を追う。人ごみの隙間に止まったファイイを認め、傍へと進み、彼の手が剣の柄に掛かっていることを確認する。悪い状況ということか。

ファイイの視線の先に、銀色のドミノを纏った男の腕に抱かれ、踊るアヤカーナを見てとり、デュランは眉を寄せた。

「何があった」

デュランもファイイも男から視線を外すことはない。

「はっ、王女殿下を奪われました。申し訳ありません」

「目的はダンスか」

「踊りながら、普通に会話しているようにも見受けられますが、連れ去り方が尋常ではありませんでした。」

舞踏場のど真ん中で、立ったままの人間は邪魔以外の何者でもなく、デュランの身体は幾度も押されたが、意識は目の前の銀色のドミノの男に集中していた。

柱の影から、ずっとアヤカーナを見つめていた奴に間違いない。

何が目的だ。

「ダン、ロック、コンブ、周りを囲みました」

ファイイの言葉にデュランは頷き、指示を与える。

「私がアヤを奴から取り戻すから、奴が一人になったら捕縛せよ」

「綺麗だよ」

相変わらずのマリユスの台詞に、アヤカーナはぶっーと頬を膨らませる。

「私、仮面を被っているのよ、顔なんて見えてないでしょ。」

それとも、二年も会わないでいるうちに、マリユス従兄さまは魔法使いにでもなったの」

アヤカーナがマリユスと会うのは、二年振りだ。

二年程前、マリユスの生家で相続に関する問題が発生したらしく、突如マリユスに帰郷命令が下り、彼はケセンの王宮を後にしていた。マリユスは王女アヤカーナの従兄弟といっても、王妃方の従兄弟であり、ケセン王室の人間ではなかった。それ故、ケセン王室で養育されるという話は筋が通ってはいなかったが、王妃が早くに亡くなった実姉を悼み、姉の忘れ形見であるマリユスを手許で育てること、元来ケセン王宮が寛容だったということもあり、意義を唱える者はいなかった。

13の歳までいつも一緒に居た従兄が懐かしく、アヤカーナはぎゅっとマリユスに抱きつく。

「魔法使いにはなれなかったけど、私のアーヤをパーレスへなど輿入れさせないよう、頑張ってたよ」

溜息を落として、従兄を睨みつける。

私がパーレスへの輿入れに納得していることを、マリユスは知っているはずなのに。

なぜ聡明な従兄弟がこの話を繰り返すのか、アヤカーナには理解できない。

「おお怖。あの可愛かったアーヤがいつの間にか、そのような眼を私に向けるなんて」

抗議の声を上げようとするアヤカーナの唇を、マリユスの指が塞ぎ、耳元で囁く。

「静かに。私はパーレスの国民じゃないのだから、目立つのはまずい。

今は、このまま黙って私の話を聴きなさい。

君のパーレス入りを聴いて、久々ケセン王宮へ出向いたら、城の中は涙に暮れていたよ。

王女へ櫛の一本さえ渡せなかった、とナギーとマールは死にそんな貌をしていた。老将ロブは君の警護に就くためパーレス貴族になる、と伝手を探していたよ、本人も無駄だと解かっているが、そうせずにはいられないのだろう。

でも心配はいらない、皆元気に暮らしている。」

ナギーとマールは私が子供の頃からの侍女、ロブも私付きの護衛隊長だ。三人ともパーレスへ嫁ぐ私に付いて来てくれることになっていたが、国境の町モートヨシで別れてしまった。

アヤカーナの瞳に涙がこみ上げてくる。皆に会いたい、帰りたい。

「両陛下はつつがなくお過ごしで、弟君達は帰ってくるな、と言っていたよ」

そうアツキ達は、私が居なくて……はあ？ 帰ってくるな！ですって。

泣きそうだったアヤカーナがぷりぷり怒り出すのをみて、この手に限るとマリユスは、笑いを堪えた。

まさか、裏社交界でアヤカーナに逢えるとは思ってもいなかったが、ケセンで目にしてきたことを、偶然にも伝えられ、幸運だったアヤカーナにとって何よりの便りだろう。

怒りながらもアヤカーナは舞曲に合わせ、マリユスの周りを回り、腕を上げ、彼と絡め顔を寄せて小さな声で訊く。

「ところで、どうして従兄さまは舞踏会に居るの？」

「ん、内緒だよ。昔から、裏社交界が私のパーレス情報源なんだ」片目を瞬かせるマリユスに、アヤカーナは呆れてものが言えなかった。

他国に忍び込んでいたなんて！

「ああ、タイムリミットだ、アーヤ。」

王子様がお姫様の救出にやって来た。」

マリユスは踊りを止め、両手で彼女の頬を包み込んだ。

「忘れないで、私は君をデュラン皇太子に渡さないことを諦めた訳ではないからね」

言って、アヤカーナの唇に軽くそれを落とす。

驚くアヤカーナの前でサツと風が動き、マリユスが走り去り、人混みに紛れる前に一度だけ彼が、こちらを振り返ったのが見えた。

その様子を、踊る人々で混み合う舞踏場の真ん中で、身じろぎもせず立ったまま見つめる妖精がいた。マスクの下の表情は固く、翠色の瞳は険しかった。

銀色の男が近衛達に後を追われ、村娘が黒尽くめの皇太子に抱きかかえられて去るのを見送ると、妖精はサツと身を翻しそのまま舞踏場から立ち去った。

視界がぼやけ、アヤカーナの瞳から涙が零れ落ちそうだった。今、馬車にゆられ仮面舞踏会を後にしたところだ。マリユスが走り去った後、呆然として、動けずにいるのをデュランに抱きかかえられ、馬車へと放り込まれた。

座席の縁に身体をぶつけ、その痛さで我に返ったのだが、デュランの冷たい瞳に射竦まれ、痛みなど吹っ飛んだ。よじ登るようにして座席にきちんと座り、力なく微笑みを向けても、デュランの眼差しは厳しいままだった。

足下には、はずみで頭からとれたボンネットが落ちていた。アヤカーナはそれをじっと見つめ、涙を堪える。

デュランは馬車の扉を力任せに閉め、掛け金を掛けると、向かい側に腰を下ろし、御者に馬車を出せ、と声を上げた。

腕を組み、目の前の少女を下から上へゆっくりと眺める。デュランの長い脚はアヤカーナのボンネットを踏みつけていた。

「仮面を外せ」

デュランの低い声に、アヤカーナはピクリと身を竦ませ、紐を解き仮面を外す。恐る恐る視線を遣れば、デュランも仮面を外すところだった。彼の優雅な動作に、つい見惚れているとデュランと目が合いそうになり、慌てて自分の手にした仮面へ視線を戻す。

デュランは仮面を外し髪を掻きあげると、アヤカーナに眉を顰めた。

「これから訊くことに、正直に答えるように」

アヤカーナは息を整えて、はいと返した。

「あの男は知り合いか？」

デュランの抑揚のない声に慄きながらも正直に、はいと答える。

すると、息を呑む音がして、ドユランが笑い出す。

ドユランは馬鹿にされた気分だった。「冗談じゃない。純真そうなふりをして、他の男とキスを交わす。あれは、無理やりという風ではなかった。」

だが、と少しでもアヤカーナを心配した己が、滑稽に思える。

「ほう。俺はお古を嫁にするのか。」

パーレスも随分とケセンに舐められたものだな」

「お古とはどういう意味でしょう」

すかさずアヤカーナは返す。祖国を侮辱する人は殿下でも許せない。

「お古はお古、使い古し。それ以下でも以上でも何でもない」

「では、殿下も中古品ですね。」

ドユランから笑いが消え、唇がわずかに歪む。湧き上がる怒気を持ち前の自制心で押さえ、アヤカーナが次に何を言い出すのか、座席に身体を預けながら、腕を組んで待った。

お古と称された、アヤカーナの怒りは収まらない。剩あまじいえ、ケセンが礼儀知らずの様に言われるなんて心外だ。

「私が従兄いとこのマリユス従兄にいさまと踊るだけでお古なら、殿下はフォンティーヌの中古品です。」

マリユス従兄さまは、ケセンの皆みんなが、つつがなく暮らしていることを、私に伝えに来てくれただけなのに…。

殿下は楽しそうにフォンティーヌと、いちゃいちゃしていました。

「あの男は王女の従兄なのか…」

中古品と言われた怒りより、ドユランはアヤカーナの言葉でその男の行動へと感心が移る。なぜケセン王家の者が、パーレスのドミモンドへ…。

今宵、アヤカーナがあの場合へ行くことなど誰も知らなかったはず、来訪を決めたのは数刻前、俺自信が下したのだ。

アヤカーナもあの男が居ることなど、知らなかったのは間違いない。

男の目的が、アヤカーナへ城の便りを伝える為で無いことは確か
なはず。

しかしこれ以上詮索するには、男の情報が乏しい。ダズンとタン
ギューの顔が浮かび、早計は禁物と頭を切り替え、ファイ達が奴を
捕まえてくれることを信じる。とにかく、それからだ。

「それに執務室でもフォンティーヌと抱き合っていました。」
アヤカーナの訴えで、ドユランは我に返った。

先程から、いちやいちゃ、だの抱き合って、などと…取るに足ら
ないことを。あの様な行動は親戚同志なら日常茶飯事だろくに。従
兄妹同士で、付けを交わす奴らが何を言うのか。

ドユランは慚然とした。
「俺はフォンとキスなど交わさないぞ」

ドユランから自分自身が驚いた行為を出しに突かれ、今までの勢
いが嘘のように、アヤカーナの身体から力が抜ける。

見られていたなんて…。

「それは…、わたしも従兄さまとキ、キスなんて…初めて…でした」
ドユランはいきなり身を乗り出し、指先でアヤカーナの顎をつま
む。ドユランの頭の中には、男に両頬を包まれているアヤカーナの
姿が浮かんでいた。

「俺達の間には、嘘はなしだ」

潤んだ灰色の瞳を見開き、コクンと首を振るアヤカーナの姿にド
ユランは息を吐く。まるで、いたいけ幼気な子供を虐める気分だ。いいもの
ではない。

しかし、雑念を振り払い、瞳に厳しさを込める。

「今宵の従兄殿の最後の言葉は？」

「私を殿下に渡さないことを諦めていない…」と。

でも違つのです殿下、決して従兄はこの婚姻に反対ではないのです。

ただ、国同士の思惑で王族が犠牲になることはない、犠牲になる者達が哀れだ。という主張を持つているだけなのです」

必死に従兄を庇うアヤカーナの姿に、逆にデュランはその従兄殿に同情を覚えた。俺には愛の告白にしか聞こえないのだが、言われた本人は別に受け止めているようだ。

アヤカーナの話聞いて声を荒げるどころか、デュランは出鼻をくじかれた気がして、ふつと笑みがこぼれる。このお姫様は直球しか通用しないのか。それとも俗に言う天然か。

デュランはさつとアヤカーナの隣の座席へ移り、両手で彼女のウエストを掴み、己の膝の上に軽々と乗せると、アヤカーナが目を丸くするのを、醒めた満足感とともに見つめた。マリユスの行動により、デュランの中にケセンに対する不信感が、僅わずかながらも芽生えたことに間違いはない。まさか、この少女も何か一物を隠し持っているのか。

「アヤは俺が好きか、嫌いか」

デュランは顔を寄せ、唇が重なる寸前で質す。

「殿下が好きです」

アヤカーナは目を閉じ、あえぐように言った。

「殿下ではなく、ドユーと呼ぶように」

言つてデュランは激しく力強いキスを落とす。

アヤカーナの唇はゆっくりとこじ開けられ。やがて入り込んだ舌が、アヤカーナの舌を絡めとり交わつた。思わず小さな溜息を漏らすと、デュランは頭を傾け更に深く進入し、所有欲にあふれたキスを繰り返す。圧倒的で巧みなキスに酔いしれたアヤカーナは、デュランがブラウスの袖を引きずり降ろし、コル・バレネの紐を手馴れ

た指捌きで解くにまかせる。

やがてデュランは、胸元をブラウスもろとも一気に引き降ろし、アヤカーナの乳房をむき出しにした。

息を荒げアヤカーナは、二つの白いふくらみを熱く見つめるデュランを呆然と見下ろしていた。もう、何が起きるか分かっていた。デュランを止めなくてはいけない。なのにどんなに強く言い聞かせても、一方では期待感に心乱れる自分がいて、触れてと身体を反らす。

デュランは両手でそれぞれのむき出しの乳房をつかむと、薄紅色の堅くなった乳首の周りを親指で、円を描くようにたどる。アヤカーナの喉の奥から押し殺した声もれる。その反応を確かめると、デュランは重みを確かめるように乳房を掌の上に乗せ、乳首を摘み上げて愛撫を始めた。指先で軽くはさんでは親指でやさしく撫で、時には先端を爪で搔く。

アヤカーナは深く震えて息をつく、息が止まりそうだった。どうしても身体を動かせない。

「殿下、もう無理です…」

「しっ、ドユーだ」

震えながらも、やっと搾り出した声をデュランに消される。

アヤカーナはもう一度抵抗しようとしたが、唇を塞がれ抱き締められた。

デュランの指先が首筋を撫で乳房へと伝う、その後を追うようにデュランが唇と舌を使いゆっくりと降りていく。とうとうデュランの舌が乳首をかすめアヤカーナは声を上げる。デュランは少しだけ唇を離し、乳首にふうつと息を吹きかけた。全身に快感の震えが走り、欲望が湧き上がる。アヤカーナは浅い息を繰り返していた。

突然デュランが乳首を唇で包み込み吸う。熱く濡れた口の中で弄られていくうちに、アヤカーナはデュランの肩を両手で掴み、ひどく熱いものが身体の奥で熾きた。そこから、トロリとなにかが脚の

間を濡らし、嬌声がもれる。

欲望に駆られ、二人共、もう戻ることは出来ないと感じていた。

瞬間、御者の叫びとともに馬車が大きく揺れ、程無く停車する。

とつさにデュランはアヤカーナを抱きかかえ、身を伏せ衝撃から護る。揺れがおさまると急いで座席へ起き上がり、アヤカーナの身纏いをしながら、大声で言った。

「どうした」

答えは返ってこない。デュランは不審に思い窓のカーテンを捲り、外に目を凝らす。馬車の放つランプの明かりを受けて、前方に一台の馬車が停まって、その間で御者に何かを訴えている者がいるのが見えた。舌打ちし、真直ぐに宮殿へ向かわず、街の中をぐるぐる回れと命じたことを後悔していた。

話しが終わったらしく、御者はこちらへ走って戻ってくると状況を説明した。

「申し訳ありません。急に道の真ん中に立ちふさがれ、馬車を止められました。」

あれはヒルデイ家の馬車で、中にはご令嬢が一人。

賊に襲われ、宝石と馬を奪われたそうで、令嬢が怯えて馬車から動けず、助けて欲しいとの事です。」

「ヒルデイ家？今宵フォンに連れ添っていた赤い妖精殿か…。」

令嬢の顔は確認したのか。」

「赤いご衣裳を召しておられましたか、私はヒルデイ家の令嬢の容姿を知りませんので」

デュランは小さく息をついた。そして、座席でまだ顔を染め、荒い息をしているアヤカーナの前に膝を着いて視線をあわせる。

「大丈夫だから、何があってもここを動かないこと。俺はあちらの馬車を確認して直ぐに戻る」

はい、と頷くアヤカーナの頭を撫で、デュランは彼女の額に唇を

落とす。御者に馬車から離れないよう言い残し、前方の馬車へと向かった。

アヤカーナは座席に身体を埋め、胸に手を当てまだ高鳴っている動悸を鎮めた。溜息をつき、未知の世界を垣間見た余韻に浸る。

その時だった、鈍い音が一つ聞こえ、何か重いものを地面に置く音がした、と思ったら、デュランが出て行った方と反対側の扉がいきなり開き、そこから男が一人馬車に乗り込んできた。頭からすっぽり袋を被り、目の位置に穴が二つ開いている、まるで死刑執行人の様な姿の男だった。

アヤカーナが声を上げる間もなく、その男は素早く片手でアヤカーナの口を塞ぐとウエストに腕を廻し彼女を己の方へ引き寄せようとする。

アヤカーナは男から逃れようともがき、闇雲に腕を振り回した。幸運なことに、後へ振り上げた肘が一発、まともに男へ入ったようで、一瞬だけ力が緩む。その隙にアヤカーナは扉へ飛び付き、夢中で開けようとするが、直ちに背後から男の腕が首に食い込み、喉を締め付けられた。何とかして外そうと、その堅い腕に爪を立てるが、男の力に敵う筈もなく、首を絞める力が更に強まった。

首を絞められたまま、男と向かい合う。男の表情は見えなかったが、この卑劣な行為を楽しんでいるのが伝わってくる。

駄目、苦しい、息が出来ない、助けて、殿下…ドュー…。

空気を求め鼻腔が拡がり喉がせり上がってくる。頭の中が倍に膨れ上がって破裂しそうに感じる。見開いた目の中に黒い斑点が広がり視界が段々と薄れ行く。私はこのまま死ぬの…。

デュランは、ヒルデイ家の従者を尻目に馬車の扉から、大丈夫かと乗人へ声を掛けていた。中を覗けば、仮面を外して震えている女が一人。それは確かにヒルデイ家令嬢ソニアだった。

デュランの見る限りでは、ソニアの容姿に乱れはなく、身体への被害はなさそうだ。馬車を移動してもらうしかあるまい、と判断し、独りで動けるか訊ねる。

座席の隅に身体を寄せ、怯えているソニアは、デュランが何を訊いても、視線を彷徨わせるだけで、答えを返さない。デュランは仕方ない、と溜息をつきながら、ふとソニアの様子が妙なことに気付く。先程から遠くの何かを見てとり、その何かに反応している。

俺を通り越し、怯えながら一体何を見ている？

振り返ったデュランの眼に入ったのは、己の馬車の脇に投げ出された御者の脚だった。御者席に吊るされたランプの灯りが、倒れた男のブーツを、あたかもそれが主役であるかの様に照らしている。

デュランは疾風のごとく身を翻し馬車へと走る。果たして、馬車の扉を開け目に飛び込んだ光景に愕然とする。

狭い馬車の中、男の息遣いだけが大きく占めていた。

首を掴まれている少女の身体が弛緩して行く。死はもうすぐそこだ。

突如、アヤカーナは尻餅をつく。それと同時に留栓が外れた肺は空気を貪り、身体は無意識に深い呼吸を繰り返す。

呆然と目を見開き、胸を上下しているアヤカーナの上を誰かが飛び越え、前方の扉へと向かう。

アヤカーナの瞳には、今まで居たはずの死刑執行人の姿はなく、扉から身を乗り出し出している、デュランの後ろ姿が映っていた。

扉が勢いよく開くと同時に、アヤカーナの首を掴んでいた男が、脱兎のごとく反対側の扉へ、手を伸ばしたのをデュランは見た。同時に崩れ落ちるように、馬車の床に座り込んだアヤカーナの肩が、上下するのを見てほっとする。憤怒に駆られ、扉から飛び出した男の後を追いかけてしようとしたが、馬車から乗り出した所で思い直し、アヤカーナの許へ急ぎ戻った。

アヤカーナは何が起こったのか、把握するまで長い一瞬を要していた。つと、誰かに優しく首を撫でられる。

顔を上げれば、デュランの　　そう確かに、デュランの泣きそ
うな顔があった。

「あ……」

アヤカーナの声にならない声にデュランは頷く。その姿にアヤカーナは安堵する。ああ、助かったのだ。

「腰が抜けたようだな」

デュランが笑って言う。声が出なかつたのでアヤカーナは首を縦に振る。

何度も頷くアヤカーナの上に、デュランの胸が優しく覆いかぶさってくる。アヤカーナは先程のデュランの泣きそような顔が忘れられず、どうにかしわがれた声を紡ぐ。

「……こんな狭い場所で襲われるなんて、想定外です。護身術を

見舞ってやれませんでした」

デュランは静かに笑いながら首を振った。

犯人への憎悪に加え、うっ血で赤くなつたアヤカーナの顔と喉の指痕を見た時浮かんだ、彼女を亡くしたかもしれないという怯えが、まだ胸の奥底を嘗めている。また一方で、恐怖に泣き叫ぶことも、デュランを責めることもなく、健気に軽口を叩いている腕の中の少女が愛おしかった。

デュランは憤りと悲しみの混ざつた激情の中で、己の愛情の在り^あ処^かを悟っていた。

先程までの恐怖がデュラン胸の中で、嘘のように浄化されていく。ふわふわの真綿で包^まれているような安堵感に包^こまれ、動きたくないと思う。アヤカーナはデュランの胸に顔を埋め、腕を伸ばして背中に触れた。

悲鳴がした、と思った。

このまま、心地よさに浸っていたいアヤカーナは、顔を上げたデュランに、頭を振ってしがみ付く。

さらに悲鳴がした。腕が外され、デュランが剣を抜いた。有無を言わず腰をがっしりと掴まれ、身を屈めて静かに馬車から降ろされる。デュランに促され、手近な建物の前に積まれていた樽の陰へ、アヤカーナは身を潜めた。

デュランは物陰からヒルデイ家の馬車を伺う。動きは見えないが、聞こえた悲鳴は、ソニアのものだろう。

あちらには従者が付いている、自身のことは自身で護ってもらうしかない。これ以上アヤカーナを危険になど晒さない、俺は彼女を護る。

ヒルデイ家の話しを信用すれば、賊は馬を狙うはず。馬車を捨てるしかないか。

デュランは期を狙い、アヤカーナを連れ、馬車とは反対側、下町の路地の暗闇へ溶け込んだ。

「月が綺麗です」

思わず声に出るほど、満天の星に囲まれた月が青白く輝いていた。暗く不穏な路地を抜け、エイツリー山に在る宮殿の近くの白い石で舗装された広い道を、アヤカーナはデュランと手を繋ぎ登っていた。しわがれていた声も元に戻ったように嬉しい。それにデュランが隣に居てくれるので、不安は全くない。

「ああ見事な月だ」

ここまでくればもう大丈夫だ、とデュランは一息つく。

不思議なもので、必要としない時はやたらと出会う憲兵達に、全く会わずに宮殿の近くまで来た。計算外だったが、これはこれで乙なものだと思い、デュランは夜道を照らしてくれる、丸い月を見上げ皮肉な笑みを浮かべる。

「ところで、従兄君のことを聴かせてくれ」

アヤカーナは、寒いだろうとデュランが貸してくれたドミノの前を押さえ、目を丸くする。

「マリユス従兄さまですか？」

えっーと、マリユス従兄さまは私の五歳上で、お母様のお姉様のお子様です。

従兄さまとは、小さい頃からいつも一緒でした」

母の姉と言われても、ケセン王家の系図が浮かばない。デュランは隣国の王室に関して、何も把握していないことが決まり悪く、顔を赤く染め咳払いをした。

「ケセン王妃は、どちらのご出自になるのだ」

「ケセンの隣、ハイデン領主の娘で、お父様の一目惚れです。」

いまでも、お父様はお母様にめろめろで、見ているこちらの方が

恥ずかしいくらいなのですよ」

言って、照れながらアヤカーナは微笑う。

ドユランは眉根を寄せた。

ハイデン領… ケセンと国境を接するガンシユ国ハイデン領か。

となるとマリユスはケセン王家の人間ではなく、ガンシユの人間となる。いや、それとも王妃の姉はケセン貴族にでも嫁いだのか。

「マリユス殿の父君は誰になるのか教えてくれ」

アヤカーナは首を傾げて一瞬考え、にこりと微笑う。

「ガンシユの今の王様です。」

マリユス従兄さまは、ガンシユの何番目かの王子さまです。」

アヤカーナは一旦言葉を切り、どこか遠くのほうを見る。

「昔、ハイデンやその周辺では伯母様とお母様は、とても美しい姉妹で有名だったそうです。」

そんな噂を聞いて、こっそりハイデンへ覗きに行つたお父様は、お母様を根性でケセンの王妃に貰えたけど、それより以前、ガンシユ王に見初められた叔母様は頑として王を拒絶し、ガンシユ王との望まない懐妊、出産により17歳で逝つた、と聴いております。」

ドユランは驚愕していた。

マリユスがガンシユの王子。では、なぜ大国ガンシユの王子がケセンで育つ？ 頭の中は、まだ組み立てられていないジグソーパズルの山があり、そのピースを、夢中で嵌めようとしているかのようだ。不意にひとつのピースが嵌まり、ガンシユの新王太子のことが頭を過ぎる。

王太子の病死により、身分の低い女が母親の王子が、他王子を差し置いて立太子する 確かタンギューからの情報だったはず。

繋ぐ手に力がこもる。ガンシユの王子がパーレスのドミモンドに居た。何の為に？

ガンシユの王宮ではなく、ケセン王宮で育つた、そのマリユスという男は、何を考え、一体何を成そうとしているのだ。

「従兄さまは、とても優しく綺麗で、お城の女性達に人気があつ

たのですよ。

私なんて、いつも皆みんなにマリユス従兄さまに愛されて羨ましいって妬まれていました。

従兄様はただの従兄いとこで、私には、殿下だけなのに、変ですよね」
くすくすと純真な笑顔を向けるアヤカーナを見て、デュランはストンと腑に落ちた。

これか！マリユスとやらの目的は！！

デュランは髪を掻き上げ首を振った。疲れた、とにかく疲れた。
一刻も早く宮へ着き、正常な頭で考えたかった。

6・(後書き)

私も疲れました(笑)

正常な頭で続きを書かなくては……

(・)

・)

「みんなで幸せになろう」とその少年は言った。

四歳になったばかりのアヤカーナを抱え上げ、ケセン国サンワイ城の天守から南の方角を見据える。

夕陽せきやうが射していた。橙色に染まった城の石壁が反射して、まだ幼さの残る少年の横顔を照らしている。肩まで伸ばした癖のない薄い金色の髪を陽が透き、長い睫毛に縁取られた大きな灰色の瞳が輝いていた。その少年、マリユスの瞳は、遙か彼方の大帝国パーレスの首都サウザンタワーに向けられていた。

強国に挟まれた小さなケセン王国が生き残るためには、二つの烈国を刺激しないよう、外交の均衡を保ちながら渡り歩かなければならなかった。その上、資源を隣国に依存し、頼れる産業が水産だけというケセンの立場は弱い。

現状、貿易量などの面から、公益上ケセンはガンシユよりパーレスに追随せざるを得ない。たとえパーレスの属国と呼ばれようが、国の存続を維持することが、代々のケセン王族の務めであり、そのことを少年は承知していたはずだった。しかし、納得していながらも、婚姻という契約で、己からアヤカーナを取り上げるパーレスを、恨まずにはいられない。

マリユスは三歳の時、生まれ育ったガンシユ国ハイデン領主館から、母と慕ってきた叔母セイラの輿入れに伴いケセン王宮へと移って来た。もの心ついた頃から、父と母は居らず叔母のセイラを信じて生きてきたマリユスにとって、そのセイラに付き従うことは当然といえば当然であった。

また、ケセン王妃となってもセイラは、マリユスに惜しみない愛

情を注ぎ、マリユスの父母のことも、包み隠さず話して聞かせてくれた。マリユスは己の生まれのを知った時、とりわけ特別な感情も湧かず、ああそうなのか、とだけ思った。

それは彼が、ほんとう真実に愛されて育った所以だろう。穏やかで優しい気質の少年は、その白皙な美貌も相俟つて、ケセンでも周囲の者たちに愛され、何の不満はなかった。

しかし、仲睦ましいケセン国王夫妻を見るにつけ、マリユスの心には孤独という感情が芽生えていた。周囲には美麗な笑顔を振り撒きながらも、心の奥底では叔母夫婦の間に、己の居る場所などないことを悟り、ケセン王家の人間ではない己の存在価値までもが疑問となり、孤独へ拍車がかかる。いつの間にか胸の中には、孤独という無数の小さな蛆むしが蠢蠢き、いつか口の中から黒い蠅はえが、群れをなして飛び出しそうな感じだった。

そんな折、授かったのがアヤカーナだった。セイラから「あなたの従妹よ。護ってあげてね」とマリユスの腕の中へ委ねられた赤子は、金色の巻毛に桜貝のようなピンク色の唇を持ち、まるで蕾が花開くようにふわっと、マリユスへ微笑みかけてきた。

「かわいい」

ゼリーのようふわふわの柔らかい小さな命は、泣くこともなくマリユスに抱かれ、小さな息を無心に繰り返している。頬ずりをすると、ミルクの香りがした。マリユスは一瞬のうちに魅了こぼされていた。

その時マリユスは、このアヤカーナの中に、心の底から求めて得られなかった家族を見出していた。それは、彼が孤独から救われた瞬間でもあり、この赤子を全力で護ると誓った時でもあった。

その大切なアヤカーナに、許婚が決まった。その相手である会ったこともない、パーレスの皇太子を殴り倒したい気持ちに駆られるマリユスを、アヤカーナの屈託のない笑こいが止める。

私がアーヤを幸せにしてあげる、誰よりも幸せにしてあげるのだ。

アヤカーナを腕に抱いたあの時から、彼女を幸せにするのは己の使命だと決めていた。

「私がアヤを幸せにしたい」

ケセン王妃は甥マリユスの訴えに微笑って返す。

「マリユス、貴方は今幸せですか。」

人を幸せに出来るのは、幸せな人間なのよ。

誰かを恨んだり、羨んでいるうちは駄目。

誰かを幸せにしたかったら、先ず自分が幸せでいなくては。」

マリユスは思った。では皆で幸せになればいい。城の天守から改めて誓う、私は彼女を護る為いつでも戦おう。

腕の中でくたりと凭れ掛かっている少女の前髪を、優しく掻きあげる。緊張していたマリユスの顔が自然に綻ぶ。いつの間にか眠っていた、この柔らかな少女への責任感と愛しさで胸が一杯だった。

額を撫でる冷たい感触が気持ちいい。

アヤカーナがドユランと仮面舞踏会から戻り2日が過ぎていた。

アヤカーナは寝台へ入ったのまでは覚えていた。それから、寒い、熱いという感覚を行ったり来たりしている。

今は首に巻かれた布が汗でへばり付いて煩わしい。外そうと伸ばした手を、先程と同じ冷たい感触が止める。何だろうと重い瞼を上

げると焦点があわず、瞬きを繰り返す。

「大丈夫か」

「殿…下…」

喉が渴き声にならなかった。目の前にはドユランの顔があり、会話をしたいのだが、どこか遠くへ意識が吸い込まれるような感覚に捕らわれ、また瞼を閉じる。冷たい感触が去って行き、直ぐに乾いた唇へ冷たいものが触れ、意識が呼び戻される。

重なった唇から液体が注ぎ込まれ、アヤカーナは喉を鳴らして飲み込んだ。よく冷えていて美味しい。

「もつと飲んだほうがいい」

ドユランがまた口移しで飲ませてくれる。

「私…、なぜ？」

状況が理解できず、アヤカーナが尋ねると、ドユランは眼を細めアヤカーナの喉へ軽く手を置いた。

「舞踏会の後から熱を出して、寝込んだのだ。」

あの夜、大分怖い思いをさせたからな、悪かった。」

ああ、喉の不快な布の正体は包帯だと気付き、取りたいと訴える。

ドユランは渋い顔をした。

「アザレアが紫になった痣をみて、俺を変態だと罵るのだ。」

痣が消えるまで付けていてくれ」

あの日の明け方、やっと宮殿に戻り、寝台へ入ったドユランは、眠った気もしないままアザレア達に叩き起され、アザレア、ケイト、ハンスイの三人にアヤカーナの寝室へと引き摺られた。

高熱で魘されているアヤカーナの隣で、アザレアは半狂乱でドユランを責め立てる。

首の痣と身体に散っている赤い斑点は何か答える。もしかして殿

下は女性の首を絞めながら行為を致す、俗に言う変態なのか。などと鬼の形相を呈し、皇太子に対する礼儀もへつたくれもなかった。デュランは、玉のような汗を浮かべ、紅潮したアヤカーナの様子を驚き、それ所ではない。

清々しいはずの秋の朝、王女の寝室に響き渡ったデュランの叫び声のアザレアを黙らせる。

「黙れアザレア、医者を呼べ！早くしろ！！」

アザレアは片方の口端を上げ、ふんと皮肉な笑みを浮かべる。

「既に御殿医には処方をしてもらっております

首を絞められた事による衝撃と過労による発熱。二、三日で熱は治まるそうです

さあ、殿下。昨夜は宮殿を抜け出し、何を致していたのか、お聞かせ願いますでしょうか」

そんなことより、アヤカーナに付き添わせてくれ、と頼むデュランにアザレアは声を潜めた。

「ソニアが殺されました」

眼を見開き、まことか呟くデュランへ、アザレアは頷いた。

「変態？…ですか」

小さな声だった。聞き漏らす事無く、デュランは苦笑した。

「アザレアは女に暴力を振るう男は変態だと言いつ張る。」

息を呑んだアヤカーナをデュランは手で制した。

「面倒なので変態と思わせておこう」

言って片目を瞑るデュランの姿に、アヤカーナはくすくす微笑う。

デュランが顔を寄せ、こつんと額をあわせた。

「まだ、熱がある。何かスープでも飲んで休め」

少しだるそうに見上げるアヤカーナの肩シーツをで覆うと、女官

へスリーブを持ってくるよう指示をだす。

アヤカーナは大きな枕に頭を乗せたまま、デュランの姿を追っていた。扉にアザレアの姿も見えたような気がした。

まるで身体に鉛でも仕込まれたような感じだ。病気の時付き添ってくれる男の人は、マリユス従兄さまだけだったのに、殿下が傍に居るなんて不思議だった。ああそういえば、マリユス従兄さまに久しぶりに会ったんだ。マリユス従兄さまはケセンに戻ったのだろうか…それとも…。アヤカーナは瞼が閉じていくのを止められなかった。

「顔色も薔薇のようにお戻りなって、安心ですわ」

あれから六日が経ち、アヤカーナはやっとベッドを離れることが出来た。首の痣も薄っすら黄色い程度となり、喜んで包帯を外してもらったのに、喉元が‘すーすー’して心許ない。

首に手を遣りながらアヤカーナは、臥せていた時も傍に居てくれたアザレアに礼を言う。

「色々心配を掛けました、アザレア。もうすっかり大丈夫です。」
アヤカーナ自身は二日ほど前から、ベッドを出たくて仕様がなかったのだが、御殿医がなかなか首を縦に振ってくれず、今日になってしまっていた。

「まっ、これに懲りて、黙って宮殿を抜け出すのは止めていただけてますわね」

につこりと眼を細めたアザレアの顔が怖い。四方からの突き刺さるケイトや控えている女官達の同意の視線も痛い。

「ごめんなさい」

アヤカーナは己の犯した行為の結果に対して改めて猛省し、アザレアに叱られるのを覚悟する。

アザレアは、苦言を呈すつもりだったが、椅子の上で殊勝に身を竦めているアヤカーナに、熱で苦悶していた姿が重なり躊躇われる。溜息をついて、猶予を与えることにする。

「殿下が心配して、大事をとるようにと、起き上がることを許可なさらなかったのですから、一番反省すべき方は、かなり応えておられるでしょう。」

今回はそれで、よしと致しますわ。」

アザレアの言葉にアヤカーナの顔が輝く。

ここ数日デュランは忙しいらしく、アヤカーナの部屋に顔を出すだけで、満足に口を利いていなかった。叱られずに済んだことより、デュランが自分を心配してくれていた事を知った方が嬉しい。

「ありがとうございます。アザレア」

薔薇のように微笑うアヤカーナに、アザレアはまた溜息が出る。叱責しなかった事を感謝されているのか、デュランを出したことに感謝されているのか分からなかったが、もし言い訳を返したら説教してやる、と内心手薬煉引いて待っていた気持ちまで、削がれてしまったことには間違いない。

敵わない、と自嘲をこぼす。

「さて、あちらもお待ちしているはず、久しぶりに殿下の執務室に参りましょう」

はい、と元氣よく立ち上がるアヤカーナの姿を、部屋に居た皆が微笑ましく見守っていた。

「アヤカーナ、この御菓子をどうぞ。私が焼きましたのよ」
デュランの執務室で、アヤカーナに焼き菓子を差し出すのはフォンテイー又だった。

「ありがとうございます」
微笑ってそれを受け取るが、アヤカーナは自分がちゃんと微笑えているのか確かめたいと思う。

アザレアと共に、デュランの執務室を訪れたところ、いつものアヤカーナの席には、フォンティーヌが座っていた。デュランもダズンもアヤカーナの回復を喜び、笑顔で迎えてくれたが、アヤカーナは咲いていた花が、急に萎しぼんでいくような思いに駆られる。

顔色が変わったアヤカーナを見て、タンギューとアザレアが部屋へ戻ろうか、と訊いて来たが、アヤカーナは首を振りデュランたちの和へ加わった。

その場の女主人はフォンティーヌだった。主人が病み上がりということで、侍女であるアザレアも同席し、タンギューはアヤカーナの護衛という役職柄、いつも通り室の隅に控えている。

フォンティーヌは甲斐甲斐しく順にお茶と菓子を勧めながら、最後にタンギューの方へ向く。

「タンギュー、こちらにいらして。一緒にお味見をお願い。そんな隅っこに居るなんて、らしくなくてよ。」

にこやかに声を掛け、はっとしてアヤカーナを見る。

「もしかして、主あしのご命令だったのかしら」

首を横に振り、アヤカーナは気が利かなかつたと、慌ててタンギューを振り返る。

「こちらで、ご一緒にお茶を致しましょう。」

言って、空いた席がない事に気付き、急いで付け加える。

「直ぐに席をご用意いたしますね」

フォンティーヌがアヤカーナの言葉に被せるように、タンギューへ手招きをする。

「席は空いていますよ」

どこに空いた席が？ときよんとしているアヤカーナの前で、フォンティーヌは徐じゆに立ち上がると、慣れた動作で隣のデュランの膝の上に腰を下ろした。

アヤカーナはあまりのことに啞然とする。ダズンとアザレアは同時に息を呑む。

当事者であるデュランは、従妹の不意の行動に動じることなく冷静だった。

「降りるフォン」

「まあデューどうして、いつもはそんなこと言わないのに」

降ろされまいと身をくねらすフォンティーヌの腰を掴み、デュランは降ろそうとする。

眼を見開いたままのアヤカーナの隣で、アザレアは聴こえるよう鼻で笑う。

「フォンティーヌさま。タンギュー隊長は、御自分で椅子を運んでお座りですよ」

「あら」

ぴたりとフォンティーヌの動作が止まり、いつの間にか近くに座っていたタンギューを確認する。自分で戻れるわ、とデュランに無理やり戻される前に、優雅に席を移り、アヤカーナへ済まなそうに微笑む。

「アヤカーナ、見苦しかったですらごめんなさいね。」

私とデューは兄妹みたいに育ちましたの。以前は臣下の前でも膝に乗せてもらっていたので、つい」

そう言っただけ無邪気な笑顔を向けてくるフォンティーヌに対し、アヤカーナは戸惑うだけで、何も返すことが出来なかった。

そして、次から次へとフォンティーヌの口から紡ぎ出される昔の思い出話に、皆が相槌を打つ。そんな中、アヤカーナだけが思い出を共有することは無く、必死に笑顔を取り繕い、彼女の話に耳を傾ける振りをする。

涙ぐましい努力をして聴いた話しの締めくくりは『私とデュランは、お似合いの二人と言われていたのよ』だった。言っただけを瞬かせたフォンティーヌの、誇張するでもない淡々とした口調が、話しの真実味を告げている。

アヤカーナの頭の中ではマリユスの言葉が思い出され、渦を巻く。
“皆が認める皇太子殿下の恋人は赤毛の令嬢”

腹の奥に、どろどろとした暗いものが蠢き、今まで無視していた
思いを上へと押し上げる。私は邪魔者なのだろうか…。

「アヤ、身体の調子はどうだ」

ドユランが気遣うように甘く優しい声で訊ねる。

アヤカーナは、ドユランが唐突に話しを変えたように感じ、何か
不都合があるのかと勘ぐらずにはいられない。彼の甘く優しい声の
響きまでは届かなかった。

ドユランの顔を見る事が出来ず、膝の上で拳を固く握り、俯く。

「少し、お疲れのご様子です」

アザレアが代わって、硬い声で答えてくれた。

「アヤカーナ様、とても心配致しました。」

大切な御身、お大事になさって下さい。」

「ダズンの言うとおりです、ご無理はなさらないで下さい」

ダズン、タンギューの心から労わる声に、アヤカーナの拳が緩む。

「ありがとうございます」

顔を上げ、ふわりと微笑む。いつものアヤカーナの笑顔が見れて、
安堵の空気が一同を包む。

「アーヤ、舞踏会から熱をお出しになられたのですか。」

突然のフォンティーヌの‘アーヤ’という呼びかけに、アヤカー
ナは眉を上げる。

「翌日から調子を崩しておりました。フォンティーヌ」

「私のことはフォンとお呼びになって、仲良く致しましょうよ。」

私はアーヤと呼ばせていただくわね。

それとも‘わたしのアーヤ’と呼ばれたほうが良いのかしら」

くつくつと忍び笑いを漏らしているフォンティーヌに、アヤカー
ナは当惑する。

「フォンは、アヤの従兄殿しゅうけいどのを知っているのか」

デュランの低い声に、フォンティーヌが驚く。

「いつ、いいえ！ ぶ、舞踏場で相手の男性から、そう呼ばれていたのを耳にただけです。」

あの男性、従兄でいらしたのね！

ド、ドューは知っているのかと心配したのですが、知っているならば、何も問題はございませんわ」

そう言っつて、カチャカチャと音を立てて茶器を口に運ぶ姿が、フォンティーヌの動揺を表していた。

「よく踊っているカップルの会話が聴こえますこと。」

余程耳が良いか、下品にもそのカップルに付きまとうとか、ですわね。

宜しければ、私に耳が良くなる方法をご伝授下さい、フォンティーヌ様」

アザレアの応酬に、今度はデュランとダズン、タンギューが揃って息を呑む。

アザレアの斜に構えた態度に、フォンティーヌはみるみる顔を赤く染め、臨戦態勢を敷こうとした途端だった。

「殿下、本宮より、至急の閣議へのご出席要請です」

直ちにお出まし願います」

扉の向こうから、近侍の声が響いた。

デュランはダズンと顔を見合わせ、珍しいな、と呟く。そして、アヤカーナに笑顔を向け、ダズンを連れ執務室を去っていった。

残ったアザレアとタンギューは、フォンティーヌが小さく安堵の息を吐いたのを、見逃さなかった。

8 (後書き)

活動報告で書いたとおり、まだ風邪が治りませんウわ。。(。P
、q*。)。。ン！

鼻水がつまって、出てこない。喉もおかしいし(皿メ)ノ

しかし、調子が悪いときは、重なるもので、一年ちょっと使用の
ヴィトンのバッグのファスナーの付け根が崩壊しました。(。；
；。；)

こんなに簡単に壊れるものなのかと憤り、二時間半かけて、直営店
まで行ってきましたよ。(。；。；。(。ブーツブーツ!!)(
身体の具合悪いのにさっ)

結論、只で直してくれるけど、新品と交換はダメだって(当然か)

ヴィトン側の縫製の不具合を認めているくせになっ。

まっそんな一日でした。

夜遅く、タンギューはデュランの居間に居た。

室内には三人だけ。目の前ではダズンがデュランと向かい合わせで腰掛けており、タンギューは書棚に背を預け、立っていた。

タンギューの瞳が皮肉気に光る。

「突然の不可侵条約の申し出……。それも、ガンシユ側から王女の差出し付き、とはね。」

ところで、我が国に後宮制度はない、と記憶していたが、ガンシユ王女はドューの第二夫人になるのかな」

ダズンは親友の皮肉に大きく息をつく。

「まだドューは結婚してないぞ。」

たとえ、してたとしても……、条約が締結され、ガンシユ王女が差し出されたら、どう考えても皇太子妃だろ」

「一方的なガンシユ側の歩み寄りに見えるが、ウラはないのか」

「イズミク公がその点を考慮され、パーレス側もガンシユへ皇族の輿入れをと、意見していらっしやった」

「ガンシユとの不可侵条約締結は、パーレス側としては拒否する理由がない。」

重鎮達にとっては願ってもない事だろうから、決まりだな」

言つて、タンギューは無言のまま腕を組んでいるデュランに目を遣る。

「フイイ達が逃のがしてしまった王子様は、どう係わっていると思う。」

ドュー

アヤカーナ

「……女のためにここまでやるなんて、敬服するよ」

デュランは深く頭を後ろにもたせ溜息をついた。

ダズンは書類を目で追いながら、デュランに同意する。

「まったくだ。まず、そのマリユス王子とやらが、ガンシユの新王

太子に間違いないな」

タンギューは眉間を寄せる。

「たった二年で、影の薄かった第六王子が、王太子まで登りつめたのか。一体何を武器に？」

「金だ。」

ダズンの淀みのない応えにタンギューは、信じられないという風に天を仰ぐ。

「おいおい、都合良く、金が空から降って来た、とでも言うのか」
「パーレス、ガンシユ、ケセン三国の国境線の交わるガンシユ側は、マリユス王子の母の実家ガンシユ・ハイデン領にあたる。パーレスに接する境は山林だ。数年前その一帯に金鉱が発見されている。その金鉱を盾にマリユス王子は上手く立ちまわったのだろう。」

我が国との不可侵条約の締結はあちらにとっても、敵対関係をうだうだと続けるより、国策として正に働くだろうし、何より無血だ。金鉱の守護という大儀が、お偉方を納得させた要因なのだろうな。とにかく新王太子の最高の手柄となる。

逆にこちらにとっても、敵対していたあちら側の申し出による不可侵条約の締結は、諸外国へパーレスの優位を示す良い材料となり、損にはならない。

互いに万々歳だと思えない、ということだ。」

内心、マリユスの手腕に感心しながらもタンギューは、デュランの気持ちを慮り、軽く肩をすくめる。

「ドューとアヤカーナ様の婚儀の二ヶ月前に、ぶつけてくるところが憎いな。」

皇太子の婚儀を間近に控えているこちら側に、条約審議の時間をとらせないという戦略か、それとも二人を結婚させまいと必死なのか。」

「両方だ！」

デュランの強い口調に、ダズンとタンギューは驚く。

考え込むように肘を突いて、両指を絡ませているデュランを見つめ、まずいとダズンは焦る。幼なじみの考えていることなど手に取るように分かる。短絡的な行動だけは謹んでもらわねば。

「ドュー、まだアヤカーナ様に対して不埒な行為にだけは及ぶなよ。」

ダズンに続き、タンギューは肩を書棚から起し直球を投げる。

「やってしまえば、こちらのもの。などは通用しないぞ」

デュランは眼を瞬かせ、俺はそんなに信用ないのか、と落胆するが、気を取り直して二人に告げる。不思議と気負いはなかった。

「ガンシュと不可侵条約は締結する。俺の妃はケセン王女アヤカーナ。これで閣議を通す」

信じられないと言った表情で、タンギューはダズンを見た。

「おい、ドューが廃太子にしろと騒がないぞ」

タンギューの黒い瞳に当惑と喜びが入り混じっている。

ダズンは口が半開きのまま、言葉にならなかった。

デュランはそんな二人の表情に苦笑する。

「これからも俺の進む方向について来てくれ、俺はお前達を信頼している。お前達も俺を少しは信頼しろ」

デュランの口から出る、待ちに待った言葉にダズンは酔う。益暗だと諦めていた日々が嘘のようだ。

しかし、デュランの選んだ道は難しい選択であることは間違いない。ケセンがパールスにとって、ガンシュを上回る影響力を及ぼすことなどあり得ない。ガンシュの王女を蹴ることを大臣たちに納得させるための作戦を… ケセンとの結びつきが国益に適う証明…そして、やっかいなガンシュの王太子の出方…

問題は山積みだ。しかし、彼は湧き上がる喜びに夢中で、苦など一片も感じない。皇太子の側近としての腕の見せ所だった。

「やるぞー!!」

鼻を擦り、天井を見上げたダズンの頬に、キラリと光るものが見えた。

そんなダズンの様子を訝^{しづか}り、デュランはタンギューに囁く。

「医者が必要か」

冗談じゃないとタンギューは首を横に振る。

タンギューは頬を濡らしている友を、思い切り抱き締めてあげた
いと思った。

アヤカーナは子供の頃からパーレスに来れば、幸せが待っている
と信じて疑わなかった。許婚ドユランに愛され、パーレスの貴族達に慕われ、
自分はパーレスの為に生きていくのだと思っていた。

そう教えられ成長してきた。それがケセン王族として生まれた自
分の務めだと、胸を張っていたのに。

まさか、ずっと育んでいた想いが偶然耳にした会話で、簡単に打
ち碎かれるとは考えてもいなかった。

近衛隊の視察へ向うため、外へ出たアヤカーナは忘れ物をしたこ
とに気付く。部屋へ戻りたいと思ったが、言い出せずにいた。

途中、アザレアとタンギューが視察の申請方法について、言い合
いを始めた隙を見て、待っていて、と言い残しこれ幸いに走り出す。

近道しようと、宮殿の大庭園を突っ切っていた時だった。

誰かにアヤカーナと呼ばれたような気がした。足を止め、声の方
を振り返る。

何処だろう。数歩ばかり戻ったところで声が聞こえる。どうやら
声の主おん達は、厚い生垣の向こう側のようだ。

関係ない、とまた走り出そうとするが、聴こえてきたケセンとい
う言葉に後ろ髪を引かれた。

「下賤なケセンの王女を皇太子妃と崇あがめるなど、虫唾むしずが走ると思っ
ていましたが、ガンシュ王女の方が、まだマシというものです。」
聞き覚えのない中年女性の声だった。そこへ男の声が続く。

「静かに。まだ意見は別れているが、ガンシュ王女の輿入れは決ま
るだろう。」

直ぐにも条約締結に向けて、宮廷へガンシュ側の出入りが始まる。

何処に耳があるか分からん、ガンシユの中傷など以ての外だということ、お前もよく心しておけよ」

「ええもちろん。」

ところで、そうなるとケセン女はいつお帰りになるのかしら……」

アヤカーナは逃げるようにして、その場を走り去ることしか出来なかった。心臓がドクドクと脈打ち、今にも口から飛び出しそうだ。部屋まで走って来たものの、何故戻ってきたのか思い出せない。息を切らし部屋を見渡していると。突如、腕を引かれる。

「アヤカーナ様、一人で行動なされては困ります」

走って追いかけて来たのだろう。アザレアの息も上がり、額にうつすら汗まで浮かんでいる。

ああそうだ、思い出した。昨日、近衛隊の視察に行くと言われて、昨晩こっそりファイヘプレゼントを用意していたのに、それを忘れてしまったのだ。

プレゼントは、楽しかったダンスのお礼のつもりだった。

アヤカーナはアザレアへ、ごめんなさいと謝り。引き出しから、^{ファイ}Feuillyと自らが刺繍したハンカチを取り出し、胸に仕舞う。

宮殿の裏庭の一画、四方を壁に囲まれた庭で、白いブラウス一枚の男性が一人、壁へボールを交互に打ちあっていた。コートを挟みアヤカーナ達の向かい側では、見物組の兵士達が仲間へ声援を送っている。競技者達の息遣いと、打ち込まれるボールの音が白い壁に反響し、蒼い空へと抜けていく。

白熱した戦いに、アザレアは目の前の保護網に指を絡ませ、ボールの行方を追っていた。

「何故、近衛兵士達のホーム試合の視察が必要なのか聞かせてくれ、

アザレア」

タンギューからの問いにアザレアは、面倒臭そうに眼を細め、傍に寄るよう指で合図を送る。

「今、令嬢方の中で一番人気の試合をお見せして、お元気になって貰おうと思ったのですわ」

小声で言われ、タンギューは、ちらりとアヤカーナを見る。ケイト、ハンスイと共に微笑わらって試合を楽しんでいる様子だ。

「お元気そうどうぞ」

アザレアは肩を落とす。

「いいえ変です。あれは楽しんでなどおりません。」

「涎よだれを垂らしてる誰かさんと違い、上品に見物なさっているようにしか見えないな」

瞬間、目を丸くしたアザレアは、去れと乱暴に手を振り、つんとタンギューに背を向ける。

アザレアは不安だった。ここどころ、アヤカーナの様子がおかしいのは間違いない。上の空が多いし、何事にも、邪魔ではないかという問い掛けが多くなったように感じる。以前の天真爛漫さが息を潜め、なぜか危うい感じがして眼が離せなくなった。

殿下の執務室への日参を停止された事が一因ぼかだろうが、これ許りはデュランを責めることは出来ない。彼は今も、頭の固い國務大臣らを相手に、アヤカーナを得るため戦っている。

但し、アヤカーナに何も知らせるな、というお達しだけは腑に落ちない。しかし、これも一種の愛情なのだろう、と割り切る。

アザレアは、もし自分がその立場だったら、隠し事だけは御免だと思う。というより、知るだけでは済まさないだろう、と苦笑する。競技者達へ拍手を送るアヤカーナの横顔を見つめ、アザレアはこの少女を心から不憫に思う。ここ伏魔殿バリスへ、ケセンからたった一人で嫁ぐには、彼女は純真すぎる。そんな少女を護り抜きたいと思うが、所詮自分は女の身である。いつまで宮仕えが叶うのかさえ知れ

ない。アヤカーナがここで縋れるものはデュランだけだ。今、彼女の為には、彼女にデュランへ不信感など、抱かせない事が私の責務と改めて確認する。

一際大きな歓声が響き、アザレアは競技場へ眼を向ける。最終勝者が決まった様子だ。勝者はコートの真ん中からアヤカーナへ向け、深々と礼をしていた。

「アザレア、彼とお話ししてもいいですか」

アヤカーナの眩しい笑顔に、アザレアは頷きたくなるのを堪え、艶やかな笑みをタンギューに向ける。

「隊長にお訊きいたしましょう」

タンギューは話しを振られ驚く。

くそつアザレアめ！ドューにあれ程近衛達との接触はなし、と約束していたではないか。

否、と告げようとするが、アヤカーナの期待を込めた瞳にたじろぎ、頭とは裏腹な言葉が口から出る。

「もちろん宜しいですよ」

ありがとうございます、とコートへ出て行くアヤカーナを見送るタンギューの後ではアザレアが、声高に口をすぼめて笑っていた。

「フイイ！とても素敵でした」

アヤカーナにはフイイが直ぐに分かった。笑窪が魅力的な好青年が勝ち進むことを、一生懸命に応援していたのだ。

勝者フイイは、コートの真ん中で突然王女に両手を握られ焦っていた。周囲の静まり返った様子が、事の重大さを表している。

お願いです！手を離して下さい！！ 心の中で必死に叫ぶ。

「それに仮面は外した方が、もっとハンサムです」

恥ずかしげに微笑^{わら}っているアヤカーナに見惚^ぼれ、ついフイイも返してしまった。

「王女様こそ、仮面など無いほうがとても可憐でお美しいです」
地鳴りのように響く同僚の歓声に、フイイは我に返る。隊長の居る方角から黒いものが蜷^{こくろ}局を巻いてこちらを威嚇している。やばい、絶対にやばい、私は隊長に殺される。

「ありがとうございます」

頬を真っ赤に染めて礼を返す王女の愛らしさに、また目尻^{めじり}が下がる。後の野次が一層五月蠅^{うるせ}くなったが、フイイはもうどうとでもなれ、という心境だった。

不意に手が外され、慌てて首を振り邪念を追い払う。

そんなフイイをよそに、アヤカーナはドレスの胸元^{むねもと}を弄ると、白い布をフイイに差し出す。

「フイイこれを」

フイイが手にしたものは、アヤカーナの体温で温かかった。

「先日のダンスのお礼と今日のお祝いです」

白い花のようにふわりと微笑^{わら}うと、アヤカーナはアザレア達のもへと戻る。

フイイはFeileeyの刺繡^{フイイ}を指でなぞる。直ぐに言葉が出てこなかった。皇族へ背後から声を掛けることはご法度だったが、構ってなんぞいられない。

「アヤカーナ様ありがとうございます。次も頑張ります。是非応援にいらして下さい」

アヤカーナは立ち止まると、少し考えて振り向いた。

「…次が、ありましたら」

静寂^{しじやく}が場を包み込む。

誰もが、王女は知っている、と思った。

アザレアが喉の奥から声にならない悲鳴を発する。タンギューは咄嗟にアザレアへ腕を伸ばし、その細い腰を支えた。彼の支えがなかったら、アザレアは間違いなく崩れ落ちていただろう。

フィイはアヤカーナの瞳を見つめたまま、その場にゆっくりと跪く。

「お約束願います。

先日私へ、ボンネットを外し、ダンスを踊りましょう、と

お誘い下さったのはアヤカーナ様です。私はまだ踊って頂いておりません。

次の舞踏会では必ず私と踊って下さいますようお願い申し上げます」

アヤカーナは微笑み、首を傾げた。

「ごめんなさい。覚えておりません」

言って、踵を返した華奢な後姿にフィイは続ける。

「私の父は連日の閣議で、殿下とご同様に皇太子妃はアヤカーナ様と発言しております。

当家の縁者、私の親友達はアヤカーナ様を仰いでいることを覚えておいて頂けたら光栄に存じます」

アヤカーナは一度も振り返る事無く、アザレア達と競技場を後にした。フィイの言葉はとても嬉しかった。頬が濡れて大変だった。

しかし、アヤカーナは政治の世界において、どうにもならないことが多々あることは百も承知していた。

1・(後書き)

ホーム試合はジュ・ド・ホームを頭において著してみました。

『私の目の届かない所へ連れてお行き。そんな赤毛に痘痕の様な雀斑の醜女が、私の娘だなんて』

私は生まれて来てはいけなかったの？お母様

『俺の許婚がこんな画姿の赤毛の鼻ぺちや女なんて、萎えるなんてものじゃない』

ねえ、赤毛はそんなに醜いの？ドユー

『やあ、君の髪は綺麗だね。こんな見事な髪の色、初めて見たよ。まるで、僕の心を暖めてくれる冬の暖炉の炎のようだ』

あの人はそう言つて、瞠目くもしている私の髪を掬う。微笑わいつて私を見つめる彼の瞳の中には、いつも見慣れた媚諂こびいが微塵もなかった。あの人は私が差し出した手を取り、口付けを落とす。幾筋もの温かい雫が私の頬を濡らす。

彼が好き、彼が欲しい、誰にも渡さない。どんなことをしても。

グリリフ宮殿正殿奥に位置する閣議室。

その広間の中央、大きな楕円卓の真正面には皇帝が座し、隣に皇太子、順に閣僚がずらりと顔を揃え、連日、大ガンシユ国への対応が議論されていた。

しかし今日とて、各々が主張を曲げることなく、閣議は堂々巡りを呈する。議論は一点、皇太子妃はケセン王女が、ガンシユ王女が、であった。

「それで？まだ拮抗したまま、皇太子側とイズミク公側に対極していると言う訳か」

深夜。タンギューはデュランの私室で日中の閣議の報告をダズンから受けていた。

毎夜、閣議の進行報告、アヤカーナの様子と貴族達の宮殿での動向を伝え合うのがデュラン、ダズン、タンギュー三名の恒例となりつつあった。

「ああ、公は祖国パレスの為 愛娘を、ガンシユフォンテューヌの王女と入れ違いに、あちらの王太子へ輿入れさせてもよい、と最終カードを切ってきたよ」
ダズンは苦笑して続ける

「皆様、恍惚として公の発言に聴き入っている。公は、さながら新

興宗教の教祖様だ」

「それとも皇族の似非鑑えせかがみ、か」

タンギューは吐き捨てるように言った。

ダズンは日頃からこの親友がイズミク公とその令嬢フォンテイナーヌに対して虫が好かない、と豪語していたのを思い出す。どうやら彼の勘は当たっていたらしい。

「こちら側はオーヴァン大法官が、婚約不履行におけるパーレス側の損失、大帝国としての道義を説いてくれている。」

「ああ、フイイの父上か。素晴らしい方が味方に付けてくれたものだ。」

「オーヴァン大法官はアヤカーナ様自身が味方に引き寄せたんだ。それにシーガー國務大臣もご同様だ。東宮の女官達がシーガー殿に直訴したらしいぞ。殿下の為にはアヤカーナ様みたいな天使が必要だと」

誇らしげに語ると、ダズンはそれまでの表情を変え、眉根を寄せ

る。「計算違いは一つ、我がドユラン殿下には、以前の放蕩ぶりが尾を引いて、思ったほど大臣が付いてこない。」

ダズンの嫌味にドユランはふん、と鼻を鳴らす。

「まだ、こちらには最終兵器が残っているさ」

タンギューはドユランの無駄な余裕に嘆息する。

「ドュー、最終兵器も良いが、アヤカーナ様がもたないらしい」

ドユランは真顔で問い返す。

「もたない？」

「まず、王女は本件に関して全て承知だ。

私が見ている分には普段とお変わりないように見えるが、女性陣の見解は、王女は元気がなく、今にも脆く折れてしまいそうらしい。

それで、アザレアからの伝言だ。

眼を瞑つぶってやるからドューがなんとかしろ、だとさ」

ダズンが短く口笛を鳴らす。

「上から視線も甚だしいとしか言いようがないな。どうするドユウ」
にやりと笑っているタンギューとダズンの軽口をよそに、ドユラ
ンは暫し瞑目し、固い口調で告げた。

「それより先に、明日フオンに確かめたいことがある」

ダズンが音を立てて息を呑み、止める、と異を唱える。

「まだ証拠が揃ってない！」

「限界だ。切り崩すぞ」

「珍しいですな。このような早朝に、殿下の方から、私めを訪ねて
下さるとは」

「リキュウ、前口上などいらぬ。さつさと答えろ」

単身、宰相リキュウの執務室に乗り込み、陛下とお前の考えはど
うなのか教える、と啖呵を切った直後である。机を挟み二人とも立
ったまま対峙していた。

リキュウは悠然と構えドユランを軽く遇する。

「殿下、その前に腰を落ち着けて、拙の質問に答えていただきたい
のですが…痛たた」

リキュウは急に腰を押さえる。

ドユランは皇太子の勢いに押され、宰相といえど簡単に口を割る
と高を括って来たが、老獪な為政者に完全に出鼻を挫かれていた。
腰？どうみても健康な爺にしか見えないぞ。

「その回答如何で、正直にお応えしましょう。あたた…」

大げさに腰を右手で揉んでいる長老を前にしてドユランは、やは
り一筋縄では行かぬか、と観念し、手近の椅子を引き寄せせる。

腰を下ろし、ひとつ息を吐くと、立ったままのリキユウを見据え、早くしろと顎をしゃくる。

失礼致します。と呟き、リキユウは自分の椅子へ腰を下ろし、咳払いをする。

「さて殿下、今回のガンシユ側の申し出が全て成ると致します。すると、一番得をするのはどこの国だと思いますか」

「ケセンだろ」

ほお、とリキユウは感嘆の声を上げた。

「なぜ、そうお思いになられる」

ドユランは面倒そうに口を開く。

「ケセンはパーレスとガンシユの条約協定により、領土侵攻の懸念が減る。その上、パーレスからアヤカーナを返されれば、パーレスに対し婚約不履行という貸しを一つもてる。

ケセンはすでに、ガンシユへ“王子の預かり”という貸しを作っているだろ。これで両国に貸しが持て、東の間でもケセンは安泰だ。それに、この機に乗じてケセンが上手く立ち回れば、パーレスとガンシユから不可侵以上の条約調印を引き出せるかもしれないな。

やはり一番得をするのはケセンだ。」

リキユウの瞳が光る。

「ケセンが育てた第六王子が都合よくガンシユの王太子となる。これにケセンの関与をお考えになりませんか」

「もちろん虱潰ししらみつぶしに探らせた。

故カシラ王太子の病死に不審点はなかった。それに関してはケセンの関与は全くないと言い切れる。ガンシユ王太子の交代劇は不測の事態だったのだろう。ケセン側にとっても偶発的に有利に働いたのだと思う。

むしろ、マリユスが王太子にのし上がる過程に於いて、パーレスのさる高貴な方の姿がちらつき、こちらの方が衝撃だった」

ドユランの琥珀色の瞳が挑戦的な輝きを放つ。

「それらを全て甘受して、ケセン王女を皇太子妃に、というのが殿

下の結論というわけですな」

「甘受？」

違うな。アヤカーナがガンシユに嫁いだら戦を仕掛けるかもしれないぞ、俺は。

ここは国益の為にも、ケセン王女を俺の妃にしていた方が良く言うことだ」

リキュウは呆れた様子で首を横に振る。

「此処でお茶ら気は不要でございます。

ひとつ言わせて頂きたい。有利な交渉とは、相手を交渉の場へ引き摺り出すことが肝要なのですぞ、こちら側が短慮を起しては意味を成しません。今回の殿下の訪問は落第点でございます。

しかしながら、拙の質問には、このリキュウ確かに、殿下より及第点の答えを頂戴いたしました。

約束通り、殿下の質問にお答えいたします。」

リキュウは姿勢を正し畏まる。

「恐れ多くも陛下のご意向は、殿下がお考えになっている通りです」

「お目覚めですか」

アヤカーナはぱちりと目を覚ます。泣き疲れて寝入った所為で頭が重かったが、いい夢のお蔭で少しばかり元気が出た。なんと夢の中でデュランが頬を唇で拭ってくれたのだ。

心配そうに覗き込んでいるアザレアへ、腫れぼったい目を細め微笑む。

昨日ずっとアザレア達は、皇太子妃は私なのだと言ってくれた。デュランが好きなのは私なのだ、とも教えてくれた。

でも、彼女達のその必死な様子がなぜか、私をやるせない気持ちにさせる。私は一度だってデュランに好きだと言われたことがない。嘘でも良いから言われてみたかった、と思う。

でも、彼女達には心から感謝している。誰も味方の居ないパースで私を護ってくれているのだ。

ありがとうアザレア。と心の中で言っ、唇からは朝の挨拶を紡ぐ。

「お早う。アザレア」

仕度を終え、アヤカーナは侍女達と朝食の席に着いた。

最近は全ての食事をアザレア達と囲むようになった。私を心配してのことなのだろうが、どうも気が引け、申し訳なく思う。

今も、皆無理して私に笑顔を向けてくる。哀れまれているようで、惨めさが先に立つ。

皿の上のものを突きながらアヤカーナはアザレアへ訊ねる。

「私と朝食をとるのは大変ではないですか。」

「全然。あつ、そちらよりこちらが美味しいですわ」
「はっはい」

思わずアザレアに言われたほうを口に入れる。咀嚼していると次はパンが美味しい、と教えてくれる。

変だと思う。私にはゆっくり食べるように言い、アザレア達は早い。そして必ず自分達が食べたものを勧めてくる…。

はたと閃く、もしかして毒味をしている？

「あの、アザレア。

わたし、少々の毒だったら大丈夫です。だから普通に食事を致しましょう」

アザレアは目を丸くする。

「子供の頃から従兄と一緒に、毒に対して耐性を付けていました。もちろん護身術だってかなりの腕前なのですよ。

パレスでは暗殺なんて、日常茶飯事だと聴いておりましたので、自己防衛です」

こともなげに話すアヤカーナの様子に、アザレアは苦笑するしかなかった。どこかズレてはいるけど、洞察力もある。アヤカーナはしっかりしている、大丈夫だ。

一連の出来事を顧みても、王女は醜態を演じること無く、むしろ毅然とした態度を示していた。どうやら、ケセンは十分に王女を教育して、パレスへと送り出したようだ。

可憐な容姿に目を晦まされ、護ってやらなくてはと気負っている自分達が滑稽に思えてくる。

それより何より、アヤカーナ自身の資質に加え、ケセンの教育が見事なのだ。賢しいケセンへ拍手を送りたい気分だった。

しかし、パレスで“暗殺が日常茶飯事”など有り得ない。

目の前の冷めた食事、それは毒見を徹底しているため、食卓に上がるころには冷たくなっているのだ。それほど今の状況は緊迫し

ていること言うことだった。絞殺未遂、それに食物への毒物混入はすでに確認されている。毒見は続けなくてはならない。

アザレアは周囲を窺^{うかが}う振りをして、そつとアヤカーナへ囁く。

「アヤカーナ様、皇族の方たちは皆こつこつしておられます。」

アヤカーナ様に不安感を与えずにこつそりで行えという、殿下の命令を果たせず、私が叱られてしまいます。

このまま知らない振りをして、お食事をお願い出来ませんでしょうか。

コクコクと首を縦に振りながらアヤカーナは、アザレアに合わせ小声で答える。

「ごめんなさい、余計なことを申しました。私、知らない振りを致します。」

ありがとうございます、とアザレアは笑う。ハンスイとケイトが向こう側から、嬉々として声を掛けてくる。

「アヤカーナ様は、殿下に大切に想われておりますわ。」

「本当に、羨ましい。」

ところで、今日は何かしたいことはおありますか。

ある。と思った。

いつケセンに帰されるのか、デュランの口から聴きたい。

アヤカーナは一瞬戸惑い、恐る恐る口を開く。

「ちょっとだけでも良いので、殿下の執務室を訪問しても良いでしょうか。」

アザレアは少し考えて、問い合わせてみましょう。と言ってくれた。

案の定、ドユランへの訪問は叶わず、アヤカーナは宮殿の遊戯室へ向かうため廊下を歩いてきた。渋るアヤカーナをアザレア達が、ビリヤードをしようと説き伏せたのだ。

いつになく宮殿が騒がしい気がしたが、アザレアでさえも訳を知らないという。不思議に思い、きよるきよる見渡していると、目の端に赤い髪の女性が入る。フォンティーヌの一行だ。このまま進めば擦れ違わなければならぬ。アヤカーナは唇をかみ締め背筋を伸ばした。

アヤカーナ達を見つけたフォンティーヌの一行はぴったりと口を閉ざし、廊下の端に避けて頭を軽く下げる。

アヤカーナはその前をゆっくりと通り過ぎ、ほっと息を吐く。その時背後から誰かが静かに言った。

「フォンティーヌ様、早く参りましょう。殿下がお待ちですわ」

その言葉はアヤカーナの胸をぐさりと抉り、彼女の呼吸を止めた。私には会ってくれないのに…

忍び笑いが辺りに広がる。

「フォンティーヌ様がガンシユに取られそうになり、殿下の慌てふためいているお姿が目に見えかぶようです」

「殿下もやっと、ご自身のお心に気付かれたのですわ」

「パールの皇太子妃にふさわしいのはフォンティーヌ様だということ」

「止めて、私はパールの為にこの身を犠牲にする覚悟は出来ていてよ」

巻き起こったどよめきと賞賛の音がアヤカーナの耳を塞ぎ、頭の中を真っ白にする。

あ、歩かなくては。

右、左と足を前へ繰り出す。身体は前へと勢い付いているのに、ドレスがついてこない。まるでドレスの後が床へ縫いとめられているようだった。短い悲鳴を上げ、アヤカーナの身体が前へつんのめ

る。

「あら、御免あそばせ」

言葉と同時に縛めが解かれ、アヤカーナはそのまま床へ両手を付いた。今度は失笑と驚きの声が一層大きく聴こえる。アヤカーナは顔を上げられなかった。

もう、いい。もう、嫌。ケセンへ帰りた。帰る！

四方から大丈夫かと手が差し出される。周りが涙で歪んで何も見えない。見えているのは差し出された幾つもの手だけだった。

この白い手はアザレアだ。でも違う、私が欲しい手はこの手ではない。この手も知らない。これも違う…。長い指の大きな手…。ああ私はこの手を知っている。アヤカーナはその手を取り、顔を上げる。

「マリユス従兄様、私、家に帰る」

大好きな従兄の顔を見つければアヤカーナはその首にしがみつく。

いつものように優しく頭を撫でられ、とうとう、耐えていた嗚咽が漏れる。

異様な光景だった。転んだ王女を美貌の青年が駆け寄り助け起し、二人はそのまま深く抱き合い離れない。その様子を居合わせた者達が、遠巻きに眉を顰め見守っていた。

「アヤカーナ様をお放し下さい。さっアヤカーナ様こちらへ」

アザレアがアヤカーナの腕を強引に外そうとするが、アヤカーナは首を振って男から離れない。アザレアは焦り、怒りの矛先を男へ移す。

「ガンシユの王子、無礼でしょ、その手を外しなさい！」

マリユスはにやりと笑うと、両掌を上に向けて広げてみせる。

抱きついているのは王女のほうと言いたいのか。アザレアが憤慨していると、タンギューがおもむろに剣の切っ先をマリユスの顔に突きつけた。

「離して頂く」

怒りに満ちた黒い瞳を向けられ、マリユスの顔から笑みが消えて行く。マリユスはタンギューと睨み合ったまま、胸の中の少女に囁く。

「アーヤ、離れられるかい」

少女は小刻みに頭を振り、一層しがみついてくる。

「ここはパーレスの宮殿だ。ケセン王女としての威厳を忘れては駄目だよ」

ぴくりと肩が震え、少女は濡れた顔を起す。

「さあ微笑ってアーヤ。お土産を持って来てるんだ」

「セス、アーヤを頼む」

セス！アヤカーナは自分と同年の、マリユスの従者の名に反応して、マリユスから身体を離す。

セスが居るの？何処？

マリユスの後方にクリクリ髪のをセスを確認する。首にクラヴァットを結び、お洒落をしていることにびっくりする。

嬉しくて、にっこりしているセスの元へと駆け寄る。

「セス、従兄様にこさまと一緒に、私を迎えに来てくれたのね。ありがとう」

マリユスは微笑を浮かべ、指先で目の前の剣先を脇へ避ける。

「君、早く剣を仕舞った方がよいのでは」

3・(後書き)

*訂正しました。

変更前「マリユス従兄様^{にいさま}、私、ケセン(うち)に帰る」

変更後「マリユス従兄様^{にいさま}、私、家^{ケセン}に帰る」

教えていただき、上記に訂正いたしました(^ o ^)

(わたしも変更後の方が良いと思いましたが)

ご連絡、ありがとうございましたn(| *) m

「フォンはどうした」

一向に来ないフォンティーヌに対し、痺れを切らしたデュランの不機嫌な声に、ダズンは眉を上げる。

「ドュー、フォンどころじゃないだろ。」

ガンシユのマリユス王子との会見が先だ。」

ガンシユ側の交渉人としてマリユス王子が派遣されて来たことは、既に宮廷より報告があり、挨拶を受ける為の会見への臨席要求も来ていた。

謁見の間へ参上しなければならぬ時刻が迫っている。

無論、陛下を待たせるわけにはいかなかったが…。

「いや、会見の前にフォンだ」

ダズンは言い出したら聞かないデュランに肩を落とす。ふと、今しがた、侍従を通して送られてきた紙片を、手にしたままだった事を思い出し、急いで目を通すと、これ幸いとばかりに読み上げる。

「公爵令嬢プリンセスフォンティーヌは急病のため、御前へはまか罷りかねる、とさ」

デュランは叔父であるイズミク公を追い落とす前に、自分達が掴んだ証拠に対しフォンティーヌに弁明の機会を与えたかった。彼女は幼い頃からともに育って来た皇族であり、デュランにとっては妹のような存在であった。

デュランは唇を固く結ぶ。すると、フォンティーヌの笑顔が自然と脳裏に浮び上がってくる。それをすぐさま打ち消し、大きく息を吐いた。

「ダズン、謁見の間へ行く」

フォンティーヌへの、兄としての想いに区切りをつけた瞬間だった。

た。

タンギューは乱暴に皇太子の執務室へ入るなり、机に向かっている二人へ開口一番、低い声で言った。

「アヤカーナ様がストライキだ！」

「ストライキ？」

マリユスとの会話を終え、明日から始まる交渉の算段をしていたデュランとダズンは、同時に目を剥いた。

タンギューは廊下での出来事、そしてアヤカーナの今の状況を淡々と伝えた。

「…それで、マリユスお従兄様にじいさまからの土産を手に、寢室から出てこない、と言う訳か」

ダズンがこんな時に、と嘆息し、煩わしい問題を運んで来たタンギューに仏頂面を向ける。

タンギューは、ダズンのしかめ面など全く意に介さず、こちらが重要とばかりに付け加える。

「そうだ。」

寢室に籠り、帰国の荷造りをして、マリユス王子を待っている。

ところでデュー、何故、アヤカーナ様の訪問を承諾してやらなかったんだ」

タンギューの責めるような口調に、デュランは目を見開く。

「訪問？俺は知らんぞ」

ダズンがはつと顔を上げ、しまったと髪に手を遣る。

「すまない、私だ。私が独断で断りの返事をアザレアへ伝えた。フォンティーヌがアヤカーナ様の訪問を聞きつけ、何か仕掛けられると不味いと思つての判断だつた」

判断理由は分からないでもないが、女心を解さないダズンの失態にタンギューは呆れた。

「見誤つたな、ダズン。」

自分には会つてくれず、フォンティーヌには会う。となると今のアヤカーナ様にとって、かなり酷だ」

タンギューの指摘にグツと来るものがあつたが、ダズンは気を取り直し、申し訳なかつたと頭を下げ、デュランの指示を仰ぐ。

デュランはダズンへ、もうよい、と片手を挙げ立ち上がった。

「兎に角、廊下でのアヤとマリユス王子の抱擁に関しては、今直ぐ宮殿内に、従兄妹同士の感動の再会だつた、と流布しろ。」

それと、アヤのストライキは俺が何とかする」

「透き通つた綺麗な琥珀色」

アヤカーナは、マリユスからの土産を指先で摘み、目の前に翳していた。窓から差し込む夕陽がキラリとそれを輝かせ、より透かして魅せる。手にしていたのは琥珀色の飴玉だつた。

アヤカーナは飴玉を頬張るのも大好きだつたが、見ているのがもっと好きだつた。琥珀色をした飴玉はデュランの瞳を連想させ、ただ見ているだけで、こぼれ落ちそうな甘美を与えてくれる。そのひと時は、子供の頃からの誰も知らない密やかな楽しみであり、彼女

の中では、琥珀色の飴玉はデュランを意味していた。それなのにアザレア達は、飴玉さえも取り上げようとした。

譲れないものは譲れない。アヤカーナは飴玉の入った袋を胸に寝室に籠り、誰も近付けずマリユスの迎えを待っていた。

寝台に座り、ぼんやりと飴玉を見つめ、扉が開いたことにも気付かなかった。

「何をしている？」

「飴玉が…」

言いかけて、アヤカーナは驚く。いつの間にか飴玉の向こう側に、見慣れた琥珀色の瞳をもつ青年が立って居た。

デュランが笑みを浮かべ、軽やかな足取りで近付いて来る。

あんなに会いたかった筈なのに、今は会いたくない。アヤカーナはプイツと顔を背け、口を閉ざす。

「飴？」

デュランは呟き、大きな手でアヤカーナの手を掴むと、飴玉を細い指ごとぱくりと頬張った。

いきなり手を口に持っていかれ、アヤカーナは灰色の目をまん丸に見開く。デュランの琥珀色の瞳がアヤカーナのそんな様子を面白そうに見詰め、最後になれるりと指を舌で舐め、離れた。

「甘いな」

顔を顰めながら感想を漏らすデュランに、アヤカーナは顔を真っ赤に染め、口をぱくぱくするだけだった。

デュランはくすりと笑い、壁側のチェストへ向かうと、上に置かれた荷物から布を外す。

「纏めた荷物はこれひとつか？」

自身の肖像画を眺めながらアヤカーナに問う。

アヤカーナがケセンから持込を許されたのはそれだけだ。だから彼女の荷物はデュランの肖像画ひとつだった。

アヤカーナがコクリと首を振るのを見て、デュランはふーんと鼻で言った。

「アヤは、朝晩この肖像画に向かって同じ言葉を話しかけているぞうだな。」

どうせなら、本人に言ってくれないか」

デュランが戻り、また向き合う。

アヤカーナは顔を真っ赤に染め、首を横に振ると、恥ずかしくて俯く。が、その顎をデュランの陽に焼けた手が持ち上げ向き合わせる。

さあ、と優しい眼差しに促され、逆らえずアヤカーナはとつとつと告白する。

「大好き。愛しています」

小さい声だったが、琥珀色の瞳が金色に輝きデュランは嬉しそうに微笑う。そしてアヤカーナの頬を両手で包み込み、真剣な表情かおをする。

「俺も愛している。妃になって欲しい」

デュランの唇が落ちてくる。

何度も唇を合わせ、デュランはアヤカーナの様子がおかしいことに気付く。涙を流し、虚ろな表情を浮かべて口付けにも反応を示さない。

「アヤ？」

金色の頭が左右に振れる。

「駄目です。王族が利己心で動いては国が滅びます。」

パールスにとって有益なお妃様は、ガンシユの王女だと……」

デュランはやりと口の端を上げ、アヤカーナの唇に人差し指を置き言葉を封じた。

「心臓の半分を失った男が皇帝に座したら、民衆は悲惨だと思わないか。」

皇帝は正常に物事を判断してくれないのだぞ」

アヤカーナはきよとんとして、大真面目に訊ねる。

「パーレスの皇帝陛下は、心臓が半分でも生きていられるのですか」
「知らん」

ドユランの答えに、からかわれていると思った。

ひどい…。アヤカーナの瞳に、たちまち涙が溢れる。

ドユランはうるたえ、慌ててアヤカーナを抱き寄せる。

「泣くな。俺の心臓の半分はアヤだ！だからアヤを失えば俺の心臓が半分になるということだ。

アヤはパーレスの国民の為、俺を信じて、婚儀の日を指折り数えていれば良い」

ドユランの口から思ってもいない言葉が返ってきた。その力強い言葉が嬉しかった。時が止まったような感覚がして、こんな幸せは感じたことがない。

アヤカーナの目から、先程とは全く違う涙が、止め処無く流れ落ちる。

しゃくり上げながら、必死に返事をする。

「…っは…いつ…」

ドユランはいきなり身をかがめ、力強い腕でアヤカーナの華奢な身体を抱き上げる。驚いているアヤカーナを腕に、ドユランは大股に部屋を出て階段を目指した。

「荷物も纏めてあるようだし、引っ越した」

5・(前書き)

R15になります。ご不快に思われるかもしれませんが。どうぞ了承の程、よろしくお願い申し上げます。m(;)m

ドユランに抱かれたアヤカーナの後を、アザレアを先頭にケイト達が追いかけてくる。

階段を急ぐのは、ドレスの裾で足を取られ、とても危ない。皆が転んだりでもしたら大変だ。

心配だとアヤカーナはドユランに伝える。すると彼は、階段の途中で立ち止まり、下を向いて叫んだ。

「アザレア、大丈夫だ。土産に毒は入っていない。

今から白萩の間へ移る。お前達も用意して移って来い」

毒？アヤカーナは胸元に握り込んだままだった袋に目を遣る。アザレア達は、マリユスにいさま従兄様を疑っていたのだと気付く。有り得ないのに！

少しむっとしてドユランの肩越しにアザレアの顔を見れば、彼女は嬉しそうに顔を綻ばせ、こちらに向けて会釈した。

アヤカーナは不思議に思った。そんなに毒が入っていないことが嬉しいのだろうか？

ドユランはそのまま階段を上がり、三間続きの大きな部屋の最奥へと、扉を肩で押し開けながら進んだ。そして、そのまま部屋を横切り、寝台へそつとアヤカーナを降ろす。

アヤカーナは広い寝室の豪華さに目を奪われていた。ここに到達するまでの部屋の装飾も凄かった。

今居る寝室の床は寄木細工で萩の花が浮き上がっており、大理石に金の象嵌が施された壁、天井にもやはり萩が描かれており鴨居に飾られたレリーフの細かさが見事だ。

「ここがアヤの新しい寝室だ。」

アヤカーナはベッドの上で座り直し、頭上のデュランへ戸惑いの表情を向ける。

デュランは寝台に腰を下ろし、不安げにしているアヤカーナと向き合う。

「この部屋は俺の部屋の隣だ」

そう言っつて顔を寄せ、耳元で囁く

「愛している。いつも傍に居てくれ」

アヤカーナは恍惚に震え、はいと答える。そしてデュランの肩に、喜びに潤んだ顔を預けた。

デュランは喜びながらも、彼女がまだ縋るように抱きしめているマリユスの土産が、どうも気になり、謁見の間で目にしたマリウスの姿が頭から離れない。

マリユス王子……。冷たい眼差しが印象的な男だった。

「先程マリユス王子に会っつて来た。

容姿がアヤにそっくりで綺麗な方だな」

アヤカーナは顔を上げ、嬉しそうに笑う。

「美形な従兄様に似ていっつて言われて、私照れます。

でも、殿下の方がとても素敵です」

恥ずかしそうに俯いた途端、はっとして扉に顔を向ける。

「従兄様に、帰らないっつて伝えなくては。」

行かさんとはばかり、デュランはいきなりアヤカーナを抱き上げ、彼女もろとも寝台の中央へ倒れこんだ。

ドレスを通して、逞しい身体から温もりが伝わってくる。

「ドユーだ」

呼び名を指摘して、デュランは二人の間を隔てている小さな袋を取ろうとする。が、アヤカーナは抵抗する。

「この飴は大事な物なので、引つ張らないで下さい」

「それは、俺よりもマリユス王子が大切っつてことか」

デュランの拗ねた口調にアヤカーナは目を丸くする。そして少し

考え、言い難そうに口を開く。

「…あの、笑わないで下さいね。」

子供の頃から、琥珀色の飴をいつも殿：ドューだと思って眺めていました。琥珀色はドューの瞳の色ですし…。それに、甘くて幸せをくれます。

だから、私から飴を奪わないで下さい」

ドユランは驚きながらも、訊かずにはいられない。

「…そのこと、マリユス王子は知っているのか」

「私が琥珀色の飴が大好きなことは皆知っています、理由は私だけの秘密です。」

だろうな、知っていたら土産になどしないだろう。

ドユランは腕の中の少女の口に口を寄せて囁く。

「これからは二人だけの秘密だ」

初めは優しい口付けだった。軽く啄ばむように唇を吸われ、下唇を優しく噛まれる。気持ちの良さにもっと、とアヤカーナは口を開く。途端、キスが熱いものへと変わった。

口の中を飢えたような舌に蹂躪され、何も考えられなくなる。アヤカーナは夢中でドユランの髪に指を絡ませていた。

胸の動悸が激しく、今にも心臓が胸を突き破って飛び出してきそうだ。唇が離れると二人共荒い息を吐く。

ドユランは身体の位置を変え、アヤカーナのシュミーズを頭から脱がせて、脇に抛った。

アヤカーナは我に返り、ストマツカーヤコル・バレネがいつの間にか身体から外されていたことに呆然とし、慌ててむき出しの胸を両手で覆う。

「隠さないで…」

ドユランはアヤカーナの両腕を、難なく片手で頭の上に押さえつける。彼女の突き出した胸を見詰める熱っぽい眼差しには、称賛が

込められていた。

胸の先が固くなり、アヤカーナは頬を染め訴える。

「アザレアと女官長に駄目だと言われています」

ドユランは一瞬、身を強張こわばらせたが、次の瞬間には薄桃色の乳首に唇を寄せていた。強烈な興奮のうねりに、アヤカーナは息が出来なくなった。もう一方の乳首が指でつままれ、静かに引つ張られる。

「腰を上げて…」

アヤカーナは素直にドユランに従い、スカートを脱ぐ為に腰を浮かせた。

アヤカーナは、この上ない幸福感に満たされ、ドユランの腕の中で眠りについたはずなのに、魔まされ飛び起きてしまった。

思い出したくもないあの死刑執行人風の男が、再び首を締めつけにやって来て、今度こそ殺されると思った瞬間、ドユランとマリユスが助けてくれたのだ。アヤカーナはドユランに飛びつきキスに夢中になる。ふと、マリユスを見ると、彼が淋しそうに彼女を見詰めていた。彼の灰色の瞳が孤独に彩られ、人の温もりを求めている。従兄にこいね様のところに行つてあげなくちゃ。

そこで、目が覚めた。

「マリユス従兄にこいね様……」

思わず声に出して呟く。途端、しなやかで逞しい腕に組み伏せられた。

「ほう、夫の腕の中で、他の男の名を呼ぶとはいい度胸だ。」

「誤解です。夢の中で従兄様じょうけいさまがとても淋しそ…っ」

上になったデュランが、アヤカーナの柔らかい唇を獐猛に押しつぶし、掌てのひらでゆっくりと身体中を撫で回す。

「お仕置きだな」

デュランは、からかうように囁くと、徐々に頭を下げていく。彼の舌と指の技巧でめくるめく官能の世界に浸りながらも、アヤカーナは拒絶反応から身体を強張こわばらせる。

信じられない、デュランが恥ずかしいところを広げ、口付けをしている。

嫌！止めて！

脚を蹴り上げ抵抗するが、直ぐに押さえ込まれる。退ひこうとしても腰をつかまれ離さない。嫌だと必死に頭を左右に打ち振るう。なのにデュランは一向に止めようとしてくれない。

ああっ、アヤカーナの身体がビクンと跳ねる。頭は嫌がっているのに身体から力が抜けていく。太ももの筋肉が震え、知らない快感がこみ上げて、呼吸が速くなる。

いい…まるで天国にいるみたい…。

マリユスは東宮殿の前の暗がりくらがりに身を潜めていた。業を煮やしての進入だった。パールの警備が甘くない事は分っていたが、昼間のアヤカーナの泣き顔なみかほが忘れられない。一言でも掛けて、慰めなくては。

「ここは立ち入り禁止だ。」

斬られても文句は無用だと、ご承知の上の愚行か？」

低い声が響いて、逢瀬が叶わぬことを知る。

やはり、か……。息を吐き、回れ右をして声の主に向き合う。

「お役目ご苦労。タンギュー隊長」

マリユスのふざけた返答に、タンギューは眉を寄せる。

「速やかにご退出願う」

マリユスは悲しげな微笑を浮かべる。

「何度、愛しの従妹アヤカーナに面会を申し込んでも却下されて、つい心配でね

私としては、‘従兄妹同士の感動の再会’とやらの続きを希望しているだけなのだ」

タンギューの黒い瞳が据わり、纏っている空気が怒気をはらんだものへと一変した。

「おっと、そんな怖い顔をしなくても、直ぐに退散するよ。」

胸の前に両手を挙げてタンギューを制し、マリユスは素直に元来た道を引き返す。

タンギューは剣を構えたまま、男の背中を目で追い続けた。もう大丈夫かと思いかけた時、男が振り返った。剣を持つ手に力が入る。「近衛隊の諸君、アーヤを護ってくれてありがとう。これからも頼むよ」

言って、マリユスはまた前を向いて歩き出す。

タンギューはマリユスを面白い奴だと思った。回りを囲まれていることに気付き、剣が届かない所で捨て台詞を吐きやがった。……いや、違うか。捨て台詞ではなく本心からの礼か……。

タンギューはにやりと笑い、男の背に手向けを贈る。

「下世話かもしれないが、貴公はフォンティーヌとは遊びか？」

手を出したからには、我が国のお姫様は、ケセンのお姫様とは大分違うことを、肝に銘じられておいたほうが宜しいぞ。」

マリユスの笑い声が澄んだ冬の夜空へ消えていった。

5・(後書き)

琥珀色の飴≡べっこう飴

と書きたかったのですが、あえて琥珀色の飴です。

べっこう飴だと平らな飴が最初に浮かんでくるので…

あれ、あたしだけかな(*´ー´)(´ヾ

翌日、アヤカーナは困憊^{こんぱい}し、昼過ぎまで起き上がれなかった。

しかし、身体の所々にある痛みと倦怠感に嫌悪感はなく、むしろ、好きな人と一つになれた証だと誇らしかった。

初めて知った感覚と感情に、まだ身体の芯が疼^{うず}いているような錯覚がある。痛かったのは最初だけで、その後待つていたデュランの手ほどきによる快感は、痛みや彼女の性に対する恐怖心全てを凌駕してくれた。

辛うじて保っていた意識の狭間に聴こえてきた、彼の甘い囁きが今も耳の奥に残りアヤカーナを幸福感で満たし、微笑が止まらない。

「お目覚めですか」

アザレアの声に、アヤカーナは少しばかり気落ちする。こんな時は、会話を交わさないと済む女官の誰かに起して欲しかった。

起きようと下を向けば、何も身に着けていない。羞恥のあまり耳まで真っ赤に染め、アヤカーナはおずおずと謝る。

「言いつけを守らないで、ごめんなさい。」

熱を出した後、アザレアと女官長から、婚儀が済むまでは貞操を破^{やぶ}らないよう口をすっぱくして言われていたのだ。

身体をゆっくりと起しながら、アヤカーナは上目遣いに恐る恐るアザレアを見る。

「まあ、白萩の間のお方が何をおっしゃいます。」

そう言っって高笑いをしているアザレアを前に、意味は分からなかったが、アヤカーナは一緒に笑っておいたほうが得策と思い、無理に口の端を上げた。

「あの、殿下は…」

昼食が済み、アヤカーナは一番気になっていたことをやっと口に
出す。

「朝議ですわ」

「アヤカーナ様を十分休ませよ、と仰おしって出て行かれたのですよ。」

「颯爽として、素敵でしたわ」

「それに、殿下のご尊顔が、其れは其れは艶やかに輝いておりまし
た。」

お見せしてあげたかったわあ」

うつとりと話すアザレアの科白に、ケイトもハンスイも同意して、
顔の前で両手を合わせ、夢見るように顔を上気させる。

侍女達の会話にアヤカーナは、愛想笑いを浮かべるしかなかった。
アザレア達のご機嫌なうちに訊いておきたいことがある。でも…、
彼女はちらりと後方に目を遣る。

室の隅には、普段だったら扉の外に待機しているタンギューが居
る。昨晚不審者が出たとかで、念のためだという。殿方の前で口
出して良いものか悩む。

駄目だ、やっぱり言い出せない…。でも訊きたい。

あ、そういえば。

不意に以前アザレアが、図書室でタンギューに閨房学の教授をさ
せようとしたことを思い出す。

恥ずかしいけれど、大丈夫だと自分に言い聞かせる。

「アザレア、お訊ねしたいのですが…」

はい、とアザレアは満面の笑みを向けてくる。

その晴れやかな笑みに勇気付けられ、アヤカーナは深呼吸をして
意を決する。

「これから寝所で私は、殿下にされたことをお返しすればよいので
すよね？」

女官長とアザレアから教わっていたことを確認する。

「その通りですわ」

アザレアに、にこりと肯定され安堵する。ケイトもハンスイも笑顔で頷いている。

よし！と心の中で叫び、少し声を小さくして本題を切り出す。

「殿下のあそこも口に含んでよいのですか」

「アザレアの嘔吐き」

アヤカーナは寝室に閉じこもり枕に顔を埋めていた。閨房術を学ばなければ、他の女性に殿下を盗られるとか、パレス淑女の嗜みだとかいろいろ助言していたくせに。閨房術をちゃんと実践しようと思いついただけで、まだ早過ぎる、と一喝されてしまった。それに殿方の前ではしたくない、とまで言われた。

その上、こともあるとか、突如タンギューがお腹を抱えて笑い出したのだ。我慢出来ない、とか言って。

そこでアザレアとタンギューの口の応酬が始まり、アヤカーナは、顔を熟れた林檎のように染め、寝室へと逃げ込んでいた。とても恥ずかしかった。

しばらく枕に顔を埋め、このまま少し眠ろうと思った時だった。

見間違いだろうか、壁が動いたように見えた。目を瞬かせ確認する。錯覚ではない、壁の一部が奥へと静かに開かれている。可笑しなもので不可思議な現象に驚くことはなく、逆に興味津々で眼を凝らす。隣にはタンギュー達が控えており少しも怖くはなかった。

「誰」

相手を驚かせないよう、静かに訊ねる。果たして、壁の奥からひよっこり、クリクリ頭が現れる。

「セス！」

そう呼ばれた少年はシツと人差し指を唇に当て、開いた隙間をすり抜けアヤカーナに近づいてくる。

「アーヤ、迎えに来たんだ。何度面会を申し込んでも受け入れてもらえず、僕もマリユス様も心配していたよ。」

せめて、少しの時間だけでも一緒に来てくれる？」

片目を瞑った愛くるしいセスの表情に、緊張していた顔が綻ぶ。

セスに合わせひそひそ声で話す。

「駄目よ。」

ちゃんと手順を踏まなくては、ここはケセンではないのだから」

「言っているだろう。いくら正式に面会を申し込んでも無駄だって。」

マリユス様が悲しいお顔をなさっている。アーヤに会いたいんだ

「よ。」

マリユスの従者に縋るように言われ、アヤカーナの脳裏には、昨夜夢で見た彼の淋しげな顔が浮かんでいた。だが、一つ疑問が浮かぶ。

「セスはどうしてあの壁の扉を知っていたの？」

「パーレスの皇族様がマリユス様を不憫がって、僕にこの通路を教えってくれたんだ。」

皇族たちにとってこの通路は、秘密でも何でもないってね。

大丈夫だよ。マリユス様に会ったら直ぐにここへ戻ってこよう。」

アヤカーナは行きたくなかった。頭の中で、行ってはいけなないと何かが訴えていた。

考え込み、なかなか首を縦に振らないアヤカーナに、セスは痺れを切らす。

「昨晚だってマリユス様はアーヤに会おうとして、近衛兵たちに囲まれたんだ。」

このままじゃ、いつか斬られてしまうよ。もし殺されでもしたらアーヤの所為だ。」

はっとしてアヤカーナは顔を上げる。もしかして、昨晚の不審者とは……。

「いいわ、行く。」

でも、従兄様のお顔を見たら直ぐに戻ってくるわよ」

「OK！そうこなくちゃ」

隠し扉の裏側は狭かったが、いたって普通の通路だった。ちゃんと明り取りもなされ、暗くない。もちろん夜になれば別だが。

セスの後をゆっくり付いて階段を下る。階段が終わり、通路を進むうちに徐々に周りが暗くなる。足が竦んでいくのが分る。

「セス、随分暗いのね。セスが見えなくなりそう。」

「大丈夫、もう出口だよ。」

出口も傍目から見たら扉には見えないんだよ。

さあ、ここだ。」

そう言つて、セスは行き止まりの左側の壁を大きく二度ほど叩いた。

壁が重い石を引き摺るような音を立て、動き出す。開いた隙間から太陽の光が差し込み、アヤカーナの瞳を直撃した。彼女は眩しすぎて顔に手を翳す。その指の隙間で何かが動いた、人がいるのだ。

誰かが外で待っていた。その誰かは陽を背にして立っており、眩しくて顔が見えない。ぐいっと手が引かれ、アヤカーナは暗がりから外へ躍り出る。

「ありがとうございます、フォンティーヌ様。」

お蔭でアヤヤを連れて来れました。」

フォンティーヌ？！アヤカーナは驚いて目の前のシルエットに目を凝らす。光に慣れた目に映った女性は確かにフォンティーヌだった。

しかし何かが変わた。彼女の顔に張り付いたような笑みが不気味で、咄嗟にアヤカーナは回れ右をし、壁の中へ戻ろうとする。が、鼻先

で壁がガクンと閉じられた。

セスがまた腕を引っ張る。

「アーヤもフォンティーヌ様にお礼を言って。

イズミク公爵様とフォンティーヌ様は、パーレスーのマリユス様の理解者だよ」

さあ、とセスに前へ押し出され、アヤカーナは、躊躇いながらも従う。

「あ、ありがとう、フォ、フォンティーヌ」

くつくつとフォンティーヌは赤い唇を歪め、そろりところらへ歩き出す。キラリと光が目を掠め、アヤカーナの注意を引き付けた。

光源はフォンティーヌの右手だ。右手に何か光るものを握っている。

「曲者め！」

フォンティーヌはそう叫んだ刹那、短剣を胸に構え突進してきた。逃げられない。そう感じたアヤカーナは、衝撃に耐えようと身を強張らせ瞑目する。

自身に待ち構えた衝撃は無く、代わりに後でどさりと何かが倒れる音がした。慌てて後を振り返る。そこには…

「セス！」

セスが倒れており、みるみる彼の周りに血溜まりが広がっていく。悲鳴を上げ近寄ろうとするが、口を塞がれ腰を攫われた。必死に右手を伸ばし、セスの元へ行こうとする。そんなアヤカーナの視界をフォンティーヌの歪んだ微笑が満たす。

「アヤカーナ、私が曲者から御身を御守り致しましてよ。

さあ、一緒にいらして」

6・(後書き)

図書室でアザレアはタンギューに閨房術の参考書の依頼をただけで、教授は頼んでいなかったはず。アヤカーナ、勘違いしています
(笑)

どうして…。どうして、こんなことになったのだろう…。

ドクンドクンと脇腹が痛み、まるで心臓がそこへ移動したようだった。脈拍とともに傷口から血液が、体外へ送り出されている。流れ出る血を止めなくてはと、痛む所に両手を添えてみた。

アーヤがこちらに手を伸ばしている。その手を取ろうと、傷から片手を離すが、彼女の手は近くにはなかった。掠れゆくセスの瞳は、緑色のマントを纏ったイズミク公爵の私兵に担がれ、連れ去られるアヤカーナの姿を懸命に追った。

「私はこれから、ガンシユからの随行者たちと今後の協議をし、その後パーレスの連中と会談の予定だ。

セスは私が戻るまで、私の居室で待っていてくれ」
分かりました、と僕はマリユス様のご指示に喜んで従う。そのまま時を過ごし、マリユス様のご帰還を、大人しく部屋で待っていていれば良いはずだった。なのに…。

正午を過ぎた頃、予期せぬ来客があり、フオンティー又様がこの部屋のバルコニーの下でお待ちだと告げられる。それもこの僕に用があるという。

高貴な方を待たせてはいけないと、僕はフオンティー又様の許へ息を切らし急いだ。

何事かと思いきや、相変わらずお美しいフオンティー又様は、マリユス様には内緒で、彼を驚かせようと言う。

面倒事でなかったことに僕は安堵して、はい、と快諾する。

僕は期待に胸を弾ませて、どのように驚かせるのか、お訊きした。彼女は、マリユス様がアーヤへの面会が叶わず、気落ちしているのをとても憐れんでおられ、是非とも力になりたいとおっしゃった。そこで、二人でこっそりアーヤを連れ出し、マリユス様に会わせてあげよう、と言うのだ。

何でも東宮殿には秘密の通路が在り、そこを使えば誰にも知られる事無く、彼女を安全に連れ出せるし、すぐに帰せる、マリユス様も喜ばはずだ、と。

しかも、その通路はパーレス皇族だけの秘密だけど、僕は特別だとおっしゃる。なぜなら、マリユス様もフォンティーヌ様も僕をとても信頼しているからと…。

僕は有頂天だった。パーレスの皇族は、そんじょ其処らの王族とは格が違う。諸国が崇める血統と伝統を持つ、神様みたいな方たちだ。そんなお姫様に信頼していると言ってもらえるなんて、感動以外の何ものでもない。

だから僕は、フォンティーヌ様の言うがまま、アーヤを連れ出した。

その結果がこのザマだった。

ごめん、ごめんねアーヤ…。ごめんなさいマリユス様…。また三人で遊べると思ったんだ。一石二鳥だと…。

ああ寒い…もう目を開けていられないや…。

「おいっ、しっかりしろ！眠るな。起きてろ！！」

怒鳴り声と一緒に両頬に衝撃を感じて、セスは薄く瞼を上げる。

青いマントを纏った騎士が目の前に屈んでいた。

この衣装はパーレスの近衛兵だ。助かった。

セスは血に染まった手を伸ばし、騎士のマントを必死に掴む。

「アーヤ……助けて……下さい。東南の……方角……連れて……行かれ……ま……た」

齒がガチガチ鳴るのを止められなかった。僕の言葉は、騎士に届いただろうか……。

「大丈夫だ。仲間が二人、後を追っている。

とにかくお前は、出来る限り、気をしっかり保て。今すぐ医師の処へ運んでやるからな」

ふうっ……良かった……。でも僕の方はもう無理だ。だって血が出過ぎだよ。ね、父さん。

セスは騎士の後ろに立っている、ケセン騎兵隊の緋色の制服を纏った成年に問いかけた。

その成年の身体は透き通っており、実態を成していない。それは、彼がこの世の者ではない事を伝えていた。

亡者は透き通った手を顎に添え、舌を鳴らして愚痴をこぼす。

「俺の息子に、女には気を付けろと教えると、あれ程妻に言っておいたのに。」

くすくすと笑い、セスは安心して目を閉じた。

「ガンシユ側の要望を全て呑むのは、パールの權威を損なうのではないだろうか」

「我が国の益となる事は、損とは言わないと思いますが」

「ケセンとの約定を一方的に反故する事は、国益だと言われるのか」

「ですから、權威とか道理などの感情論ではなく、理的に議論し

たいものですか」

その言葉を皮切りに、ざわめきと野次が交差する。いつも通りの光景だ。

デュランは醒めた瞳で、目の前で繰り広げられる不毛の論議を眺めていた。

何が緊急朝議だ。朝議を主導している、召集主であるイズミク公爵の人望を見せ付けているだけだ。

不味いことに閣議と違いこの朝議は、低位の臣下達も顔を揃えている。

この場での発言は内密という訳には行かないだろう。迂闊なことは言えない。

堪らずデュランの口から溜息がこぼれる。

「ところで殿下」

不意に呼ばれ、デュランはイズミク公を見る。

「何だ。公」

「間違いであることを承知で、お尋ね致しますが……」

そこで間を置いた公爵のやり方が、これから訊ねることは重大な事案だということを暗に示している。

場が静まり返り、皆が公爵の次の句を待ち構えた。

「ケセン王女を白萩の間へお移しになったとのこと、それは真実でございませうか。」

真実ならば、ガンシユ王女の輿入れを検討している我々臣下、延いては国民を軽視なされておられるように、私は思えて仕方がありません。

理由をお聞かせ願いたい。」

そう言つて、得意げな表情を向けて来る叔父をデュランは凝視した。周りからは、皇太子を責める非難がましい声さえ湧き上がる。

アヤカーナを、白萩の間と呼ばれる「皇太子妃の間」へ移したことを批判材料に、ガンシユ王女とフォンの輿入れを一気に決済する気だ。デュランはイズミク公爵の本意を悟り、待つてましたとばかり

りに、ほくそ笑んだ。

皇帝の隣で涼しげな顔をしているリキュウを一瞥し、彼は公爵側へ軽く身を乗り出す。

「本当だが。」

なぜそれが、国民軽視に値するのだ」

くつくつと笑いながら公は、まるで子供を諭すような微笑をドュランへ向ける。

「初めからお勉強が必要のようですね、殿下。

質問に質問で返されては、論議不能にございますぞ。

まあそれはさて置き、叔父として敢えて、進言させて頂きます。

皇族が私欲で行動なされては、国の存続が危ぶまれる、ご自重下されませ」

どよめき上がり、流石は公、という声があちらこちらから聞こえ、拍手まで巻き起こる。

公爵は右手を挙げ、廷臣達の歓声に答える。

ドン！と卓を叩く音が広間に響き渡った。静寂が辺りを包み、全員が音の鳴った方を見る。ドュランは居並ぶ者達の顔を見回し、卓の上からゆつくりと拳を下ろした。そして一つ息を吐き、公爵へ殊勝な顔を向ける。

「公、アヤカーナに対し毒が盛られ続けています。

警備上一番堅固な部屋に移したつもりなのですが、何故彼女は狙われるのでしょうか」

「おお、そのような理由がお有りならば、はじめから仰って下さい。しかし、白萩の間は遣り過ぎでしたな。

王女には西宮殿の奥に移って頂き、警備兵を増やされては如何ですか。

それはそうと、王女のご帰国準備は、お済みなのでしょうか」
ドュランは平然と返す。

「質問に質問で返されるのは困るな。私は質問の回答を頂きたい」
公爵は呆気にとられ、苦笑いを浮かべた。そして周囲に対し、子

供には叶わないと肩をすくめて見せ、口調まで変える。

「ドユラン、いい加減になさい。」

そんな君の話では、本当に毒など盛られているのかも疑問だよ。」

ドユランは皮肉気な笑みを湛え、笑っている叔父を見据える。

「叔父上、毒の主成分は砒素だ。」

この件に関しては、陛下と宰相もお認めになっておられる」

一同の視線が一気に、玉座へと注がれる。

ゆるりと構えていた皇帝は同意するように首を縦に一つ振り、息子へと視線を戻す。一同もそれに倣い、ドユランを見詰める。

「砒素の流通を洗い出したところ、公の許へかなりの砒素がガンシユより集まっているが、理由を教えてください。」

それと、数年前から水銀を一旦ケセン入れて、ガンシユへ輸出なさっているが、その理由も一緒に話していただけると有り難い」

公爵は、幾分血の気が引いた顔をワガセヒロ帝へ向け、弁明する。「陛下、皇太子殿下は、どなたかと勘違いなさっておられる。」

私には、砒素も水銀も何のことやら検討がつかぬ」

抑えた口調とは裏腹に、握りこまれた拳が震えているのをドユランは確認した。

「ガンシユとの国境一体の山岳は、公の所領の一つだったな。」

そして昔から水銀の産地だ。水銀の輸出は分るが、なぜ砒素の搬入を…。」

もしかして、砒素が取れる鉱山でも発見なさったとか。

だが、報告は一切上がっていないな。」

ところで、納税はどうしておられる。」

「ドユラン、帝弟である私へ、言いがかりを吐けるとは無礼である」
「う」

仮面を脱ぎ捨て、口端から泡を吹き威嚇してきた公爵に、ドユランは最後通知を突きつける。

「皇帝陛下の御名を使い、勝手に敵国ガンシユへ、パールの国土調査許可証を発行なさったのは公であろう」

言つてデュランは、後ろに控えていたダズンへ目で合図を送つた。ダズンは頷くと、おもむろに宰相リキュウへ入手した許可証を提出する。その紙は宰相から皇帝へ、廷臣達が見守るなか、うやうやしく差し出された。

見る見る青ざめていく顔色と、見開いたままの瞳が、イズミク公爵の受けた衝撃の凄まじさを顕著に示していた。

言葉を飲み込み、押し黙つたままの公爵へ視線が集中し、広間には沈黙が立ち込めた。

その沈黙をデュランが破り、公爵を奈落の底へと突き落とす。

「金鉱山を所有するマリユス王子へ、金の抽出に必要な水銀を送り、鉱脈を隣にする己の所領地をガンシユの人間に調査させ、新たな鉱山を発見。」

マリユス王子と手を結び、ガンシユ側の要望を全て受諾し、娘フオンテイーヌをガンシユの王太子妃に据え、ガンシユ側から秘密裏にパールの鉱山を採掘して富を独り占めする。

どの口が言うか、皇族が私欲で行動したら、国が滅びるのではなかったのか。

これでは邪魔なアヤカーナを毒殺でもしたくなるのも道理だな。

イズミク公爵閣下」

公爵の眼球は動揺で震え、こめかみ顛？には血管が青く浮き出していた。

縋るような瞳を向け、最期の綱つなと玉座へ助けを求める。臣下ではなく弟として。

「兄上、私は決…。」

ワガセヒロ帝は突き射すさような眼差しを向け、話しの続きを遮るように言葉を被せた。

「イズミク公よ。なぜ、娘のフオンテイーヌにまでアヤカーナを襲わせた」

公爵はカツと目を見開いた。

「フオンテイーヌは、娘は、何も知らない！」

あれは虫も殺せない優しい娘です。娘には何の罪もございません。

信じてください、陛下」

娘を想う、帝弟の必死な姿を目の当たりにし、廷臣達の間にも公爵へ対し、憐憫の情が浮かび始めた時だった。

何の先触れもなく、広間の大扉が乱暴に開かれた。

そこから近衛隊長タンギューが大股で現れ、膝を突いて急を告げる。

「陛下、殿下。」

イズミク公爵令嬢フォンティエーヌが、ガンシユ国マリユス王子従者を刺殺後、ケセン王女殿下アヤカーナを拉致して逃亡致しました。ただ今、近衛隊騎士二名が追跡中です」

公爵の左胸の奥で小さな火花がパチンと弾け飛んだ。

「何をしていたタンギュー！早くフォンを捕まえろ。」

「………！！」

甥の怒号が遠くに聴こえる。

甥は娘を見張らせていたのか…。

公爵は息が出来なかった。激しい痛みが、胸から全身を走りぬけ気管を絞り上げる。

「兄上」

公爵はワガセヒロ帝に一言呟き、胸をかきむしる様にして、床へくずおれた。

8・(前書き)

R15です。暴力要素大になります。ご不快に思われる方はご遠慮下さりますようお願い申し上げます。

馬車が速度を上げ、座席から放り出されそうだった。

アヤカーナはフォンティーヌが用意していた馬車に無理やり乗せられ、急発車の揺れに耐えていた。カーテンがピタリと閉じられ、外の景色を窺うことも出来ない。

向かい側ではフォンティーヌが、短剣に付いたセスの血糊を丁寧にハンカチで拭い落としていく。眼前で執拗に汚れを確認しては、指先を使ってハンカチを小刻みに動かす。異常に紅潮した顔に浮かんでいる笑みと、指の優雅な動きが、彼女の常軌を逸した様子を表していた。

アヤカーナはセスの許へ一刻も早く戻りたくて、そんなフォンティーヌの様子になど構ってられない。先程まで塞がれて出せなかった分、声を張り上げる。

「セスは曲者ではありません。早く戻って手当てを！」

フォンティーヌは、目の前に翳かきしている短剣から視線だけを動かし、アヤカーナを見る。

そしてくつくつと笑った。

「そんなこと知っているわ。」

そう言っつて、手にした短剣の刃先をアヤカーナへ向け、熱でもあるかのように光っている目を細める。

「曲者は貴女あなたよ」

アヤカーナは驚愕して後退り、背中を背もたれへ押し付けた。

フォンティーヌはその様子に、雌鳥めんどりが鳴くような甲高い笑い声を上げる。

「どう？貴女の所為でセスは死ぬの。そしてマリユスは悲しむ。

これらは、貴女の存在が巻き起こす悲劇なの。すべて貴女が悪いのよ」

アヤカーナは意味が分らず、言い返そうとするが言葉にならない。フォンティーヌがこちら側へと身を乗り出し、怯む彼女の髪を短剣で掬う。

「ねえ、綺麗な髪に綺麗な顔立ち、誰からも愛される気分ってどんなものなのかしら。」

フォンティーヌはアヤカーナの髪を弄ぶのを止め、今度はアヤカーナの桃色の頬を短剣の腹でピタピタと撫で始める。

「綺麗な顔が、傷だらけでもマリユスは愛してくれると思う？」

「いいえ、そうよね。顔だけでは足りないわよね。身体もボロボロにしないで。」

独りで喋りながら、フォンティーヌの顔がみるみる歪んでいく。

「アヤでもセスでもない。マリユスの一番は私なのよ!」

仰天しながらもアヤカーナは呑み込めた。

「貴女はドユーではなくて、マリユス従兄様がお好きなの?」

「あら、やつとお気付きになった?」

マリユスは私が一番綺麗だと言っていたのよ。なのに……。

なぜ貴女をあんな瞳で見詰めるの!

「わたしのアヤ」って何?その上キスまで!」

フォンティーヌのうなり声が馬車内に響く。

アヤカーナは、徐々に食い込んでくる短剣で頬を切られると思っただ。彼女が腕を引けば肉がサクツと割れるだろう。目を瞑り覚悟を決める。

不意に頬への圧力がなくなり、フォンティーヌが離れる気配を感じた。アヤカーナは不思議に思い、薄目を開けてみる。

なんと、彼女は何事も無かった様に元の席に戻り、微笑みさえ浮かべている。こちらへ向けられている短剣だけが、非常を示していた。

「ご存知?マリユスがガンシユの王太子に立てそうなのは、私のお父様のお蔭よ。彼の鉱山で取れる金の精製の手助けをして、彼に富を与えてあげたの。彼がガンシユの王太子へ立ったら、彼の隣に並

ぶに相応しい女性は私しか居ないわ。」

「アヤカーナは、姿勢を直して怪訝そうにフォンティーヌを見詰める。」

「ああ、ドユーと貴女の仲を邪魔していたのは、マリユスに頼まれたからなの。」

「彼から、ドユーが好きなのは私だと、貴女に思わせてくれ、ってね。」

「だからドユーは私にとって大事な従兄。それだけよ。」

「まさか、マリユスがドユーに貴女を渡さないように画策していたなんて、夢にも思わなかつたけど……」

「緑色の目を見開いたまま笑っているフォンティーヌの表情には、狂気さえ垣間見えていた。」

「アヤカーナは彼女の話の話を頭の中で消化して、確かめる。」

「マリユス従兄様とは裏社交界でお会いに？」

「従兄様は、貴女を介して、イズミク公爵様とお知り合いになられたのですか？」

「そうよ。」

「彼は私を見るなり美しいと言ってくれたのよ。実母さえ忌嫌ったこの赤毛を、彼は暖かい色だと、そして愛おしいって。彼の言葉で大嫌いだっただこの髪の色が許せるほどに思っていたのに……」

「なのに、金色の髪、象牙のような肌を持った貴女が現れ、ドユーだけでは満足せず、私からマリユスまで盗ろうとする。」

「覚えておきなさい！」

「金切り声で叫ばれても、アヤカーナはどうしようもなかった。だが、気圧されてはいられない、セスを助けなくては。」

「私を恨んでも構いません。でもセスを見殺しにするなんていけないことです。早く手当てに戻って、お願い！」

「きょとんと目を丸くし、フォンティーヌは嘔き出した。」

「私はマリユスの一番になる、と言っているでしょう。」

「彼の大事な従者を殺し、次は大切な女性を殺る番よ。」

アヤカーナは呆気にとられた。そんな理由でセスが刺されるなんて、有り得ない。ふつふつと怒りが腹の底から込み上がってくる。

「貴女は間違っています。」

アヤカーナはびしやりと言いつつ放つ。

「私から見たら、貴女ほど恵まれた女性は居ないわ。私など比ではない位のモノをお持ちじゃない。」

でも貴女は、何でも簡単に手に入り過ぎて、忘れていることがある。

多くのものを持った人間には、等価の責任が課せられているのよ。その責任を果たさず、欲してばかりいたら罰ばちが当たります。」

フォンティーヌは得意そうに顎をあげて、せせら笑う。

「女性に一番必要なものは、美しい容姿よ。」

「ご自分がお持ちだからと言って、持っていない者へ対し、偉ぶらないほうが宜しくてよ。」

それに、従者のことより、ご自分の身の心配をなさったら如何かしら、ハイネス王女殿下。」

自分と全く価値観を違えている人間と話す事に、アヤカーナは戸惑っていた。あべこべの世界で生きている者同志は、どのようにしたら、理解しあえるのだろうか。邪魔だと思っただけで、人間を簡単に殺せる人など、彼女の理解を超え過ぎて会話が出来ない。ただ、不用意に発言して、無駄に目の前の女性を、刺激してはいけない事だけは理解出来た。

しかし、笑みを湛えたこのフォンティーヌの余裕は、一体何処から来ているのだろうか。

こちらへ向けられた短剣が、馬車の揺れに添って不気味なきらめきを放っている。

底知れぬ恐怖を覚え、アヤカーナの身体を冷や汗が伝い落ちる。

「私を宮殿へ帰して下さい。」

「貴女を、天国へ、連れて、行って、あげるわ。」

眉を上げ、赤い唇がゆっくりと一言一言を区切って動く。

意味を図りかね、訊ねようとした途端、馬車が急に速度を落とす、左右へ大きく振れた。車輪が石を弾き飛ばし馬車へと打ち付ける。どうやら曲がりくねった道へ入ったようだ。

馬車の揺れで舌を嚙まないようアヤカーナは耐える、辺りが暗くなり、馬車を打ち付ける木の枝や草の音が車内へ不気味に響く。フォンテイーヌを見れば、彼女は微笑を浮かべたまま、どんなに身体が揺れようが、跳ねようが短剣をアヤカーナから逸らすことはない。強い執念を感じ空恐ろしかった。

また車内が明るくなり静けさが戻った途端、馬車はごろごろ音を立てて止まった。

御者席から男達が降りる音がする。馬車の扉が開くと、フォンテイーヌに肘を掴みあげられ、アヤカーナは馬車から外へと乱暴に押し出される。

扉の脇には緑色のお仕着せを着た、イズミク公の私兵が立っており、踏み段を降りた瞬間、両脇にピタリと就かれた。

そこは、森の中にぽっかりと広がった空間だった。周りを木々に囲まれ、その真ん中には今にも倒れそうな小屋が建っている。傾いだ戸口が滅多に使われていないことを教えている。

ここはどこかしら。アヤカーナは不安だった。

「グールメール！」

フォンテイーヌの響き渡る呼び掛けに、木々から一斉に小鳥が飛び去り、小屋の扉から一人の大男が現れた。

「さあアーヤ、彼がお待ちかねよ」

耳元で囁かれアヤカーナはパニックへと陥る。

あれは、あの姿は……。

頭から、二つの穴が開いた袋をすっぽりと被った大柄な男。それは、忘れたくても忘れられない、あの夜の死刑執行人だった。

悲鳴が声にさえならない。アヤカーナは絶る様にフォンテイーヌを振り返る。

「いやつ、お願い。フォンティーヌ止めて。彼のところへ連れて行かないで」

フォンティーヌはにたりと笑い、私兵達へ合図を送る。

アヤカーナは首を振りながら、兵士達の拘束から逃れようと踏ん張る。しかし、簡単に身体が地面から浮き上がり小屋の中に押し込まれた。

背後で扉が閉まる音が響き、部屋の真ん中にあの男が立っていることを確認する。

アヤカーナは逃れるように部屋の隅へと走り、身を竦ませた。

薄暗くて、何も無い部屋だったが、思ったよりも広く、武器になるものがないか必死に目を凝らす。

「さあ、グールメル、彼女を好きになさい。

お姫様を抱けるなんて、一生に一度きりのご褒美よ」

フォンティーヌの満足そうな声が、アヤカーナを恐怖のどん底へと突き落とす。

アヤカーナの怯えた瞳の前で、グールメルは頭に被った袋を脇へと放り投げた。

「いやよ、フォンティーヌ。本気じゃないでしょう」

フォンティーヌは困ったふうに首を傾げる。

「私の友達^{ソニア}は貴女の所為で亡くなったのよ。彼女のためにも償って頂かなくては。

諦めなさい。純真なお姫様がならず者に犯されて逝く。これは貴女に下された罰なの。

それにマリユスの心に残る最期の貴女は、酷く汚れたオンナ。最高よね」

フォンティーヌが短剣をこちらへ向けた姿勢のまま後へと下がり、グールメルが脂ぎった顔に目を光らせ、アヤカーナへ近付いて来た。大男の笑った口元からはボロボロの真っ黒い歯が覗いている。

男がアヤカーナの腕に手を掛けようと伸ばす。

「無礼者！下がりなさい」

アヤカーナは叫び、脇へ飛び退のくと、壁伝いに逃げる。またもや伸ばされる手を、両手を振り回し叩き落とす。泣きながらフォンティーヌに哀願する。

「止めさせて、お願いフォンティーヌ！」

「グールメル遊んでないで、殴つても犯やつておしまい。

ゆっくりしてられないのよ！」

フォンティーヌの怒鳴り声にアヤカーナは悲鳴を上げる。

「いやーっ！」

叫びながら戸口を一目散に目指す。だが数歩も進まないうちにグールメルが、襲い掛かって来た。床に倒れたアヤカーナは、大男の下敷きになり息が出来ない。押し掛かっていた重みがとれ、やっと思が出来ると思った途端、男の頭が臭い息とともに下がり、アヤカーナは乱暴に唇を塞がれた。舌を押し込まれそうになり、嫌悪で吐き気が込み上げてくる。いや、ドユー、助けて。

胸の奥から酸っぱいものが込み上げ、アヤカーナの喉と口を満たす。グールメルはその味に我慢出来ず、唇を離す。口が自由になりアヤカーナは、咳き込みながら吐瀉物をこれでもかかと吐き出す。

グールメルは憤怒に顔を染め、アヤカーナの髪の毛を掴むと、思い切り引つ張り上げた。アヤカーナは負けじと手を振り上げ、届く範囲で男を殴る。

殴つたつもりだったが、アヤカーナの短い手は空を切るばかりだった。頭皮が剥がれるのではないかと思うほどの痛みもとの下、止めとばかり左右の頬に一発ずつ拳が飛んで来た。

アヤカーナは星を見たと思った。意識が朦朧として、口の中に鉄の味が広がる。ガンと後頭部が床に打ち付けられ、男の手には、抜かれた金色の髪の毛の束が、握られているのを見た。

力の抜けた身体からドレスが剥ぎ取られ、肌が露わにされてゆくのが分る、ドユランの優しい手とは似ても似つかない野蛮人の手によって。

身体の芯まで汚されたようで涙が止まらない。

「おい男、王女から離れる。然もなくば、お前の主人の命がない。フォンテイーヌ、死にたくなければ、今すぐ止めさせる。」
冷静な声が響き渡り、アヤカーナは声のする方向へふらふらする頭を向ける。

ファイイが、フォンテイーヌから短剣を奪い、彼女の白い喉元へ長剣を当てていた。アヤカーナは助かったと、詰めていた息を吐く。

「ファイイ、そなた皇族へ剣を向けるのか。」

近衛隊のくせに皇族警護の任務を放棄するつもりか」

ファイイはフォンテイーヌの言葉へ耳を傾けることはなかった。

彼女に一層剣を突きつけ、グールメルへ繰り返し返す。

「男、早く王女から退け」

グールメルは動かない。

彼はアヤカーナの上へ乗ったまま、フォンテイーヌの指示を仰ぐ。

「グールテール、私は大丈夫。」

そのまま王女のピンク色の蕾を噛み切っておしまい」

ファイイが息を呑み、アヤカーナにはその意味が分からなかった。

「フォンテイーヌ！首が飛ぶぞ！！」

「構わなくてよ。」

でも、アーヤの可愛らしい乳首もなくなるわね、ファイイ」

アヤカーナが息を呑む暇もなく、グールメルが覆いかぶさって

胸の先に噛み付いた。

「ひ……くっ」

左胸の先へ鋭い痛みが走り、血が滲み出す。アヤカーナは恐怖と痛み之余り、目を見開き、大きく口を開けたかと思った瞬間、かふつと喉を鳴らし意識を手放した。

ファイイは唇をかみ締める。アヤカーナの乳房を伝う血を見詰め、剣を床へと捨てた。

フォンテュー又は口角を持ち上げ、床へ落ちた剣を拾いフイイへ
剣を向ける。

「グールメールお止めなさい。」

こちらに来て、この騎士様を縛り上げるのよ」

グールメールが緩慢にアヤカーナの胸元から顔を上げ、にやりと弛んだ顔をファイイへ向けた。気を失っているアヤカーナを後に、口の周りに付いた血を舐め回しながら、近寄って来る。

ファイイはアヤカーナの胸を確認し、安堵のため息を吐く。噛み切られていない…。

直ぐに頭を切り替え、グールメールへ鋭い視線を向け威嚇する。

何としても、コンブが殿下と隊長を連れてくるまでの間、時間稼ぎをしなくては。

コンブフェールと二人、フォンテイー又を追ってここまで来たのは良いが、彼女の言う通り、我々は皇族である公爵令嬢プリンセスフォンテイー又へ刃を向けることは適わない。ケセン王女などパールの皇族の比ではなく、本来なら自分は、フォンテイー又の護りに就かなくてはならないのだ。せめて隊長が居てくれたら良かったのだが…。

とにかく、小屋の周りの私兵は始末して来た。アヤカーナさえ盾に取られなければ、こんな男どうにでもなる。ファイイは、フォンテイー又から取り上げた短剣を、気付かれないよう袖口に忍び込ませ機会を狙う。

「ファイイ、何を考えているのかしら」

フォンテイー又は、ファイイの首筋へ当てていた剣を引き、一条の筋を付ける。その筋から赤い粒が滲み出すのを眺めて、綺麗だ、と笑う。

ファイイは思わず顎を上げ、彼女を睨んだ。その瞬間、グールメールに背後から腕を振り上げられてしまった。

ファイイの口から舌打ちがもれる。

フォンテイー又は剣を手に、喉の奥で笑いながらアヤカーナの許

へと歩む、そしておもむろにフィイを振り返ると、剣先を横たわるアヤカーナへ据える。

「いい考えが浮かんだわ。」

王女と騎士の密通、なんてのも粋よねえ」
につこりと微笑^{わら}ってフィイに命令する。

「服を脱ぎなさい、フィイ。もちろん全部よ。」

さあ、早くしないとアーヤを刺すわよ」

この女は…っ。

フィイは憤激にかられ、我を失いそうになるのを、アヤカーナの腫れあがった顔を見て抑える。

「グールメール、手を離して、彼が服を脱ぐのを手伝いなさい」

フィイは短く息を吸って、先ずブーツに手を掛ける。下から手を付けたのは、マントをとって置いたためだった。マントは隠れ蓑になる。味方がもうそろそろ到着する頃だ。

男が汚れた手を差し出してくるのを払い除け、外の気配に耳を凝らす。　まだか。

次にゆっくりと腰の紐をゆるめ、シューズを脱ぐ。フィイの耳に微かな足音が聴こえた。来た！応援だ！！部屋唯一の汚れた窓に外に、合図の指が見える。

フィイは、マントを外すふりをして右手に短剣を掴み、待つ。

3・2・1・　傾^かいでいた戸が外からの一撃で倒れ、味方が突入する。その轟音を合図に、フィイは短剣をグールメールの左胸へ突き刺した。大男がレンガの塊のようにくずおれるのを確認して、アヤカーナを振り返る。

フィイが素直にブーツへ手を掛けるのを、フォンティーヌはじっ

と見つめていた。もちろん意識は、足下で気を失っているアヤカーナから離れることはない。このまま剣を突き刺すとしたら、眼が良いかしら。それとも、グールメールの歯型の傷がついている左胸が良いかしら……。でも、その前に陵辱してあげるわね。

ファイイがシヨースを脱いだ。

次のことを考えてフォンティー又はワクワクする。ああ楽しい。

そんな時だった、戸が破られた轟音とともに部屋の中に埃が立ち込め、誰かが突入してくる。驚いたフォンティー又は、思わず戸口へ剣を向けた。そのほんの一瞬だった。構えた右手に強烈な痺れが走り、手からは剣が消え、気が付けばデュランに喉を掴まれて、身体ごと壁に押し付けられていた。

あまりの苦さに、喉を締め付ける手に思い切り爪を立てる。

「ド、デュール……は、離し……て……くっ、苦し……」

デュランは鬼の形相で、フォンティー又の首に当てた右手に力を込める。このままへし折ってやろうと両手を添えた途端、後ろから羽交い絞めにあい、無理やり標的から引き離される。

「デュール止める。落ち着け。」

王女がお怪我を負っていらっしやる」

タンギューの声にはっとして、彼から身を振りほどき、床に倒れているアヤカーナの許へ駆け寄る。傍に付いていたファイイが、すつと移動してデュランへ場所を譲る。

愛しい少女は顔が腫れあがり、口と頭から出血していた。頭の周りには引っこ抜かれた金色の髪が散らばっている。

口元に顔を寄せ、息をしていることに安堵する。他は大丈夫かと掛けられたマントを捲り左胸の出血に驚愕する。噛まれたのか……。深い歯型から血が流れていた。アヤカーナの身体を、自分のマントで包み直し、胸に抱え込む。

「ファイイ、誰がやった」

ファイイは、デュランが発した、地の底を這う様な声音にひるみ、姿勢を正した。

「そ、そこに転がっている男です。すでに死んでいます」
必死に報告するファイに、タンギューが割り込んでくる。

「ファイ、お前なぜ下に何も身につけていない。

まさか、お前……」

喉から空気音を発し、ファイは首を振ってデュランへ否定する。

「ひつ…殿下、天地神明に誓い、決してそのようなことはございません！」

タンギューが、そのようなこととは何だ、と追い打ちを掛けている。

周りの騎士達からも、怪しいぞ、などと野次があがり、笑いを誘う。

デュランの気が少し落ち着いた時だった、目の端を人影が横切る。
「タンギュー、マリユス王子を止める……」

タンギューは身を翻し、フォンティーヌに向けられた剣を咄嗟に受け止めた。一撃、二撃、三撃と火花が飛び散るような攻撃を渾身の力で受け止め。刃と刃を重ね合わせた力比べが始まる。

「マリユス王子、引かれよ。」

もし彼女を斬ったら、彼女の思う壺です。

あれは罪人でもパーレス皇族です。お国とケセンへの影響をお考え下さい」

タンギューは目の前の興奮した秀麗な王子へ、にやりと不敵な笑みを向ける。

マリユスは思った。確かに、フォンティーヌはマリユスが斬りかけた時、笑いながら身体をこちらへ向けて来た。彼は剣の力を抜き一歩退く。女の浅知恵に反吐が出そうだった。

氣勢を削がれ、剣を脇へ下ろしたマリユスへ、フォンティーヌが噛み付く。

「マリユス、私を殺すつもりなら、さっさと殺しなさい」

フォンテュー又は自分を背に庇い、護ってくれている騎士達さえも、邪魔とばかりに押しつけ、前へ出る。

「私はセスを刺して、あなたのアーヤまでも犯して殺そうとしたのよ。」

あなたの愛が得られないなら、憎悪でも構わない。

あなたの手で私を殺して！」

マリユスは、赤い髪を振り乱し目を吊り上げた醜い女を、冷たい視線で一瞥して、剣を鞘へと納める。そして、くるりと彼女に背を向け、アヤカーナを探して首を回らす。

フォンテュー又は顎を引きワナワナと震えだす。赦せなかった、全てが赦せなかった。

「何故よ、何故なの？」

どうしてケセンの田舎女は全てを手にして、高貴なる私はこんなに虐げられるの？

どうして天はアヤカーナへ、私が欲しいものをお与えになって、私には何も下さらないの？」

最後はフォンテュー又の心からの叫びだった。

デュランは、従妹のまるで狂女のような声に瞑目し、何かを決したように目を開いた。

「済まぬ、マリユス王子。暫しの間アヤカーナを頼む」

その場に居た全員が、デュランの言葉に驚いた。

デュランはゆっくりとマリユスへ歩み寄り、胸に抱いたアヤカーナを預ける。

マリユスはデュランからアヤカーナを受け取り、そのあまりのむごたらしい姿に愕然とし、少女を胸へかき抱いた。

デュランは、我を失い床にへたり込んでいる従妹の前に立つと、いきなり手を振り上げた。

部屋に、痛そうな音が響き、皆一様に身を縮ませる。

フォンティー又は呆気にとられた顔を上げ、直様左頬に手を添えドコランを睨み返した。

「フォン、一度しか訊かない。よく考えて答えろ」

彼女は、交戦的な表情かおを崩さない。

「お前は、絵の中の男に恋が出来るか」

フォンティー又は眉を寄せ訝いぶかる。意味が分からない。

「俺はアヤカーナの姿絵を見て、放り投げた」

ああ、そういう意味かと納得して、口を開く。

「ドユーは見栄えだけは宜しいし、何よりパーレス帝国の皇太子ですもの。」

普通の女だったら、絵だろうが恋焦がれるわ」

吐き捨てるように言って、おお痛い、とわざとらしく頬を撫でた。

ドコランは片膝を付き、フォンティー又の目線で先を続ける。

「おい、所詮、絵の中の男だぞ。」

現実には、お前も惚れた夢のように美しく優しいマリユス王子が隣に居るのにか？

しかも、先日アヤカーナが大切にしている、俺の姿絵を初めて見たんだが…。

非常に、不細工だった。

目が吊り上がり、鼻を膨らませた男がこちら側を睨んでいた。

あれでは大嫌いと言われても、文句は言えない」

フォンティー又は何も答えなかった。いや、答えられなかった。

「彼女は国の為、家族の為、必死に自分の心に蓋をして、使命としてパーレス皇太子を愛そうと努力し続けたのだろうな。」

15歳で独りきり、それも他国への輿入れなど、お前だったら耐えられるか？

俺は彼女に櫛一枚、ケセンから持つてくることを禁じたんだぞ。

それに対して、彼女は一切文句も言わず、アザレアやお前達の虐いじ

めにさえ耐えていた。どうだ？」

フォンティーヌは、ドユランの問い掛けに答えることはなく、そっぽを向いて、黙ったままだった。

ドユランは溜息を落とし、立ち上がった。

そして、フォンティーヌを見下ろす。

「地位に名誉、強力な後ろ盾、それに豪華なドレスや宝石、

俺にはお前の方が、女が夢見る全てを、生まれながら手にしているように見えるがな。」

これ以上まだ何かを望むのだったら、己に課せられた責任をきつちりと果たしてからほざけ」

フォンティーヌは反抗的な瞳をドユランへと向ける。その燃えるような緑色の瞳は、そういうお前はどうかなのか、と訴えていた。

「俺は、愛する女に心の底から惚れられるような男になるよう努力する。」

重い責任を担い、臣下や国民にかす傳かれるに相応しい皇帝を目指す。必ず、天は努力に見合った褒美を与えてくれるはずだ。」

そう言って、ドユランはくすりと笑い付け足す。

「俺はガンシユのマリュス王太子に負けないような男になる。」

だからお前も、愚かな矜持など捨てて、アヤカーナに負けない女を目指してみる」

フォンティーヌはドユランの言葉に頷くことは無かったが、首を横に振ることも無かった。

「タンギュー、フォンティーヌを拘束して宮殿へ連れて行け。」

タンギューが頭を下げ、騎士達に指示を与える。

騎士達が迅速に動き、フォンティーヌを連れ出してゆくのを、ドユランは静かに見守っていた。

「ふーん、益暗皇子だと思っていたが、これは随分とまた」

デュランの背後から、アヤカーナを抱いたマリユスが、聴こえるように独りごちる。

デュランは振り返り、灰色の瞳を真正面に見る。

「王子、アヤを返して頂こう」

差し出された手を掠めるように、マリユスはアヤカーナの身体を横へ向ける。

「アーヤは私の腕の中の方が安心する、私が運ぶ」

デュランはマリユスが右へ進めば右へ、左へ動けば左へと動き、彼の前を塞いでアヤカーナを奪おうと手を出す。マリユスは負けじとアヤカーナの顔を胸にしっかりと抱え込む。

「マリユス王子、アヤは物じゃないのだぞ、早く宮殿で治療しなければ」

「君が邪魔している。」

そこをお退き下さいませ。皇太子殿下」

みるみる不機嫌な表情かおになって行くデュランを見て、マリユスは遣り過ぎたと感じ、口調を変える。

「聴いているのだろう、リキユウ宰相閣下から。」

君達の婚約履行に関するケセン側、いやケセン国王夫妻の回答を「目を細め、無言のまま動かないデュランの様子が、肯定を示していた。」

「だったら、宮殿まで私にアーヤを運ばせてくれ。」

私はそこ迄で手を引く、約束する。頼む。」

愛する少女と同じ灰色の瞳に真摯に迫られ、デュランは仕方ないと肩を落とした。

「但し、俺と一緒に馬車に乗ってもらおうぞ」

9・(後書き)

1 / 2 2 AM 8 : 2 5

やっちゃいました。まだ更新するつもりなかったのですが、間違っ
て更新してしまいました…。公開したまま、今から読み直します。既読
の方、もしかしたら、どこか文章変わっているかも。お許し下さい
m (| | ;) m
ゴメンネ + ・ (人 、 〇) (〇 、 人) 。 + ・ ゴメンネ

1 / 2 2 AM 9 : 3 0

このままの文章で参ります。
殆んど、手を加えておりません。

次回からは間違えないよう心致します。ヽ (* ・ ・) ノシ + ∴

*。 ∴ + ∴ + ∴。 *

夢を見ていた。楽しい夢だった。

何故か、身体が嫌悪と不快の黒い渦に巻き込まれそうになるのを、セスが払い除けて、遊んでくれる。

そうしていつものように、またね、と彼は嬉しそうな顔で、手を振っていた。

ふと目を覚ますと、部屋の中は明るく昼間だった。頭の上に書物が浮かんでいる。デュランがアヤカーナを抱きながら寝台で、何かを読んでいるのだ。書類だろうか。

「目が覚めたか」

デュランの問いかけに、首を伸ばして応えようとした途端、左胸に引きつるような痛みが走った。

顔をしか顰め、背中を丸めたアヤカーナの様子にデュランは書類を放り出し、腕の中の少女を優しく、だが、しっかりと抱きしめる。

温かいその身体が何より懐かしく感じられ、アヤカーナは顔を擦り付けて目を閉じる。まるで身体の不浄が浄化されていくようで心地よい。

「大丈夫だ。」

デュランはそう言って、少女の殴られて変色した頬に軽く触れ、起き上がると、銀の水差しから器へ水を注ぐ。

アヤカーナはその後姿を目で追う。彼はきちんと衣服を纏っているのに、自分は薄い夜着姿だった。突然、意識を失う前の事が脳裏に浮かび、身をぶるつと震わせ、夜着の前を搔き合わせた。

フォンティーヌにされたことが、悪夢のように思える。しかし、左胸を覆う包帯が確かに現実だったことを告げていた。

アヤカーナは不思議なくらい頭がすつきりとして、周りのものが良く見えていた。

自分が寝ている部屋はデュランの寝室であり、デュランが自分を心配してくれていたことを感じる。

「あの、ファイが…、ファイが助けてくれました。

ファイは大丈夫でしょうか」

デュランを安心させようと、意気込んで出た言葉がこれだった。

あの時の記憶は、ファイが助けに現れ、左胸に痛みが走った所で終わっていた。彼はあの後一人で、死刑執行人を相手に戦ってくれたはずだ。

だから、自分は大丈夫でファイの方が大変だ、と伝えつつもりだった。

デュランはアヤカーナに水を差し出ししながら、苦笑いを浮かべる。

「ファイはアヤより元気だ」

デュランは一つ溜息をつくと、アヤカーナの寝乱れた髪の毛を大きな手で後ろへと撫でつけ、額と額をこつんと合わせた。

「一週間は一步たりとも、ここから出ることを禁ずる」

彼は、身を翻すと書類を手に風のように出て行った。

直ぐに入替のように、アザレアが女官長と入って来た。

「イズミク公爵閣下とフォンテーヌ様は、パレス北西にあるアーシ要塞へ幽閉が決まりました」

顔に薬を塗ったり、食事をあてがってくれたり、女官長が甲斐甲斐しく世話を焼いてくれている隣りで、アザレアが色々とアヤカーナに説明をしてくれる。

アザレアの話によると、イズミク公爵は陛下の前で悪事が暴かれ、そのショックによる心臓発作のため、床に就いたままの身で、幽閉

が決まったという。フォンテイーヌも然り。

パーレス皇族である彼らには法も適用せず、幽閉されたまま一生を送るのだということだった。アヤカーナへ対する毒の混入などはガンシユ王女を迎え入れたいが為の、イズミク公爵の仕業だとも教わった。

それと、ガンシユ王女の輿入れは斥けられたそうだ。

アヤカーナはさして、驚きも憤りこらみさえも感じなかった。ドュランを信頼し、彼に護られているという思いが、彼女に余裕を与えていたことは確かだったし、高貴な方々の悪事とは、概ね金権や政治が絡み、自分の考えの範疇に及ばないことであり、アヤカーナの限られた情報や視野では意見などつけられない。

ただ、アヤカーナは無性にマリユスに会って話しがしたかった。フォンテイーヌの恋慕にセスの安否もある。どうしたら会えるのだろうか。

「アヤカーナ様。何を考えておいでですの」

アザレアの鋭い瞳に気押され、アヤカーナは正直に口を開く。

「アザレア、マリユス王子に会いたいのですが、どうしたら会えるのでしょうか」

アザレアは二の句が継げない。この王女は、騙されたとはいえ、マリユス王子へ会いに出かけて、こんな目にあっただろうに。自然と拳に力がこもる。

アザレアは息を吐き、負傷している少女を真直ぐに見詰める。

「もう少し、殿下のお気持ちをお察し下さい。お忙しい中、どれほど心配なさっておられたか…」

…それに、私達も心配で、心配で…」

途中で言葉を切り、黙ってしまった女傑アザレアの瞳が潤んでいることに、アヤカーナは驚き、慌てふためく。

「ごめんなさい、アザレア。私が浅はかでした。大人しく休んでいきます。だから泣かないでっ。」

アザレアは俯き、目頭を押さえながらニタリと微笑んでいた。

そろり、と寝台を降り扉へ向かうと、耳を当てて隣の様子を伺う。よし、物音ひとつ聞こえない。

今、ここ東宮は警備の交代の時間で、アザレア達も別室でお茶をしているはずだ。もちろん女官達は彼女達の給仕に就くし、私のことは、眠るから一人にしてくれと皆にも言っておいた。

少しの間でも、私から皆の関心が逸れる。

アヤカーナはセスのことを想えば、やはり大人しくなどしては居られないと思った。彼の安否だけでも、この目で確かめなくては。

アザレアにセスのことを訊くことも考えたが、やはり、パールの人間にセスのことは訊けない。

とにかくもう一度、セスが倒れた場所へ行けば…、という思いがアヤカーナを突き動かす。

白萩の間はデュランの部屋の隣、あの通路は寝室の西側にあった。必ず、ここにもあの通路への扉がある。

期待を込め、壁を一通り叩いてみるが、音の変化は見られない。アヤカーナは腕を組んで考える。あちらは、壁が隠し扉になっていた。こちらは壁ではなく、家具に何か仕掛けてあるのかしら？

ふと、壁に掛かった大鏡が目に入り、もしかして、と思い楕円形のふち飾りを揺らしてみる。

駄目だ、動かない。

諦めきれず、サイドにある鏡用のカーテンフックを闇雲に回してみた。しかし、押そうが引こうが何をしても全く動かない、最後とばかり、フックに全体重を乗せ押してみた。カチリという音と共に

フックが下がる。手に伝わるそれは、まるで鍵が外れたような感覚だった。

確信しながらも、恐る恐る鏡を揺らしてみる。動いた！

ゆらりと大鏡がこちら側へと開き、向こう側に空間が見える。奥から冷たい空気が押し寄せて来て、寒い。

アヤカーナは夜着一枚だったことを思い出し、慌てて鏡の扉を閉める。

いけない、何か羽織らなくては。辺りを見回し、何気に鏡に映った自分の姿に目が留まり愕然とする。髪はボサボサで、頬と口元が紫色に腫れ上り顔が変わっている。鏡の中の人間は、自分ではないみたいだ。

でもこれなら、外に出ても私だとは誰も分からないだろう。アヤカーナは良いほうに考え、鏡に向かい引きつった笑いをみせる。とにかく、寒くないようにして出発しなくては。

毛布を持ち出そうと思い、回れ右をする。

振り向いた途端、アヤカーナはぴたりと動きを止め、寝台を見詰めたまま動けなかった。

寝台の上には、背をクッションに預けるようにして、目を閉じたデュランがいた。

執務室の扉が、何の前触れもなく開け放たれ、ダズンは振り返る。すると、デュランがわざと足音をたてながら、横を通り過ぎ、これまた大きな音をたてて椅子へと腰を下ろした。

ダズンは、眉を寄せてその様子を追い、肩を落とす。

「アヤカーナ様は、まだお目覚めにならないのか」

朝から続くガンシユとの協議の合間を縫って、アヤカーナの様子を見に行くデュランの機嫌が一向に戻らないことを、ダズンは彼女の不調に結びつける。

昼の長休憩だったので、少しは機嫌が良くなるかと期待したが、どうやら甘かったようだ。

やはり、フォンテイーヌのあの行為は鬼畜だ。昨日の今日では、仕方あるまいと諦める。

ダズンは親友に同情の眼差しを向け、胸の前で十字を切りアヤカーナの無事を神に感謝する。

「アヤは大丈夫だ。先程目覚め、開口一番、俺にファイイのことを訊いてきた。」

「ファイイが自分を助けに来てくれた。彼は大丈夫か、だとさっ」「ふはあ?」

デュランの子供のように剥むくれた顔に、ダズンはすつとんきような声をあげた。

「ド、ドユーおま…え…」

ダズンはわなわなと震え、奥歯を噛みしめる。

このバカが！平常時であれば、微笑ましい皇子の嫉妬心で済むが、今はガンシユとの重大な局面を迎えている。こんな時こそ、皇太子としての雅量をみせろ、と心の中で叫ぶ。

友の気持ちも知らずにデュランは、まだぶつぶつと粗野な小言を

溢しながら、溜まった書類に手を付けようとしていた。

ダズンは、静かにやれ、と声を上げかけるが、妙な違和感を覚え止めた。

そういえば、条約に対する協議がスムーズに運び過ぎている。協議初日ということもあつてか、ガンシユは難題を吹っ掛けてくる処か、パールス側の要求をすんなりと受け入れ、ガンシユ王女の輿入れ拒否にさえ、マリユス王子は異議ひとつ唱えない。

むしろ彼は、醒めた様子で席に着き、ガンシユ側の人間の発言を観察していた。

何故だ？マリユス王子は、アヤカーナを奪いに来たのではないのか。

ダズンにとって、そんな彼の従順な様子は、肩透かしを喰った気分だった。マリユス王子を過大評価していたのだろうか。それとも単に和平が目的だったのか。

一方デュランはデュランで、幼稚な嫉妬の矛先をマリユス王子ではなく、フイイに向けている。一体この余裕は何なんだ。

ふとデュランの上に、いつも飄々と責務をこなす宰相リキュウの姿が、重なって見えた。

彼を見つめるダズンの目が、徐々に据わっていく。

「ドユー、本当の事を言えよ。私に教えていないことがあるな。」

リキュウ宰相閣下から何を聴いている。それとも提示されたのか「デュランは目を丸くし、次の瞬間には頬を緩めていた。

「おお、流石我が片腕。気が付いたか」

ダズンは、デュランのにやけた笑顔にうんざりして、何かを抜くように頭を横に振る。

「さっさと教えろ！」

「知つての通り、陛下とリキュウの考えは、俺達と同じだった。」

おかげでアヤカーナを白萩の間へ移せし、私腹を肥やしていたイズミク公爵を失脚に追い込めた。

色々と骨折ってくれたお前には、とても感謝している」
デュランの真摯な言葉にダズンは胸に手を当て、悠然と頭を垂れながら思う。

私は私のオマージユを、すべてお前に捧げていることを忘れてくれるなよ。

デュランは頷いて先を続ける。

「その陛下の真意をリキュウへ訊ねに行った時、回答を得る条件として、質問が出された。

この不可侵条約締結で、一番得をするのは何処か

俺はケセンだと答えた。ケセンが上手く立ち回れば、ガンシユとパールの両方から、良い条件を引き出せると思ったからだ。

リキュウからは及第点だと言われ、陛下の真意を教えて貰い、そしてケセン側の親書を見せられた。」

デュランは瞳を閉じ、あの時の情景を思い浮かべる。

リキュウから『恐れ多くも陛下のご意向は、殿下がお考えになっている通りです』というお墨付きを貰い、早々に退散しようと思いを浮かせた時だった。

「殿下、なぜ及第点なのか、理由をお聴きになりませんか。」

鋭い声にデュランはその場へと留められた。

声音に反し、にこりと微笑っている老獺は、右手に持った書状をひらひらと振り、デュランへ差し出して来る。

胡散臭げに覗いたその書状は、ケセン国王夫妻がパールレス帝国皇帝夫妻へ宛てた親書だった。

驚いて顔を上げると、リキュウが片眼を瞑ってくる。呆れて書状を放り出したくなるのを堪え、書面に集中する。

次第に真顔になっていくデュランの様子を、リキュウは静かに見守っていた。

「このこと、マリユス王子は知っているのか」

ドユランは読み終えた親書を、丁寧にリキユウへ返す。

「今はご存知無いでしょうか。」

それより殿下、何故及第点だったのか、お解かり頂けましたか」

「どうやら古狐は、親書の内容について話し合うつもりはないらしい。」

ドユランは溜息を落とし、素直に教師リキユウへ回答する。

「ああ、俺はケセン側の真意を探るのを怠った」

「ご名答です。では、次回は高得点を期待しておりますぞ。」

もう終了とばかり、リキユウは立ち上がり優雅に礼をする。

ドユランは複雑な心境を抱え、静々と退席するしか他なかった。

「で、その親書の内容とは？」

ダズンからの問いにドユランはゆっくりと語りだす。

「まず、ガンシユ王女の輿入れの噂を聞いたケセン国側の公式回答は『ケセン王女とパーレス皇族の婚姻が履行されること望む。但し、相手はパーレス帝国皇太子に限らず』」

その理由が皇帝皇后両陛下宛に、私信として認しためてあった。

ケセン国第一王女アヤカーナは、20年前に亡くなったマリユス王子の生母ユルシユールに、容姿から性格までそっくりなのだそう
だ。

ケセン王妃は、姉ユルシユールの死について全てを見ている。当時、ガンシユ王の姉に対する執着は凄まじく、見苦しいほどだったと述べていた。そして、姉は幸せではなかった、と。

そこでケセン国王夫妻は、成長するほど姉に似てくるアヤカーナの容姿を、ガンシユ王にだけは知られまいと、必死に隠していたそ

うだ。此方パレスに送っていた、本人に似ても似つかない姿絵の件も、かなり詫びていたな。

もし、ガンシユ王がアヤカーナに興味を持ちでもしたら、ケセン国は突っぱねられない。パレス皇太子の許婚という枷が外れたアヤカーナを、ケセンは護れないと、自国の弱さを嘆いていた。

ただ、ケセン国王はひとつの希望を抱いていたそうだ、ガンシユ王が母親に似ているマリユス王子を受け入れず、齒牙にも掛けなかつたら、王は既にユルシユールを疎んじている。自分達の思いは杞憂に終わると。

しかし、王はマリユスを受け入れ、認めた。これはまだ王に、ユルシユールへの想いが残っていると思ひ、愕然としたそうだ。

だから、彼女をガンシユのマリユス王子の許へ嫁がせることは、一番考えられないらしい。アヤカーナがマリユスへ嫁ぎ、ガンシユ王の目に留まることは、ユルシユール以上の悲劇を生みかねない。自分達の愛するマリユスとアヤカーナの二人を不幸には出来ない。

最後に、自分達は一国の君主として不適格かもしれないが、親として娘アヤカーマリユスと息子の幸せを願う気持ちを述べさせて頂いたと結んであった。

沈黙が二人を包む。ダズンは頭脳を働かせ、今の話しを理解しようとしていた。

ケセン王は娘を護る為、ガンシユ王が手出し出来ない、パレス帝国の皇族への輿入れを切に希望するということか。

それに間違いなく、マリユス王子はケセン国王の想いを知っている。アヤカーナをガンシユへ連れて行く危険を知ったのだ。だからあんなに従順なのか。しかし…

「…もし、もしもだが、ドユー。
マリユス王子が、ガンシユの王太子位を拒んだらどうなる。

我々の推測通り、彼がケセン王女を得る為に、ガンシユの王太子を望んだとしたのなら、王太子に立つ意味がなくなる。彼が陣頭指

揮を執っている不可侵条約は、どうなると思う。

確か立太子式はまだ済んでいないぞ」

「マリユス王子は、アヤの為にも、自ら王太子を放り出す事はないと言っていた。

王子曰く、ガンシユの王太子が後ろ盾にいるということは、彼女の箔にこそなれ、損にはならない。その上、高慢なパーレス貴族に対する牽制にもなるらしい。

俺はあいつに、アヤのことは心置きなく忘れてくれと言っておいたがな」

ダズンから驚きの声が漏れる。

「マリユス王子自身から聞いたのか」

「ああ、昨日、馬車の中で聞いた。

それと、自分の従者^{セス}の死を、アヤにだけは知らせないでくれと頼まれたよ

彼は彼女の侍女ナギーの一人息子で、二人は生れた時から遊び相手だったそうだ。今の段階でセスの死は、彼女には耐えられないからと。

そういえば、彼はなぜ彼女があんなに深窓に育てられていたのか、真相が分ったとも言っていたな。」

「深窓？」

「ケセン王宮はよく言えば自由な気質、悪く言えば田舎者で節度が足りないらしい。

つまり、あまり身分の上下がなく、王侯貴族達は召使達や庶民と普通に交流し。市井は庭みたいなものなのだそうだ。

なのにアヤカーナだけは、未来のパーレス皇太子妃として、王宮から滅多に外出できず、絶えず誰かが張り付いて、着替えひとつ自分ではさせて貰えなかった。マリユス王子は彼女が不憫で、パーレスの所為だと怨んでいたそうだ。」

「未来の皇太子妃を言い訳に、王女を人目に触れさせなかったのか」
ドユランとダズンは各々に、たった一人の男の所業に、振り回さ

れ続けている人間達の運命に思いを馳せる。
いつの世も泣くのは力の弱い方という事か。

その時、重い空気を払拭するかのようになり、扉の向こう側からタンギューの来訪が告げられる。

ドユランの入れ、という言葉の後、タンギューが頭を掻きながら、室内へ進み出た。

「おいドュー。アザレアからだ。」

“アヤカーナ様が、マリユス王子に会いたいと申しておられました。”

「ご注意申し上げたところ、急に人払いを命じらております。」

お部屋から、抜け出すおつもりかもしれませんが” だと。

一応あの通路の出口には、警備兵を配置して来たが、どうする。」

ダズンは、啞然とする。

懲りていらつしやらないのか、あのお姫様は…。

「もしかして、ドューの部屋の秘密の通路もご存知なのか？」

扉へと向かっていたドユランは、ドアノブに手を掛けダズンに答える。

「いや… 多分、扉を探さるうな。」

いいか緘口令だ。“マリユス王子の従者は死んでいない！”

それと午後の協議、俺は体調不良で欠席だ”

そう言い残し、ドユランはアヤカーナの許へと急いだ。

アヤカーナはごくりと唾を飲み込み、知らぬ間に寝台に横たわっていたデュランを見詰める。

一体、何時から居たのだろう…。

暖炉に焼べられた薪が、火の粉を星のように散らして崩れた。火が消えかけている。

「寒いな」

デュランは緩慢に起き上がると、暖炉へ近付き灰を掻き回して新しい薪を何本か投げ込んだ。

「アヤ、寝台へ戻れ」

燃え上がった焰が彼の顔を紅色に照らしている。揺らめく焰の影がデュランの怒りを代弁しているかのようだった。

アヤカーナは急ぎ早に寝台へ入ると、毛布を頭から被って目をぎゅっと瞑る。まるで判決を待つ罪人のような気分だった。

「寒くないか、風邪でもひいたら大変だ」

あれ、怒っていない？

思いがけない優しい言葉に、毛布から顔を覗かせる。

こちらを覗き込んでいたデュランの指が、彼女の冷えた頬を軽く撫で、そのまま寝台へ腰を下ろした。

「何処へ行こうとしていた」

来た！ アヤカーナは口を嚙み、目を泳がす。

部屋から抜け出そうとした罪の意識から、謝罪の言葉が喉まで出掛かるが、どうしても言えなかった。

逃げるようにまた頭から毛布を被り、だんまりを決め込む。

静まりかえった寝室に、薪の爆ぜる音だけが通る。

デュランは天井を仰ぎ、大きな溜息を一つ吐いた。

「…フォンがマリウス王子の従者に傷を負わせたようだが、その少

年をアヤは知っているのか」

丸い塊がぴくりと反応したが、一向に返事はない。彼の口から今度は小さな溜息が出た。

「フォンの様子がおかしかったので、ファイ達三名にフォンを見張らせていた。」

その報告が上がってきたのだが、フォンはマリユス王子の従者をそそのか唆して、アヤを拉致。口封じの為、その場で従者を刺したそうだな。アヤは見えていたのだろう。

ガンシユ側へは謝意を表して来たよ」

ドユーが謝罪？

そろりと毛布から顔を出し、慎重に言葉を選び訊ねる。

「セスは…セスにお咎めはないの。ドユーはセスを捕まえない？」

ドユランは笑う。俺が彼を捕まえると思っていたのか。

「捕まえない。大丈夫、彼は被害者だ」

そして彼女が一番知りたいためであるうことを続ける。

「騎士三名は、物陰からフォンの動向を伺っていた。」

彼らは、全く知らなかった壁の扉から、少年がアヤを伴い現れたときには驚愕したらしいぞ。

ファイとコンブはアヤを追い、ダンは刺された少年を医師へ預け、タンギューの許へ報告に走った…」

アヤカーナは話の続きを遮るように跳ね起き、ドユランの腕を掴む。

「それでセスは、セスは助かったのですか」

ドユランは口元を引き締める。

「パールスは傷を負った少年をガンシユへ引き渡した。…後は彼の生命力次第だろう。」

医師は浅い傷ではないと申し立てた。」

アヤカーナはドユランの首にしがみついて感謝する。

「セスを見殺しにしないで…、捕まえないでくれてありがとう、ドユー」

いくらフォンティーヌに唆そされたといつても、パーレス皇族しか知らない通路を知った人間が赦されるはずがない。

ドユランの優しさが堪らなく嬉しかった。そっと抱き返され、アヤカーナは力を抜いてその身を預ける。

そして彼の首筋に顔を深く埋め呟く。

「私、マリユス従兄にいさま様に、会いたい。

会ってお話したいことがあるの」

やっと本音を漏らしたアヤカーナにドユランは安堵する。

「何を話すのか教えてくれ」

「フォンティーヌ又はマリユス従兄にいさま様が好きなんですって。

従兄にいさま様の気持ちを確かめたいの。それに注意をしなきゃ」

「注意？アヤがマリユス王子へか？」

「従兄にいさま様はとても優しく、不用意に甘い言葉を囁き過ぎるの。

あれでは女性が勘違いなさるわ。

現にフォンティーヌ又は勘違いして私を憎んでいた…。

今回の件は、従兄にいさま様が原因を作ったのよ。誰かが注意してあげなければ」

ドユランは、己の頭に浮かぶマリユスの印象とは大分違う像に戸惑う。

あの男、此処パーレスでは取り澄まして、女が微笑んで挨拶しようがニコリともしないぞ。

きつと、アヤカーナだけのマリユス王子様が存在しているのだろう。心の中で納得して苦笑する。

「ちゃんと彼には会わせてやるが、まずはその傷が癒えてからだ。怖かったらう」

労わるように抱き締められ、アヤカーナの瞳から大粒の涙が零れ落ちる。昨日のことは、只々ただただ恐ろしかった。思い出すだけでも悪寒が走り、吐き気がする、出来ることなら記憶から消し去ってしまいたい。

背中を撫でる大きな手がとても心地よい。その手で忘れさせて欲

しかった。

「フォンが済まない事をした。許せ」

アヤカーナの瞳が大きく開かれる。なぜドユーがフォンティーヌの行為を謝るのだろう。まるでフォンティーヌはドユーの大切な女性とみたい…。

ドユランにフォンティーヌを庇って欲しくない！

アヤカーナは、彼女に対して過剰な忌避感に支配される。

「フォンにはもう手出しさせない」
嫌だ。聴きたくない。

身体に回された腕を振りほどくと、濡れた瞳でドユランを睨み付け、そっぽを向く。

ドユランは突然の行動に驚き、声も出ない。

「アヤ？」

アヤカーナの心の奥で籐たがが外れた。

「嫌、絶対に許さない。

フォンティーヌなんて大嫌い！」

だって私は気付いているのですもの。

そう、セスはもうこの世に居ないことを。

あの時のセスを囲む血溜まり、そして夢の中のセス。それらの線の繋がる先は死だ。セスは死んでいる。

己の欲望のままにセスを殺したフォンティーヌが憎い、許せない。アヤカーナは身内から発する憎悪の黒い吹き溜まりに身を囚われそうになる。

セスの敵を討ちたい。ただそれだけなのに、セスがいけないと言う。復讐なんてアヤには似合わない、許すのだ、と。

そんな事、言われなくても分っている。私も反対の立場だったら、きっと同じ言葉を言うだろう。人を憎んでいては、幸せになれない。相手はこちらを不幸にしたくて罪を犯すのだ。憎しみを捨てなければ犯人に敗けると。

セス、時間を頂戴、癒しの時を私に下さい。私は、貴方の死を必

ず受け入れるから。

でも、今はまだ無理…。

アヤカーナは今の真情を吐露せずにはいられなかった。

「フォンティー又なんか居なくなればいい。彼女の肩を持つドューも嫌い。」

フォンに嫉妬しているのか？

ドユランは彼女の真意を知るべくもなく、にんまりと頬が緩むのを止められない。不謹慎かと思いつながらも、両手で顔を覆い子供のよつに泣きじゃくる姿が、とても愛おしかった。

華奢な身体を掬い上げ膝に乗せる。愛しい少女は抗うことなく広い胸に顔をすり寄せて来た。

「ドューは死なないでね…」

アヤカーナの哀しげな呟きに、ドユランは目を見張る。そして心の奥で何かが弾けた。

彼女はセスの死を分っている。

その小さな背中を撫で下ろしながらドユランは何度も繰り返した。大丈夫だ、と。

「俺はアヤを置いてなど死なない」

12 (後書き)

活動報告にも載せているのですが

拍手、感想、問い合わせありがとうございます。

とても嬉しく、時には唸りながら(笑)拝読させて頂いております

(^ - ^*)() . . *()ペコリ

一週間ほど前、バレンタインデーが近いと思い、お気に男性キャラアンケートを拍手に付けてみました。

結果はデュランに三票頂きました。それだけです(笑)

貴重な三票、デュランに成り代わり感謝申し上げます。ヽ(*、

、)ノ? ? ? ? ?

それと、拍手に置いてある小話についての質問にお応えいたします。小話も一週間ほどまえに置きました。後にも先にも、今のところ小話はひとつだけです。

私の拍手画面はランダムに五種類あります。小話が出た方、興味があつたら読んでみてくださいね??? (人、、)

まだ小話もアンケートも設置していますので、拍手を送って頂いた方は覗いてみてください

??????

2011.2.16 AM 8:00

「ユル…シユール…殿」

アヤカーナは驚いて、冬椿を切る手を止めた。庭園の入り口のところ、眉の上で切りそろえた濃い灰色の前髪に、口髭を蓄えた壮年の貴族が立ってこちらを見ていた。

「どなた？」

宮殿の裏側にある庭園に冬の椿が見事に咲いていると聴き、朝食前一人で花籠はなかごと花鋏はなばさみを持って切りに来ていたのだ。もちろんドユランに許可を貰ってである。

思わず感嘆の声漏れるほど、濃い緑葉の中で白と赤の椿がその色を競いあつて咲き誇り、そこは冬とは思えない空間だった。

フォンティーヌに負わされた傷も癒え、今日は午後から念願だったマリユスとの茶会が控えており、居間を飾る綺麗な花を持ち帰ろうと夢中になって鋏を入れていた。

そんな時だった、声を掛けられたのは。

「お嬢さん…」

華麗に咲いた花の間から、その紳士はまっすぐにアヤカーナのほうに歩いて来た。

アヤカーナは、男が毛皮の多くあしらわれたガンシユの衣装を纏っていることに気付く。

「あら、ガンシユの方なのですね。」

ふわりと微笑って首を傾げる仕草に男は目を細め、記憶の底から浮かび上がる女性の姿を重ねていた。

この娘、マリユス殿下の生母ユルシユール殿に瓜二つだ…。

ガンシユ最南の片田舎に位置するハイデン領主の娘ユルシユール…。

あれは二十年以上も昔、ガンシユの首都ヒツプノウルにまで聞こえた美女を確かめてやろうと、陛下に付き従い訪れた、林の中の領主館。果たして現れたのは、着古したドレスを纏った天使だった。その天使は馬上の高貴な人間には目もくれず、長い距離を酷使されて、荒い息を吐く馬を真つ先に労わった。

「可哀相に、お水をあげるわね」

一人の人間を前に、茫然自失とした陛下を見たのは、後にも先にもあの一度きりだ。それは同時に己の片恋の始まりでもあった…。天使に魅入られたのは陛下だけではない。

あの時の^{あた}辺りにたちこめた萌え立つ緑の匂いを、私は今もはつきりと思い出せる。

「ユエール？さんという方をお探ですか？」

ユルシユールの幻が静かに消えて行き、不思議そうな眼差しを向けた令嬢が彼を夢から呼び醒ます。男は、はっとして口を開いた。

「申し訳ございませんでした。私は、ガンシユのフィリップ・ケープと申します。」

お嬢さんが私の知っている令嬢に似ていらしたので、つい懐かしくて。」

そう言うと、フィリップ・ケープは魅惑的な微笑を浮かべて、彼女の方に身を屈めた。

「お名前をお聞かせ願えますか」

ケープには予想が付いていた。ユルシユールには妹がいた。その妹セイラはケセン王妃でありマリユス殿下の養母のようなもの、この娘はパーレス皇太子の許婚ケセン王女アヤカーナだろう。

美しい瞳に正視されアヤカーナは戸惑った。このように声を掛けられたのは生まれて初めてだ。

彼女は躊躇^{ためら}いながらも、ガンシユの人ならマリユスの部下ということ、それなら警戒する必要もないと思い、口を開き答えようとした。

途端、護衛に付いていたフィイが彼女の前に手を出して、それを阻んだのだった。

アヤカーナが気を取られている間に彼は、フィリップ・ケープへ警戒の一瞥を投げつける。

「失礼致します。」

「さあ、お時間が過ぎております。戻りましょう。」

フィイの柔らかな微笑みにつられ、アヤカーナも微笑み返す。

「はい。」

アヤカーナは急ぎ立てられる様にフィイに従い、ケープの前を通り過ぎた。

庭園を出た所で振り返ると、彼はまだその場に佇みたたずこちらを見詰めている。

「あの方は私を誰と間違ったのかしら。」

「フィイはユエールかユシエールさんという女性をご存知？」

アヤカーナは歩調を緩めて、後ろについているフィイに並び訊ねた。

並んで歩きながら、フィイは丹念に記憶を探ってみるが思い当たらない。もう一人の護衛騎士に視線で訊ねてみれば、あちらも首を横に振った。

「私はそういうお名前の方は存じあげませんが。その方がどうか致しましたか。」

「ううん。ただ、なんとなく。」

フィイは人知れず溜息をつく。アヤカーナに会ったのはあの事件以来八日振りだった。

見た目の傷は癒えたようなので安心したのだが、以前の彼女とは何か違っていた。無邪気な愛らしさが前面に押し出された華やかな感じの少女に、なんと言うか、何かに耐えているような儂げな哀愁が加味され、女性らしさが増している。これから益々大人の女性へと成長なさるのが窺える。

殿下のご苦勞が思い遣られる。事実自分も今朝の再会時、王女に

“助けてくれてありがとう”と抱きつかれ、つい本気で抱き返していた。主従としてではなく、男女を意識してだ。あの場に殿下が居られなかったのが、幸いだったと心底思う。但し隊長は居たが……。タンギューの顔を思い出し、フィイの顔が引きつる。

先程のガンシユ貴族との接触も報告を上げた時点で、私は隊長からこつ酷い咎めを受けるだろうな。思わず自嘲が漏れる。

…とつ、とにかく、殿下もまさか自分の妃を東宮に閉じ込めておくわけには行かず、他人へ微笑みかけるなとも言えまい。

気を取り直して彼女に一言注意を促す。

「アヤカーナ様、誰に声を掛けられても決して口をお開きになりませんように。」

胸にそつと抱いた冬椿の芳しい香りが鼻を撥る。アヤカーナの意識はすでに白い椿の花へと移っていた。

綺麗なお花。部屋へ戻ったら髪にも飾って貰おう。マリユス従兄様は何ておっしゃるかしら。

でも最初はドューに見せなきゃ。ドユランを想いアヤカーナは相好を崩す。

フィイの言葉など届いていなかった。

「え？フィイ何かおっしゃった？」

フィイは天を仰ぎ肩を落とした。

「マリユス殿下の立太子式へは、パールレス帝国側として特使を臨席

させて頂きますが、今ここで何方が、ということはお答え致しかねます。

皇太子、妃両殿下というご要望ですが、式の時点ではまだ婚儀が済んでおらず、アヤカーナ様は妃殿下では無くケセン王女殿下というご身分であらせられますので、御二人での臨席はお考え下さいません様に。」

グリリフ宮殿暁の間、パーレスとガンシユの条約協議が行われていた。

残すは調印式の日時調整だけという段階で、ガンシユ側が、大幅に折れた見返りとしてパーレス皇太子夫妻のガンシユ立太子式参列要求を出してきた。今、その要求に対しての返答がなされているところだった。

宰相リキュウは、突如立太子式への参加を要請してきたフィリップ・ケープをそれとなく目で追っていた。

現在のガンシユの要は宰相アニスだ。彼に可愛がられているというリベラ伯フィリップ・ケープ。40代には見えない洒落者で魅力的、才覚に富んだ男と聞いていた。我が国のイズミク公はこの男ケープに乗せられ道を誤ったのだ。公は若輩マリユスを手玉にとつて動いていたつもりが、実は背後にいたケープに踊らされていたという訳だ。

王は後継者としてマリユス王子を認め、アニリスやケープまでもがマリユスの後見に付いた。はてさて、金鉱脈だけが理由だったのか。

そのケープが要求を口にした途端、デュランとマリユスの顔色が同時に変わった。デュランは無論、ケープの主であるマリユスさえも知らなかった展開ということだ。

手駒イズミク公を失い昨日まで大人しかった洒落者が、にやにやと頬を緩め何を思いついた？

リキュウは無表情の仮面の下でケープの動向から眼を離さない。

場の重い空気など意に介さず、ケープはにこやかに切り返す。

「貴国側はそれで結構ですよ。」

王女殿下への招待はケセン国へ申し出れば宜しいのですね」

そこかしこから息を呑む声上がる。ケセンがガンシユに対し、否を言えない事は誰しもが知っていた。パーレスが駄目だと断言している申し出を、ケセンに覆させると言うつもりか。なぜ急に、ガンシユの立太子式などを出すのか、その場の全員が疑問に感じていた。

デュランはダズンを呼びつけ何やら話し合っている。

マリユスでさえ卓上の拳が震えている。怒りを堪えているのだ。

顔が怖いですぞ、殿下。女如きで顔色を変えてはなりません。リキユウは心の中でデュランを叱る。

敵に弱みを握らせる訳には行かない。デュランが動く前に何とかせねば…。

今迄一言も発する事無く、ガンシユとパーレスのやり取りを見守っていた宰相リキユウが、テーブルを軽く鳴らし身を乗り出す。それだけでざわついた場が静まり、パーレス宰相の発言を皆が固唾を呑んで待っていた。

「ほう、面白い発言ですな。ケープ殿。

何故、ガンシユがパーレスの皇太子妃に手を伸ばされるのか。

まだ、不可侵条約の調印は済んでおらぬことを肝に銘じ置くほうが宜しいぞ」

鋭い眼光を放つリキユウにぴしゃりと切り捨てられ、ケープは顔を赤らめ引くしかない。

「これは閣下、王女殿下はマリユス殿下の幼馴染と聞き及んでおりました故の申し出です。他意はございません。

出過ぎました、お許し下さい」

すくすく引き下がるケープの姿に、デュランはにやりと口角を上げ、マリユスは緊張を解いた。

やれやれ、二人とも失格だ。リキユウは二人の様子に心の中でぼやく。

こちらへ諂へついながら、ケープが見せた一瞬の鋭い眼差しを老獪は見逃さなかった。

この痴ケープれ者はデュランとマリユスのケセン王女への反応を確かめていたのだ。

1・(後書き)

冬椿〓山茶花をイメージしています。

寒椿だと頭がポロツと落ちちやうので、

花びらが散っていく山茶花がGOODです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1963o/>

杜の都で待つ人は

2011年2月25日00時10分発行